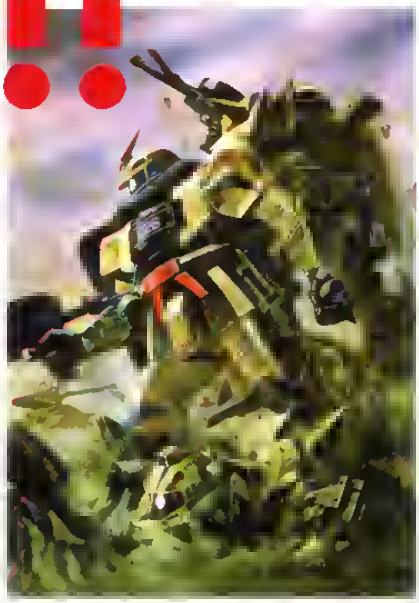
MSV
THE FIRST

MOBILE SUIT VARIATION
MSV 全書

初期MSVの
熱き魂再び

原点がここに!!



MSV

THE FIRST

MOBILE SUIT VARIATION
MSV
全書

初期MSVの
熱き魂再び

原点が、ここに

CONTENTS

004 PROLOGUE

006 PLAYBACK MOBILESUIT VARIATION
Part.1 MSVはじまりの4機 Part.2 連邦vsジオンバトル実像 Part.3 MSV歴史探訪

018 世紀の名機を解説！ MS-06R高機動型ザクⅡ対FA-78-1フルアーマーガンダム

018 MSV機体解説

ザク編 ①
MS-060ザク・デザートタイプ／ MS-06Kザクキャノン／ MS-06Mザク・マリンタイプ／ MS-06Fザク・マインレイヤー／
MS-06Eザク強行偵察型／ MS-06E-3ザクフリッパー／ MS-06Vザククンク／ MS-06W作業用ザク／
MS-06Zサイコミュ試験型ザク／ MSN-01サイコミュ高機動試験型ザク

ザク編 ②
MS-06R-1A高機動型ザクⅡシン・マツナガ専用機／ MS-06R-1A高機動型ザクⅡ黒い三連星専用機／
MS-06R-1A高機動型ザクSエリック・マンスフィールド専用機／ MS-06R-1A高機動型ザクSマサヤ・ナカガワ専用機／
MS-06R-1高機動型ザクS（初期型）／ MS-06RPプロトタイプ高機動型ザク／
MS-06R-2高機動型ザクSジョニー・ライデン専用機／ MS-06R-2高機動型ザクⅡギャビー・ハザード専用機／
MS-06R-2高機動型ザクSロバート・ギリアム専用機／ MS-06FSガルマ専用ザク／
MS-06Fドズル専用ザク／ MS-06Sシャア専用ザク

ジオン公国軍機編
YMS-07プロトタイプグフ／ MS-07Bマ・クベ専用グフ／ MS-07C-3グフ重装型／
MS-07Hグフ飛行試験型／ MS-07H-4グフ飛行型／ MS-07C-5グフ試作実験機／ YMS-0SA高機動型試作機／
MSN-02ジオング（パーフェクトジオング）／ YMS-09プロトタイプドム／ YMS-000ドム・トロピカルテストタイプ／
MS-14B高機動型ゲルググ ジョニー・ライデン専用機／ MS-14Cゲルググキャノン

地球連邦軍機編
RX-7S-1プロトタイプガンダム／ RX-78-3 G-3ガンダム／ FA-7S-1フルアーマーガンダム／ RX-7S-2ガンダム／
RX-77-3ガンキャノン重装型／ RX-77-4ガンキャノンⅡ／ RX-77-2ガンキャノン／ RX-75ガンクンク／ RMV-1ガンクンクⅡ／
RGM-79SCジム・スナイパーカスクム／ RGM-79Lジム・ライトアーマー／ TGM-79ジム・トレーナー／ RGC-80ジム・キャノン／
RGM-79ジム／ RO-79ボール／試作機RX-76 ／ SP-W03スペース・ポッド／地球連邦軍の航空戦力

060 MSVイラストギャラリー

076 その後のMSV MS-Xとは!?

077 MS-X機体解説
MS-10ペズン・ドワッジ／ MS-11アクト・ザク／ MS-12ギガン MS-13ガッシャ／
MS-17ガルバルディ（α）／ FA-7S-2ヘビーガンダム

読み物／インクビュー

084 MSVの起源

088 MSV映像記録傑作選

092 MSVの証言① 対談 MSVとストリームベース インタビュー 小形雅弘インタビュー

097 MSVの証言② インタビュー 中田雅弘インタビュー

102 MSVの証言③ 川口克己インタビュー

107 MSVの証言④ 松本悟インタビュー

MSV
THE FIRST

熱狂がムーブメント

なぜ「MSV」は熱狂的に迎えられたのか

オリジナルのMSVを今一度振り返る

あらためて説明するまでもないは重々承知だが、本書のテーマMSV」とはモビルスーツバリーションの略である。一応おさらいしておくと「機動戦士ガンダム」に登場したモビルスーツの様々なバリエーションモデルのことであり、主に雑誌などのメディアと模型で展開されていた。

現在でこそMSVは、ガンダムの新作放送に並行し、オフィシャルのいわば「外伝」として組み込まれている企画ものというイメージだが、当初はロボットアニメ界における新しい潮流であり、一種の熱狂を持って迎えられたムーブメントといえるものであった。

本書では初期、つまり「機動戦士ガンダム」の系譜にある「原初のMSV」の魅力を今一度紐解いてみようというものである。今回、大きな特色として、MSVの生みの親の一人で、キーハーソンである「ストリーム・ベース」の小田雅弘さんにご登場いただき、当時の、ことを伺いつつ、可能な限りの機体解説をいただいている。ここに収録した小田さんの発言は、あくまで当時の設定によるもので、現在のオフィシャル設定と必ずしも同じではないことをお断りしておく。てはなぜ、当時と今の設定が概ね同じながら、細部で違いがあるのか。当時は「ガンダム」という作品が、現在に至る長寿コンテンツになることを予見していた人は、一人もいなかった。そもそも『ガンダム』のシリーズ作品とは、基本的に同じ世界観の連続であるものの、当然例外もあり、長年作り続けられたがゆえ、ことに時代性を背負うのは当然のことだった。そして、カンタムワールドを一つの連続した世界として扱えた場合、旧作の要素は経年変化に合わせて微修正させるを得ないし、新作が登場するのは、当然のことだった。こうやって、ガンダムワールド」は作り続けられてきたわけである。その見方をすれば、オリジナルのMSVを紐解くことは、ガンダムワールドを紐解くことにもなるだろう。

ご存知の通り「機動戦士ガンダム」という野心的作品は、昭和54年の秋の一人で、キーハーソンである「ストリーム・ベース」の小田雅弘さんにご登場いただき、当時の事情による放送打ち切りの憂き目に遭いながらも、ロボットアニメの新たな潮流（サブカル層、中高生の熱狂的な支持）を生み出すに至った。1年あまり経った昭和56年3月に劇場版が公開されたのだが、ガンダムブームと呼ばれるほどのガンプラ（ガンダムプラモデル）製品に最初に火がつけられたのは、放送終了後の昭和

ファンの生み出した

HOW TO BUILD GUNDAM で、

55年7月で、爆発的に売れ出すのは、先の劇場版第一作の公開前後からだ。それがやがて小学生も巻き込んだ大「ガンダムブーム」が起きることになる。そしてMSVもまた、こうしたブームを素地としつつ、模型関係から盛り上がっていったムーブメントといえた。

ではなぜMSVが熱狂的に受け入れられたのか？　それはTVアニメの画面の中という、与えられたものの外側に、新たな世界を見せてくれたからかもしれない。自分たちの好きな「ガンダムワールド」の多様性、つまり作品世界の想像の余地をさらに広げる起爆剤、それがMSVの存在意義だったろうし、「自分でも好きなことが創りだせる」という、模型遊びへと刺激も刺激みがよかった。

といってもMSVという言葉は最終的に製品化する時に名付けられたタイトルであり、最初は各メーカーが草の根的に「ガンダムの表現で新しいことをやる」という仕掛けだった。もちろんキーになるイラストの多くは大河原邦男さんによるもので、草の根ではないのかもしれないが、「映像外の物語」であることは、当時の少年たちにとっても「クラスで自分だけが知っている感」があり（←妄想）、新鮮だったのだ。

当時少年だった僕たちは、「ガンプラブーム」の端緒に発売された「月刊ホビージャパン」の別冊

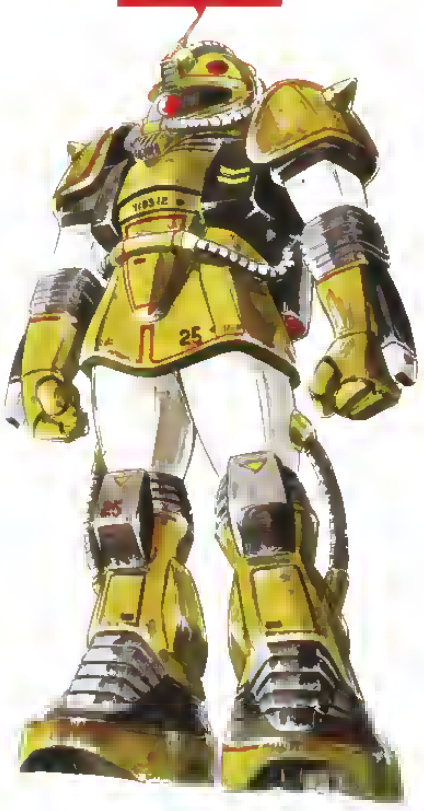
55年7月で、爆発的に売れ出すのは、先の劇場版第一作の公開前後からだ。それがやがて小学生も巻き込んだ大「ガンダムブーム」が起きることになる。そしてMSVもまた、こうしたブームを素地としつつ、模型関係から盛り上がっていったムーブメントといえた。

ではなぜMSVが熱狂的に受け入れられたのか？　それはTVアニメの画面の中という、与えられたものの外側に、新たな世界を見せてくれたからかもしれない。自分たちの好きな「ガンダムワールド」の多様性、つまり作品世界の想像の余地をさらに広げる起爆剤、それがMSVの存在意義だったろうし、「自分でも好きなことが創りだせる」という、模型遊びへと刺激も刺激みがよかった。

といってもMSVという言葉は最終的に製品化する時に名付けられたタイトルであり、最初は各メーカーが草の根的に「ガンダムの表現で新しいことをやる」という仕掛けだった。もちろんキーになるイラストの多くは大河原邦男さんによるもので、草の根ではないのかもしれないが、「映像外の物語」であることは、当時の少年たちにとっても「クラスで自分だけが知っている感」があり（←妄想）、新鮮だったのだ。

当時少年だった僕たちは、「ガンプラブーム」の端緒に発売された「月刊ホビージャパン」の別冊

TYPE-B



水中用ザク
サク・マリンタイプ

後に　サク　マ　ヌイプ　とも　た局地戦用機　当初は
深海作業用の機体と　　設定され　　頭頂部のハイフ
ョン　イ　ルを兼ねた予備動力ハイフとな　ている

TYPE-A

湿地戦用ザク

　　基調の6色迷彩を施されたサク　ボテ　に振られ
　レフ　　トはそれぞれ配色を示している　機体とし
全身に防湿加工が施され　水中戦も可能とされる

PLAYBACK
MOBILESUIT VARIATION
Part.1

MSV
はじまりの4機

すべてはここからはじまった!!

モヒルスーツバリエーション=MSVは、たった4点のイラストからはしまった。それは　機動戦士ガンタム　が大きく「ブーム」になる端境期に、突然登場したものたった。それはたった4点たったが衝撃的てあり、後の「MSV」とは、また違った意味での登場の必然性かあったのた。

MSVの基礎となった大河原邦男のイラスト

MSVは4点のザクのイラスト　始まったということに、異を　人はいないたろう　このハ　掲載した4点がそれてある　これは、大河原邦男によるイラストこそ、劇場版の　機動戦士ガンダム　公開直後、すなわち昭和56　1981　月の春、講談社の　テレビマガジン　のムック　劇場版　機動戦士ガンダム　アニメグラフ　ックス　の誌上で掲載されたものた。この本は、劇場版第1作目の内容、当　た構成たが、その中で　出発点の特異的にこのイラスト1　点か掲載されている　しかも、その解説も最低限の文字数、内容も後のMSVとは異な　ている　コ　ータイトル　も英語で書かれて　明不足とも取れかねない謎いものたった

描かれた　湿地戦用ザク　は、いわゆるカラーハリエーションたが、水中　深海作業　用ザクや　砂漠戦用ザク、ザクキャノン　航空機迎撃用ザク　は、本来のサクとはテサインか違う改造機である　名称もそれぞれ異なっているが、後にMSVにそのままのテサインで採用されている

これは当時のテレビマガジンの社外編集の協力者であり、後のMSVや　フラモ紅四郎　の仕掛け人である安川尚志が、大河原にイラストを依頼したのかきっかけで、大河原の力から　サクのハリエーションモテルを描きたい　との急回かあり実現したものといわれる　実際には　このイラストの和後にも大河原は映画ホスターや雑誌の版権イラスト、小説版の表紙挿絵など　　　　　　は違うカ

ザクキャノン

接近戦における航空機迎撃のために開発されたザク　名称や外観はMSV時でも踏襲されているか　当初　肩部キャノン砲はビーム兵器という想定なのか最大の違いだ

砂漠戦用ザク
ザク・デザートタイプ

砂漠戦用に改造されたという設定のザク　地中での行動も考慮に入れ装備になっているという　MSV登場時と外観がほとんど変わらない点は水中用ザクと同様である

ODA'S COMMENTARY

もともとは構造図の発注をしたのだけれど　この４機か上が　できたんたそうです　僕たちはこの画を渡されて、「とう料理するか」を考える役割だったんてす　大河原さんのイラストは　本編のものよりも色味が多かったんですよ　また連邦軍の意匠もちょ　と入っていて　それをどうするのかを苦労しましたね

K型（サクキャノン）の型式番号にあるKはキャノンの意ではなく　カノーネン（カノン砲のドイツ語読み）のKなんですよ　Cがすでにあったからにしたわけしゃありません。でも　本当はあからさまにKを使うのは嫌だーたのでJ-12とかにしていたのですか　煩雑すぎると言われたので「いいや　Kで」となったんですね　本当に兵器マニアだったらJ-12の方がそれらしいと思うのですけれど　（小田）

いわゆる　リアルタイプ系　イラストを披露していたか、大掛かりにデザイン変更にまで踏み込んだのは、おそらくこれが初めてのことであった　これらのバリエーションは大きな反響を得て、後の　ＭＳＶ　の源流となった

ここまでの流れは、ある種戦略的なものでもあった　『ガンダム』を製作した日本サンライス　現・サンライズ　は、ヒットの要因のひとつに　ミリタリー　があると見ており、放送終了後、ハイターゲット層を中心に盛り上がり続ける　ガンダム』に、ミリタリー的な要素を追加投入することで、さらなる人気獲得を目論んでいた　同時に、ミリタリーをさらに推し進めた別作品の企画も起ちーげ、これか昭和56年から放送の『大陽の牙ダグラム』となるのだ

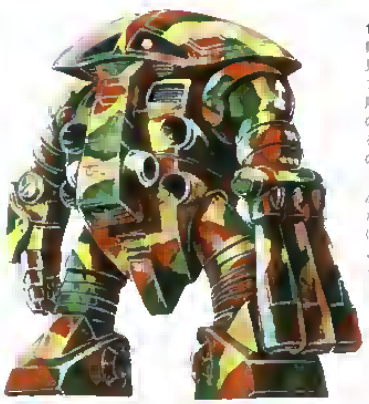
実際『ガンダム』の仕掛人の人である当時のサンライスの企画部長、山浦栄　後に社長）は、大河原に　連のイラストを　好きに描いていい　と伝えていたという　つまり、その結果が「リアルタイプカラー　であり、そこからＭＳＶ　へと繋がっていったわけだ

大河原はこの時期、『ダグラム』のデザインと、『ガンダム　のリアルタッチの版権イラストを同時進行していた　他にも『タイムボカンシリーズ』なども並行していたのだから、これは驚くべきことだ　これらにおける共通項を見ると、大河原が、当時のファンが何を希求していたのかを的確に感じ取っていたことかわかる

つまり、ＭＳＶ　のファーストステップは御大・大河原邦男の功績によるものであったのだ

砲撃能力に主眼にしたアッガイバリエーション

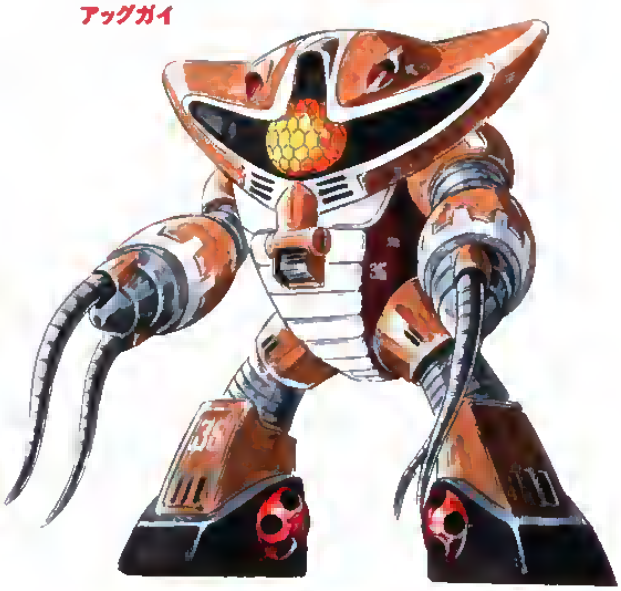
MSM-04G
ジュアッグ



↑←こちらもアッガイ、肩けすぐちすの風防たか見た目通りの火力重視タイプ こうした「見たたけで周辺が想像できる」というのもMSVらしさといえるたろう 下図のソコクの腕を装備した迷彩連装機関砲尾氏の作はやはり渋いたた当時の子どもたちにとって疑問たったのは「なんでジュアッグたけ1100か出ないんたろう?」で未た解明されてない謎である

複眼アイの奇怪なアッガイバリエーション

MSM-04N
アッグガイ



↑←両腕の2対のムチとトゲロットはともかくモノアイが昆虫のような複眼模様になていてパと見は「カンダムと別世界の怪獣ロボ」といた風貌たたがザクレロを作るジオン公国重なちやりかねないと思わせる説得力がイラストにはあた下イラストは増尾隆幸によって描かれたバリエーションだが大河原氏のものと比へマクロと渋さか増しているのが特徴た

PLAYBACK
MOBILESUIT VARIATION
Part.2

幻の傑作機!?
試作メカシリーズの実像

「MSV」のもうひとつの流れとしては、バリエーションモデルではなく、まったく新規の機体が登場するというものもあった。その代表がいわゆる「アックシリーズ」と呼ばれる、水陸両用機のシリースた。これらの登場もまた、様々な事情によるものではあるか、これらからもまたMSVの真実が見えてくるのた。

TVシリーズからMSVへの布石はあった!

MSVの源流として、もうひとつ忘れてはならないのは、TVシリーズ第26話「復活のシャア」において、連邦軍ハルファスト基地ール将軍がホワイトベースのたちに話す場面た「ガンの機か呼び水になった」と言いながら、敵のモビルスーツ開発情報をパネルに提示するシーンであろう これは、もともとシリーズ後半に、様々な敵の新兵器(モビルアーマーが出てという展開の布石といえるものであった しかし、当時のファンたちが注目したのは、レビル将軍か話す後ろのモニターに映るモビルスーツの設計図的な画面たったこれは画面に登場していない機体か、あの世界にはまたまだあるはず」という想像と期待を抱かせるには十分たった そういったファンの想像力はMSVが受け入れられる土壌を醸成したといえるし、それは現在にまで繋かっている

それから時は経ち、カンフラファンの中、製品化されるタイか出尽くすという事態を受け、登場したのがいわゆるアックシリース の試作メカである これらは、元は富野喜幸 山根季 監督による、放送当時に本編に登場させるく描かれたラフスケッチ トノメモか、、、ありと

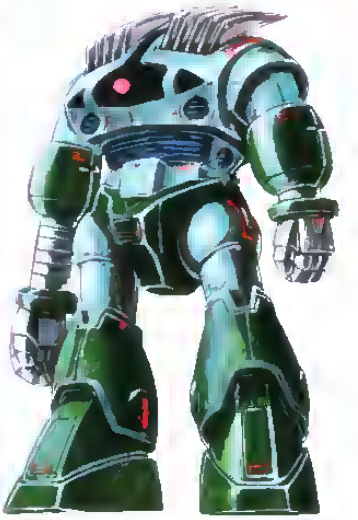
掘削能力で地中を潜航する潜入工作の要!?

EMS-05
アッグ

↑両腕部の掘削用ドリルが目を引くアッグ。デザインは2点とも大河原氏によって描かれている。頭身バランスがかなり圧縮されてコロコロモビルスーツぽさは薄いが地下にあるジオフロート基地への侵入経路を確保するための掘削作業を行う機体という設定にワクワクする反面、結局はホバー移動に終わったという解説に妙に納得してしまうのもアッグの魅力だろう。

水中戦よりも陸戦における格闘戦を重視!

MSM-08
ゾゴック



↑←全体的なシルエットは水陸両用MSを踏襲しているが、ハリハリの格闘戦仕様のゾゴック。下図の増尾氏による塗装ハリエーションは、ジオン公国軍っぽい仕上がりで、プラモデルを製作する際の指針といえた。また、頭頂部と腰部に装備したブーメランミサイルやワイヤーカッターといった突飛な特殊武器に対し、当時の子供たちの頭の中は？で満たされ、困惑していた

それを後に大河原邦男が仕上げたものである。これはラインナップ不足から発してはいるが、MSVの源流となったのは疑いようがない。

これはガンダムか、もし当初の予定通り50話まで制作された場合、ここに登場する予定だったキシンやガッシャと同じボノメカなのか。当時の少年たちにしてみれば、レビル将軍の指した設計図を連想させるには十分であり、アッグと突っ込むのも無理はない。

しかし、アッグシリーズ（正確にはゾゴックは別扱いだが）は、富野監督のアイデアがベースとはいえ、そのデザインからキワモノ扱いされがちなMS。しかし、このページの3点のイラストは、当時のMSイラストを手がけた二人、増尾隆幸の作も含まれており、カトーリンクや部意匠が変更されることで、アッグリースがガンダムの世界に馴染み、よりリアルに見える、こうした手法こそがMSイズムというべきものであり、ここがしんなメカに対しても、これはリアルじゃないと否定せずMS的なリアルに味付けを考えるそれこそがMSの本質であるということからくる。

つまり、それについて考え、検証することにより想像できる幅と魅力を見出すことこそ、非常に玩具なこと遊びの本質なのだ。

月日	おもな作品 できごと
4月26日	**機動戦士ガンダム　放送終了　全43話**
4月29日	バンダのホアンホアン、上野動物園来日
3月2日	銀牧ロボ　トライダーG7　放送開始
同日	銀子戦隊デンジマン　放送開始
同日	タイムボカンシリーズ　タイムパトロール隊オタスケマン、放送開始
3月15日	ドラえもん　のび太の恐竜　公開　東宝系配給
同日	ゃ同時上映　モスラ対ゴジラ
同日	火の鳥2772　愛のコスモゾーン　公開　東宝系配給
同日	銀河鉄道999　ガラスのクレア　公開　東映系配給
同日	ふ東映まんがまつり　同時上映　センタマ　花のアルルン　ほか
4月19日	宇宙大帝ゴッドシグマ　放送開始
1月1日	ボカリスエット発売　大塚製薬
2月2日	ウルトラマン80　放送開始
3月3日	銀河鉄道999、永遠の銀人エメラルダス、放送
4月4日	ムーの白銀　放送開始
6月26日	地球へ……　公開　東映系配給
8月28日	ゲーム&ウォッチ発売　任天堂
6月8日	伝説巨神イデオン　放送開始
7月30日	ロマンアルバム　エクストラ35　機動戦士ガンダム　発売　講談社
同日	宇宙戦士バルディオス　放送開始
8月1日	**バンダイより　機動戦士ガンダム　プラモデルシリーズが発売**
	・第1弾アイテム　144　1/144　RX-78　ガンダム
9月19日	牛丼の吉野家創業
10月1日	ルービックキューブ発売　ツクダオリジナル
11月2日	ヤマトよ永遠に　公開　東映系配給
12月1日	新宿バス放火事件　練京新線西口、6人死亡
同日	フクムーン　放送
	24時間テレビ　愛は地球を救う　肉のアニメスペシャル
1980年1月7日	とんでも戦士ムテキング　放送開始
2月2日	鉄腕アトム　放送開始
3月1日	銀河鉄道999　君は覚のように愛せるか？　放送
4月2日	鉄人28号　放送開始
5月3日	※後にテオノアールに変更　太陽の使者　鉄人28号へと改題
6月7日	宇銀戦艦ヤマトIII　放送開始
7月19日	ション・レノン射殺　アメリカ、ニューヨーク
8月20日	サイボーグ009　超銀河伝説　公開　東映系配給
9月11日	**1/60カンダム発売**
	・「可変式の一」イラ、ふとか付属
	・ターゲット装備の、ア専用ザク、重機型ザクも同時期に発売され
	最終、よりモノアイが発光する　ビキ球　敵色は別売　すれも価格は2000円　税別

1/144ガンダムパッケージ

PLAYBACK
MOBILESUIT VARIATION
Part.3

MSV歴史探訪

年表で振り返る MSV誕生と時代背景

「MSV」か「MSV」として成立するまでには、3年ほどの時間を要した。その間に「機動戦士ガンダム」を巡るムーブメントでは様々な事象が起きている。結果的には、様々な出来事の集積が後々製品化に繋がり、フラントとして名付けられた「MSV」に収束しているともいえる。ここでは、そんな「ガンダム」を取り巻く、時代背景を含んだその濃密な3年間について、年表とともに振り返ってみたい。

ガンダムの「リアル」を受け持った「ザク」

機動戦士ガンダム』は、ロボットアニメの革命児ともいえる存在として1979（昭和54）年から放送された。革命的だった理由のひとつとして、登場するロボットにモビルスーツという名称を与え、兵器として描いたことが挙げられる。これは従来のロボットアニメ」の商業的なターゲットである本就学児童～小学生といった低年齢層に加え、当時生まれつつあった中学生～大学生という層を中心に形成される、新たなアニメファン層も狙う野心的な試みであった。

その表地として、宇宙戦艦ヤマト」77年）やスターウォーズ」78年）などが作ったSFフームはホッカルチャーとしてもあったりトル以前には、戦記物ア

11月 約100年ぶりに新種の星　ヤンバルクイナ発見
13日 ロス疑惑事件発生
18日 下旬 宇宙戦士バルディオス　公開　東映系配給
29日

2月 6日 漫画　プラモ狂四郎　連載開始
所作：いしいひさいち　漫画：やまと虹一　原作：ほるなセビ　漫画：コミックボンボン　2月号より開始された
ガンプラ将棋倒し事故
千葉県ソニー新松戸店にあい、カンプラを買い求めた中学生がエスカレーターで将棋倒しになる　数十人が負傷、うち4人が重傷を負う
9日 リアルタイプ・シリーズ　1　100スケール　発売
第1弾はMS-06量産型ザク　MS-09ドム、全7種が発売され、いずれも既発売の1　100スケール製品の成形色を変更し、専用デカールが付属
13日 武闘メカ　ザブングル　放送開始
大戦闘コータクルV　放送開始
機動戦士ガンダムIII　めぐりあい宇宙　公開　松竹系配給
1000年女王　公開　東映系配給
タイムオカンシリーズ　逆転イッパツマン　放送開始
ホテル・ニュージャパン火災　東京赤坂　33人死亡
日航機羽田沖に墜落　24人死亡

3月 3日 東宇宙戦闘ダイラガーXV　放送開始
10日 1000年ぶり惑星直列
トラえもん　のび太の大魔境　公開　東宝系配給
15日 劇場版　機動戦士ガンダムIII　めぐりあい宇宙　アニメアートブック　発売　講談社
18日 東王のプリンセス　ハンキーモモ　放送開始
1日 HOW TO BUILD GUNDAM 2　発売　ホビージャパン
1カ月ごとに1体の模型作例集第2弾。09年、2冊をまとめた機動版が発売され、500円硬貨発行
6日 ゲームセンターあらし　放送開始
科学教幼稚テクノボイジャー　放送開始
戦国魔神ゴーショーグン　公開　東映系配給
開墾伝説アクロバンチ　放送開始

4月 ペットボトル開生　厚生省PET開飲使用許可
9日 東北新幹線開業　大宮　開開開
試作メカシリーズ発売
第一弾エアグカイ（1/48）　ガンダム　本編には登場しないMSを製品化、後のMSV-Rの先駆け的存在　1　100でも展開された
3日 SPACE・ADVENTURE コブラ　公開　東宝東和系配給
伝説巨神イデオン　接触開　発動章　公開　松竹系配給
開河期開ハクレンガー　放送開開
わか青春のアルカディア　公開　東映系配給

5月 テクノポリス21C　公開　東宝系配給
1日 アントロメダ　ストーリーズ　放送
6日 日本テレビ系列　24時間テレビ「愛は地球を救う」内のアニメスペシャル

↑劇場版III めぐりあい宇宙オスター

私とスレンターのリクを第一種装備で射出しろ！」たようなそれっぽい雰囲気　のセリフを入れることで、リアルに見える世界観　の構築に挑んでいた
「こんな中、いち早くモビルスーツ　に着目したのが、アーメッ　は異なる　部のモデラーた　飛行機や戦車のプラモデルを作　できた彼らは、カンダムのリタリーの要素にいち早く反応
　、箱庭なスケールモデルの世界とは違う、自由な空気を感じられる　ンダム　に自由に、プラモデル製品の発売前から、フルスクラッチモデルを製作して、自分たちの楽しみ方で　ガンダム　を吸収　ていった　そうした彼らが　連のMSVのムーフメントに参加することで、古くて新しい、もしくは　人人　ぼくて同時に子供っぽい　という、独自の世界が生み出されることになる
　こ、放送終了半年後、ハンより　機動戦士ガンダム　のモデルシリーズが発売開始とな　これは名者層の　ガンダム熱　を見ての動きだった
　Mシリ　公開された劇場版3部作には、メカニーンの新作カット　数多く描かれ、ハー　ア描写なしバンリースでは見られなか　描りも存場する　それは、ハイ　ケ　向けの部分を強化する施策とでは有効ともいえた　そ、劇場版第一作目公開後、M

1月 3日 海東大戦争　愛の2000マイル　放送
20日 第40代アメリカ大統領　ロナルト　レーガン就任
31日 絵強ロボ　ダイオージャ　放送開始

2月 7日 タイムボカンシリーズ　ヤットデタマン　放送開始
22日 太陽戦絵サンバルカン　放送開始
向日 アニメ新世紀宣言
※新宿駅東口駅前に、開催された劇場版公開を記念したイベント　約1万5千人が参加

3月 1日 黄金戦士ゴールドライタン　放送開始
2日 中国残留絵児47人、初来日
4日 百獣王ゴライオン　放送開始
14日 機動戦士ガンダム　公開　松竹系配給
向日 トラえもん　のび太の宇宙開拓史　公絵　東宝系配給
※同時上映「怪物くん　ピンク・レディー旅路公演

31日 Dr.スランプ　アラレちゃん　放送開始

4月 8日 劇場版　機動戦士ガンダムアニメグラフブック　発売　講談社
15日 新竹取物語　1000年女王　放送開始
16日 マザー・テレサ来日
22日 ロマンアルバム・エクストラ42　絵機動戦士ガンダム　劇場版　発売　徳間書店
30日 HOW TO BUILD GUNDAM　発売　ホビージャパン
※小田雅弘氏をはじめとする、モデラー陣によるガンダムの作例集
MSのバリエーションモデルやヒーロー、事統などの作例記事だけに止まらず
作例の撮影方法なども掲載されており、読者投稿の作例紹介の中には現有名モデラーの初期作品なども見られる

5月 22日 戦国絵神コーショーグン　放送開始
31日 機動戦士ガンダムII　哀・戦士　公開　松竹系配給

6月 1日 ロマンアルバム　エクストラ44　機動戦士ガンダムII　哀・戦士編　発売　徳間東店
11日 21エモン　宇宙へいらっしゃい！　公開　東宝系配給
向日 ・岡野上映「トラえもん」
絵河童遥3979　アンドロメダ応援絵　公絵　東映系配給
7月 3日 劇場版　機動戦士ガンダムII　哀・戦士編アニメグラフブック　発売　講談社
20日 ブレーメン4　地獄の中の天使たち　放送
23日 日本テレビ系列　24時間テレビ　愛は地球を救う　内のアニメスペシャル
27日 宇宙翔ける戦士達 GUNDAM CENTURY　発売　みのり書房
※ファンCUT　の増刊号と　して発売
カンダム　オリジナルスタ　フも制作に参加しており
後のカンダム　ムに多大な影響を与えた画
00年には復刻版が発売され　発売元　銀河出版　発行元　徳間書店

8月 15日 PC-6001発売　日本電気　新日本製気
21日 悪者バットリくん　放送開始
28日
9月 2日 六神合体ゴッドマーズ　放送絵絵
4日 ロボット8ちゃん　放送開始絵
6日 絵河旋絵ブライカー　放送絵絵
14日 うる星やつら　放送開始
15日 月刊コミックボンボン　創刊　講談社
ラモ狂四郎」などの漫画作品をはじめ
MSVなどの情報も積極的に発信され、07年11月に休刊

23日 太絵の牙ダグラム　放送開始

↑劇場版1　ポスター

↑劇場版II　哀　戦士ポスター

もあり、これはSFとクロスオーバーしていなくもなかったロボットアニメにそれらの要素を取り入れていた『ガンダム』は、リアルに作られた作品ともいえる。もっとも、『ガンダム』は当初、メカよりもキャラクター人気が先行していたのだが

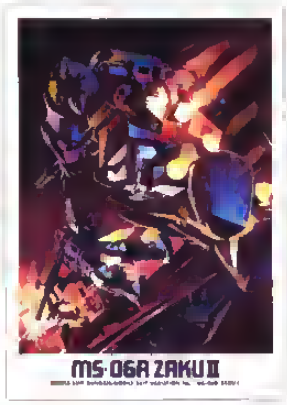
ロボットアニメとしての　ガンダム』において、メカ要素＝兵器の人気を受け持ったのは、主役メカの「ガンダム　だけでなく、「ザク」が占める部分も大きかった。そのイメージソースは、小説『宇宙の戦士』の挿絵におけるパワードスーツや、あるいは一つ目（モノアイ）の意匠は『宇宙空母ギャラクチカ』日本では79年から放送）のサイロン兵のデザインの影響を受けているかもしれない　また、物語中の存在としては、旧日本海軍の零戦などの第二次世界大戦の航空機や戦車といった兵器のエッセンスも取り入れているのは明らかだ　といってもTVシリーズ　ガンダム」の物語中には、リアルなメカ描写は、それ程描かれているわけではなく、カンタムを「絶対に強いスーパーロボット」前に描く、従来までのロボットアニメのフォーマットもある程度は残されていた　メインターゲット層の子供たちに配慮するのは当然　もいえたのだ

方で、第2話の時点でシャア　レーサイライ　に乗せて

2月 リニアモーターカー有人浮上走行実験成功
3月 バッテンロボ丸 放送開始
3月 超時空要塞マクロス 放送開始
4日 忍者マン一平 放送開始
7日 サイボットロッチ 放送開始
10日 スペースコブラ 放送開始
10日 レインボーマン ※72年放送の特撮ドラマをアニメ化リメイク作品
13日 わが青春のアルカディア 無限軌道SSX 放送開始
30日 FUTURE WAR 198X年 公開 東映系配開
15日 上越新幹線開業 大宮－新潟開
12日 戸塚ヨットスクール事件 訓練中の中学生死亡
23日 カート式公衆電話開通 電電公社
9日 未来警察ウラシマン 放送開始
20日 重空大作戦スラングル 放送開始
5日 聖戦士ダンバイン 放送開始
21日 科学戦隊ダイナマン 放送開始
28日 うる星やつら オンリー・ユー 公開 東宝系配開
3月 令回時上映 ジョン・フィダー アンドロメロス 放送開始
12日 宇宙の果てまで開検旅行 放送
19日 クラッシャージョウ 公開 松竹系配給
30日 幻闘大編 公開 東宝東和系配開
4月 宇宙戦闘ヤマト完結編 公開 東映系配開
光速電神アルベガス 放送開始

MSVシリーズスタート
上原1弾MS-06Rザク2－1/144 MS-06Kザクキャノン－1/144 YMS-09プロトタイプドム－1/144の3種

1日 美甲闘兵ボトムズ 放送開始
3日 キン肉マン 放送開始
4日 ハーマン 放送開始
5日 銀河疾風サスライガー 放送開始
9日 タイムボカンシリーズ イタダキマン 放送開始
15日 タイムボカンシリーズ最終作 東京ディズニーランド開園
26日 MS-06Dザクデザートタイプ－1/144、RGC-80ジムキャノン－1/144、
3日 MS-06M水中用ザク 1/144 発売
1日 日本海中部地震発生 死者・行方不明者104人
5日 MS-14Cゲルググキャノン 1/144、RX-78-1プロトタイプガンダム 1/144 発売
7日 プラレス3四郎 放送開始
6日 MS-07Hグフ飛行試験型 1/144、FA-78-1フルアーマーガンダム 1/144 発売
3日 魔法の天使クリィミーマミ 放送開始
1日 超時空世紀オーガス 放送開始
サイコアーマーコーバリアン 放送開始



↑1/144 MS-06Rザク2

↑1/144

に繋がることになる、前へ
進めた「テレビマガジン
『劇場版 機動戦士ガン
ダム アニメグラフブック』（講
談社 読上て、大河原邦男氏によ
るザクのオリジナルイラスト4点
が登場する 時代はまずビジュア
ル面からファンの満足度を追求す
る方向に加速していったのだ

ザクのバリエーションを産んだ『GUNDAM CENTURY』

また「劇場版 機動戦士ガンダム アニメグラフブック」の発売に遅れること1カ月後の8月に、みのり書房から月刊OLTの増刊号として『宇宙翔ける戦士達GUNDAM CENTURY』が発売された これは、『ガンダム』本編でも作品に協力していたスタジオぬえ のメンバーが製作の中心になった同人誌 Gundam の実質的な商業版という、作品製作のスタッフも多く携わったことから、オフィシャルのファンブックに近いものであった

ここには、フリティ・ワン作戦 週間戦争 からミノフスキー・クラフト・エネルギーCAP－AMBAC など、後の宇宙世紀における SF設定の基礎となる文章が書かれており、それらの記述の多くが公式設定へと昇華してい

に関する記述は、設定面でのMSVのルーツといっていいだろう 実際の兵器に見立て C型 などの発展の系譜が考案されただけでなく、高機動型の－R型 などの派生機も考え出され、開発メーカーにまで記述が及んでいたのだ

これはモデラーとして ガンダム のムーブメントに参加し、MSV コンテンツ成立の中心メンバーとなった模型サークル「ストリーム・ベース」の小田雅弘氏をはじめとした若者たちにとっても同様で、MSV成立に大きな影響をもたらしている

こうした一連の流れの中で、空前のガンプラブームが到来する劇場版 I、II良・戦I の公開を経て、生産が追いつかないほどの売一を見せるようになったのだ その原動力は小学生たちだった 彼らは朝早くから模型屋や玩具屋、はたまたデパートに並び、友達と集まってせっせとガンプラを買い求めていた そして、その頂点は、82年1月の千葉県松戸市のダイエーに起きた 将棋倒し事件 といっていいだろう この悲劇により、結果的に世間的にもガンダムが広く認知されるきっかけとなった 当時月産400万個といわれた生産数でも、まったく足りなかったのだ

世の中のブームは、まず先鋭的な猛者たちが飛びつき、一段落すると一般層が飛びつく

9日 ザブングルグラフィティ　ドキュメント太陽の牙ダグラム　公開　松竹系配給
11日 『同時上映　チョロQダグラム』
15日 キャッツ・アイ　放送開始
ファミリーコンピュータ発売　任天堂
『カセット交換式の家庭用ゲーム機として発売され　社会的ブームに』
21日 MS-06Eザク強行偵察型　1　144　発売
タイムスリップ10000年　プライム・ローズ　放送
『日本テレビ系列　24時間テレビ　愛は地球を救う　内のアニメスペシャル』
アキノ元上院議員暗殺　フィリピン・31日の調査には、100万人以上が参列
1月 1日 MS-06Vザクタンク　1　144、MS-14Cゲルググキャノン　1　60　発売
大韓航空機撃墜事件　乗客乗員269人死亡
2日 ヘットントン　放送開始
7日 特装機兵トルバック　放送開始
14日 試験管ベビー出生　東北大にて日本初の体外受精児
21日 銀河漂流バイファム　放送開始
2月 7日 MS-06Rザクキャノン　1　100、YMS-09局地戦型ドム　1　144、
YMS-09局地戦闘型ドム　1　100、MS-06Kザクキャノン　1　100、
MS-06Rザク2黒い三連星仕様　1　60、FA-78-1ガンダムフルアーマータイプ　1　60　発売
16日 機甲組世記モスピーダ　放送開始
3月 1日 MS-06Rザク2シン・マツナガ大尉機　1　100、YMS-09局地戦型ドム　1　144、
YMS-09局地戦闘型ドム　1　100、MS-06Kザクキャノン　1　100、
MS-06Rザク2黒い三連星仕様　1　60、FA-78-1ガンダムフルアーマータイプ　1　60　発売
3日 OKAWARI-BOY スターザンS　放送開始
4日 三井三池鉱業所有明鉱人災　83人死亡
10月 MS-06R-2サクII　ジョニー・ライデン少佐機　1　144　発売
11日 機攻運ガルビオン　放送開始
重戦闘エルガイム　放送開始
超電子バイオマン　放送開始
4月 4日 夢戦士ウイングマン　放送開始
7日 第14回冬季オリンピック　サラエボ大会開幕
8日 うる星やつらオ　ビューティフルドリーマー　公開　東宝系配給
11日 『同時上映　すかんぴんウォーリ』
東州ちゃん籠城事件　広島　14日犯人逮捕、15日遺体発見
5月 13日 銀村銀己マッキンリー冬季単独登頂成功後に行方不明
18日 MS-06E-3ザクフリッパー　1　144、MS-06Fザクマインレイヤー　1　144　発売
ルパン三世PARTIII　放送開始
ビデオ戦士レザリオン　放送開始
6月 3日 緑の谷のナウシカ　公開　東映系配給
4日 『同時上映　名探偵ホームズ』
11日 超人ロック　公館　松竹系配給
『同時上映　未来少年コナン　特別篇』
ドラえもん　のび太の編界大冒険　公開　東宝系配給
『同時上映　忍者ハットリくん　ムナカタニンジャ』
16日 江崎グリコ社長誘拐事件発生　21日自力で脱出
同日 ザブングルグラフィティ　ドキュメント太陽の牙ダグラム　公開　松竹系配給
『同時上映　チョロQダグラム』
17日 キャッツ・アイ　放送開始
ファミリーコンピュータ発売　任天堂
『カセット交換式の家庭用ゲーム機として発売され　社会的ブームに』
21日 MS-06Eザク強行偵察型　1　144　発売
タイムスリップ10000年　プライム・ローズ　放送
『日本テレビ系列　24時間テレビ　愛は地球を救う　内のアニメスペシャル』
アキノ元上院議員暗殺　フィリピン・31日の調査には、100万人以上が参列
7月 1日 MS-06Vザクタンク　1　144、MS-14Cゲルググキャノン　1　60　発売
大韓航空機撃墜事件　乗客乗員269人死亡
2日 ヘットントン　放送開始
7日 特装機兵トルバック　放送開始
14日 試験管ベビー出生　東北大にて日本初の体外受精児
21日 銀河漂流バイファム　放送開始
8月 2日 MS-06Rザクキャノン　1　100、YMS-09局地戦型ドム　1　144、
YMS-09局地戦闘型ドム　1　100、MS-06Kザクキャノン　1　100、
MS-06Rザク2黒い三連星仕様　1　60、FA-78-1ガンダムフルアーマータイプ　1　60　発売
9月 7日 機甲組世記モスピーダ　放送開始
16日 MS-06R-2サクII　ジョニー・ライデン少佐機　1　144　発売
10月 7日 YMS-09プロトタイプドム　1　100、MS-06RザクII　1　30　発売
『1/30のザクII、リキート製品　一種の発泡スチロール成形された製品
販促用資材とコ　小田雅弘氏との2ショット写真が有名だが　本人の知らないうちに写真が掲載されていた』
16日 MS-06R-2サクIIジョニー・ライデン少佐機　1　60、RGM-79ジムスナイパーカスタム　1　144　発売
三井三池鉱業所有明鉱人災　83人死亡
11月 14日 銀河漂流バイファム　放送開始
21日 ヘットントン　放送開始
12月 2日 特装機兵トルバック　放送開始
試験管ベビー出生　東北大にて日本初の体外受精児
7日 機甲組世記モスピーダ　放送開始
14日 銀河漂流バイファム　放送開始
21日 MS-06Vザクタンク　1　144、MS-14Cゲルググキャノン　1　60　発売
大韓航空機撃墜事件　乗客乗員269人死亡
28日 ヘットントン　放送開始

若きスタッフによって作られたMSVの基礎

大河原氏のザクハリエーションのイラストを皮切りに、『プラモ狂四郎』などの仕掛け人でもある編集者の安井尚志氏が舵取りし、小田氏や高橋昌也氏などが中心になって設定面などをまとめていく形で、後のMSVへの道が開かれていった。それは、新たなハリエーションモデル、付随するキャラクターや部隊など世界設定の創出であり、イラストや模型作例、文章など様々な手段で、『コミックボンボン』『テレビマガジン』だけでなく、『月刊ホビージャパン』など出版社をまたぐ形で露出され、次第に世の中に認知されていった。当時のスタッフが背景から、小田氏を含め、制作の中心にいたのは、高校生から20代前半の面々であった。この当時アニメ業界でも若者が台頭してきており、いわばチャンスの時代でもあったのだ。

ついに模型化が実現！その名もMSV!!

この動きの中で、プラモデルの発売元であるバンダイも無関係ではなく、販促用の印刷物、模型情報においても、MSV的なものを積極的に情報発信していた。一方、『ガンダム』のプラモデルシリーズは、82年になると、作中のモビルスーツにモビルアーマー、戦艦、果てはミデア輸送機やフィギュアまで、ほぼ全て商品化され、飢餓感の募る市場へ投入する新しい商品が必要とされていた。

現在、MSVといえば、映像作品本編と並行展開され、製品化される例が多い。しかし、当時は映像作品と関連の薄い商品が、市場で受け入れられるかは不透明であった。そのため、バンダイではリアルタイプや、ゾゴノクなどの試作メカといったシリーズなどを製品化し、ザクハリエーションを世に送り出す素地を整えていたのだ。そして、82年の秋にようやく商品化が発表され、この時、ブランド名としてモビルスーノハリエーション-MSVが正式になえられた。これらは83年の4月から発売が開始されたが、一大陽のヨダグラム放送終了直後というタイミングも手伝い、大ヒットを記録したMSVのTVコマーシャルが放送されたことからも、その人気のほどが知れる。

その人気の裏には、同じスタッフカ企画に携わる漫画作品『プラモ狂四郎』の果たした役割も大きいだろう。この頃をロボットアニメ作品の放送でみると、『聖戦士ダンバイン』放送開始直後から『重戦機エルガイム』の後半にさしか

2日 2日 2日 22日 16日 11日 7日 6日 5日 20日 1日 19日 4日 26日 21日 17日 14日 7日 7日 9日 5日 15日 5日

FA-78-1カンダムフルアーマータイプ 1/100 発売

巨神ゴーグ 放送開始
ゴッドマシンガー 放送開始
開発空組団サザンクロス 放送組織

MSN-01高速機動型ザク 1/144、RX-77-4ガンキャノンII 1/144、MS-06Z Zタイプザク 1/144 発売

グリコ森永事件発生

MS-Xシリーズ スタート

ユーウナーイン や 模型機械 絶上なこと 新 しMSのイラスト公開や作例写真が掲載されたが Zカンダム 放送決定を受け終了 製品化はされなかった 後年 ター商品やカ ト類なども一部商品化はされた 登場したMS群は後 ン計画機一なども時はれるよう になる

RX-78パーフェクトガンダム 1/144 発売

MSN-02パーフェクトジオング 1/250 発売

SF新世紀レンズマン 公開 東宝東和系配組
キン肉マン 公組 東映系配組
※同時上映「Tもかばちゃ」 宇宙刑事ノイダー 超電子ハイオマン
銀河パトロールPJ 放送開組
超時空要塞マクロス 開 おぼえていますか 公開 東宝系配組
バイス BIRTH 公組 東急ハンデオン系
※OVA作品 今ていいて ト上映として 早朝上映のみだが劇場公開された
第23回オリンピック ロサンゼルス大会組幕
地球物語 テレパス2500 公組 松竹富士系配組
※同時上映 エリマキトカゲ物語
大自然の開献ハギ 放送
※日本テレビ系列 24時間テレビ「愛は地球を救う」内のアニメスペシャル

MS-14日ジョニー・ライデン少佐用ゲルググ 1/144、MS-06R-2ザクIIジョニー・ライデン少佐機 1/100 発売

よろしくメカドック 放送開組
ふたり組 放送組織
機甲界ガリアン 放送開組
超力ホ ガラクト 放送組織
レンズマン 放送開組
星組士ヒスマルク 放送組織
北斗の組 放送開始
キャプツ・アイ 放送開始
第2期放送開始

RX-78パーフェクトガンダム 1/100 発売

この製品も、MSV シは終了 ごろ 全34種が発売され 一部の人気機体、トモエー・ 1でも製品化されている

キン肉マン 大開れー 正開超人 公組
※同時上映 ロ ラ し 宇宙刑事ノイダ

電撃戦開チェンジマン 放送組織

機動戦士Zカンダム 放送開始

↑Zカンダム番宣ポスター

↑1/250 パーフェクトジオング

↑1/100 カンダムフルアーマータイプ

かるまでという期間になる

『ガンダム』の続編にも影響を与えたMSV

方でハンダイとしては問題点もあった それは『ガンダム』の後継作が、『ガンダム』ほどのブームを作り出せすにいたことだった ハンダイ側は『ガンダム』の続編を望み、当初は難色を示した日本サンライズ 当時 側も結局は合意 機動戦士Zガンダム』の製作が決定する

しかし、制作決定が遅くなったことなどにより、新作のコンセプトであった 変形するモビルスーツ のデザインが、放送開始時に間に合わないという事態が発生した そこで急遽投入されることになった通常タイプのモビルスーツのデザインは、MSV的な要素を取り入れることになった

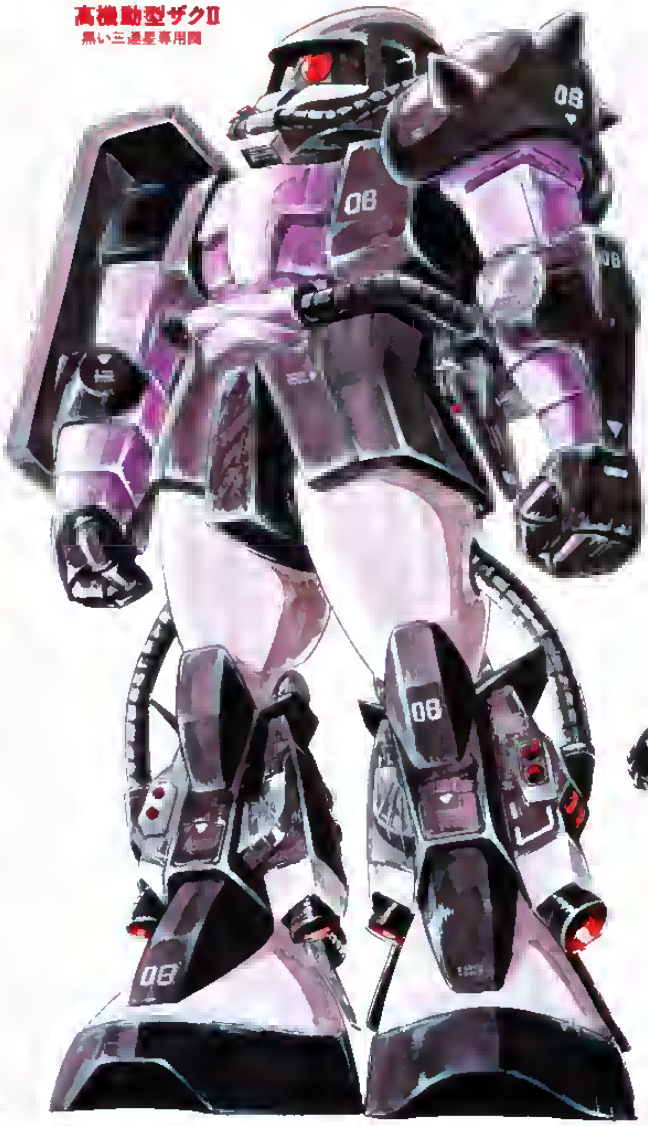
そして本命の主役機であるZガンダムの登場以降、モビルスーツは新たなステージを迎える そしてZカンダム でもMSVの企画は踏襲され製作されるが、それは最初からオフィシャルな存在として作られることになり、オリジナルの MSV が築いたかち位置とは微妙に変化していく しかし、その取り組みそのものは延長線上として現在にも繋がっているこのことだけでも、カンダム』のレーンに MSV のりえた影響かわかるというもの である

THE MATCH UP

世紀の名機を解説！

コレがホントのMSVだッ!!

MS-06R-1A
高機動型ザクII
黒い三連星専用機



小田雅弘が語る 06R 06R-2のひみつ

R-2の脚のフェアリングは既作機として位置づけるために、ノルエノとしてはドムの脚に似せています。あえてそんな単純なデザインにしたんです。

R-2は大河原さんではなく、宇宙健一さんと増尾隆幸さんにお願いしています。微妙にR-1とタンクの大きさも違うようにして、「もうちょっとで出来るのにな」とちょっと作る人泣かせにしたにしたんです。メノサーノュミノトBf109でいうと、「2機だけ作られたDB605L搭載の4枚プロペラのK14があったはずだ」云々という話がイメージソースにあります。

小田雅弘が語る 06R デザインのひみつ

G型というのはグスタフ（メノサーノュミノトBf109G型）なんですよ。グスタフなんで、ちょっと重い感じのデザインにしたい。グフの生産性が悪いので、それをサポートする形でザクの重戦型が出るはずだったんです。ところが出来上がってきたイラストは、G型とR型が混ざってきたもので　カラー稿は三連星のものだったんです。大河原さんはいつも発注どおりということははとんどなく、ご自身で考えられてデザインされます。だから、来た以上はR型にするしかないんですよ（笑）。現在ではもっとも気に入ったデザインの一つです。

小田雅弘が語る 06R 出現のひみつ

「GUNDAM CENTURY」に文字設定だけありました。大河原さんに発注した時にR型とG型を同時発注したんですね。R型はザクをスケールアノプしたようなガタイの大きい太めのザクとしてスケノチしたんです。発注の段階では太めの大型で、大型のバノクパノクを背負っていただけなんです。G型の方は僕がラフをつけたんですが、陸戦用のザクなんで、冷却関係も表面積が大きくなるように凸凹とかスリノトとか、自動車のラジエターみたいな意匠が盛り込んで出した。結果的にはそれが混ざって出来てきたんです。

MSV人気の2大巨頭 高機動型とフルアーマー

MSVにおいて、最大の人気モビルスーツといえば、誰もがふたつの機体を思い起こすことだろう　それは、MS-06Rこと高機動型ザクIIとFA-78-1フルアーマーガンダムだ　この2機はMSVが模型展開されている当時のTVコマーシャルにもメインの機体として登場しているくらい、人気の[illegible]た　本ページでは小田雅[illegible]による誕生秘話を紹介しているが、ある意味偶然から誕生した2機が、MSVの中心となるのは必然ともいえるものであった　それはなぜか。もちろんガンダムとザクという2人モビルノの非統的な強化型ということにあるのだろう　06Rの方は、見通しのザクのように見えて、脚部と背中のユーア・ユーノトが追加されていたデザイン的には、いかにも無理久理つけたと思うほどデザインラインが違う　しかし、この機能をひと目で表す異形さが、かえってカノコいい存在に見えた　それも元のザクのデザイン完成度が高かったゆえに、その異形が際立つことになったのだ

ノルアーマーガンダムは、ガンダムの火力、装甲の強化ハーンョンである　機で戦艦なみ、数機で艦隊なみの火力と能力を持つというスーハーメカである　か、実際そのコンセプトを組解くと、実はガンダムの火力と装甲を付[illegible]ると、[illegible]は、考えてみればガン[illegible]

FA-78-1
フルアーマーガンダム

小田雅弘が語るフルアーマーガンダム 出現のひみつ

元は板野一郎さんが描かれたアーマードガンダムがあって，パーフェクトガンダムになるわけです。安井さんに「MSVに入れてほしい」と頼まれたんですが，これは連邦軍の意匠とは違うので そのままは難しく「イヤだ」と言ったんです。ならばと，ガンダムに増加装甲を着けたらどうなるかということで整理して，それを大河原さんのところに持っていったら「面白いね」と描き上げてくださったのがフルアーマーガンダムなんです。

小田雅弘が語るフルアーマーガンダム 存在のひみつ

でも，こんなものが一年戦争の話の中にあっちゃいけないわけですよ。だから 実在がわからないように実戦に参加したかも不明だし，設計案だけが後で発見され，バーチャルリアリティの画面が作られて，それが戦後に発見されたかのように仕掛けたんです。これもそっとしたいアイテムだったんだけど，ものすごい人気が出てしまったんですよね。後に星山博之さんが「MS-X」でヘビーガンダムの設定を書いた時点で実在することになってしまったんです

小田雅弘が語るフルアーマーガンダム 名前のひみつ

フルアーマーのフルは非常に解釈が難しい。「フルプロテスタント」という言葉から引用したんです。「フルプロテスタント」はプロテスタントの一派が自身を「正しいプロテスタント」という意味で使った言葉で，戦場でのガンダムの戦果だけが連邦軍に届いて「ガンダムが何機かあれは戦着はいらないんじゃないか」となった。それには火器搭載量が足りないので設計された というのが僕の設定です。だから設定上では格闘戦に関するシークエンスは一切触れていないんです。

むしろガンキャノンの発展型ともいえる機体だ しかし，それがガンダムであるというところか，発明といえるのだ それまでのロボットアニメでは，「ガンダム」に限らず，たとえばゲッターロボやプロトカー電山Ⅳマシーンダーなど，複数のロボットが出てくる作品はあるが，どれもいくつかの機体に機能を分散していた それをより豊かな商品展開をするという手法だ ガンダムでもガンキャノン，ガンタンクとファイナップを製作しているが，フルアーマーガンダムは，それらを一体化，後メカであるガンダムに付与仮面ライダーで例えれば 技のライダー，力のライダーを合体させたV3のように，フルアーマーガンダムはキャラクター性を統合してしまったのだ つまり，カンダムというキャンバスにはなんでもあり ということを証明してしまったのだ 能力の付加と，能力の統合 それこそがモビルスーツの進化にふさわしいものだった 現在に至るまでも，高機動型とフルアーマーは，各作品のMSVにおいて，必須のテーマとしてデザインされてきた それはある意味，カンダムに限らず日本のロボットアニメの基本となっているともいえるだろう それだけこの2機の影響力の強さがわかろうというものだ

しかしその反面，その後のMSV展開に，これを上回るものが登場し得なかったことも事実だ それはつまりMSVにおいては，初期ですでにある程度完成されてしまったことを，この2機が図らずも証明してしまった

MS-06D

ザク・デザートタイプ

SPEC	
頭頂高	17.5m
本体重量	61.3t
ジェネレーター出力	976kW
スラスター推力	42,900kg
武装	頭部バルカン砲×2
	専用ザク・マシンガン
	ラッツリバー P-3連装ミサイルポッド
	SA-712クラッカーポッド、ほか

VARIATION
ダブルアンテナ

↑D型には右図のダブルアンテナタイプ以外に、投入された戦線や地域によって仕様の異なる機体も確認されている。

砂漠戦に特化したザクタイプ

前線の要望に応えて実用化された局地戦用機

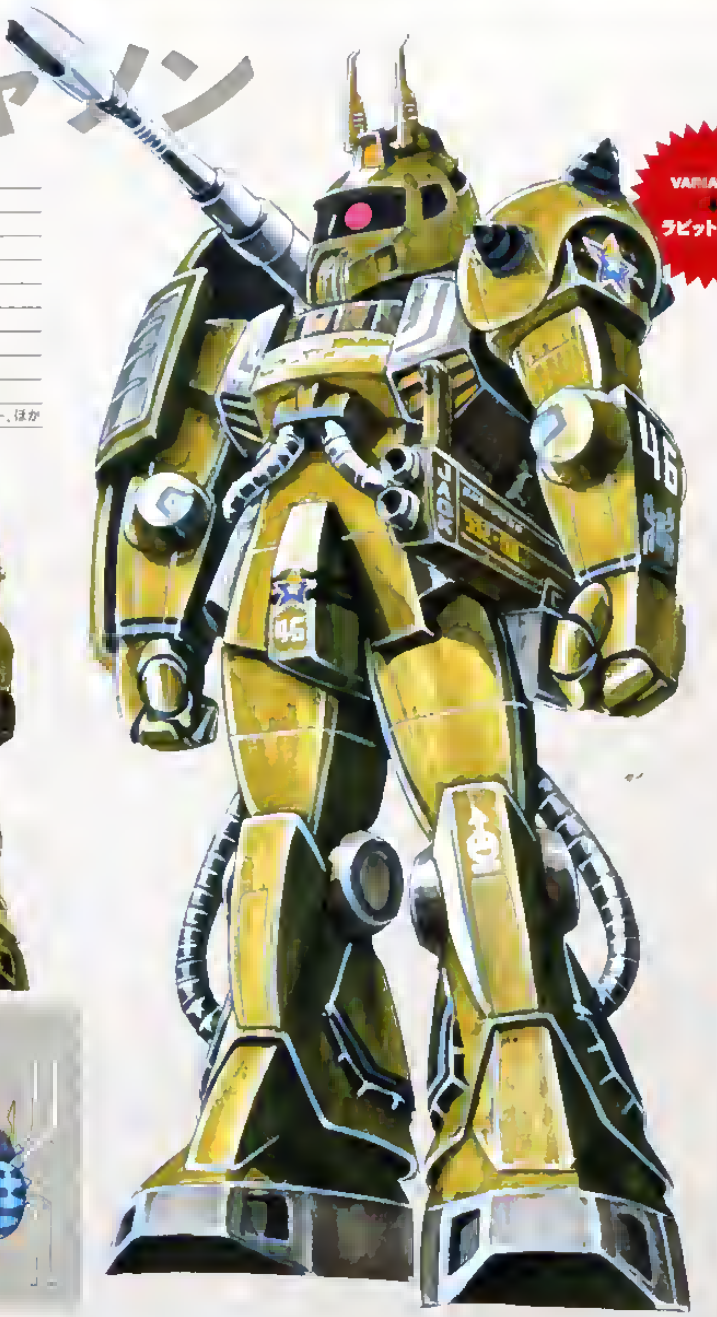
ジオン公国軍の地上侵攻に際し、MS-06Jザク(J型)をはじめとする様々な改良がMS-06に施された。その中で局地戦用型としてもっとも要請があったのは、熱帯・砂漠戦用タイプであった。当時、局地戦用型としてはすでにMS-07Bグフの開発が進行していた。そのため、すでに実用化されていた陸戦用機のJ型に、要望の多いアフリカ戦線に絞って、砂漠用改修プランを施したのがMS-06Dザク・デザートタイプ(D型)だ。

J型で収集された実戦データを基に、機体の軽量化と出力の増加という基本的な改修を実施。そして砂漠地帯用の改修として、冷却装置の大容量化、関節部の防塵、シーリング処理、砂漠での移動力強化のため、腰と脚部に補助推進ユニットが新設されている。武装はM120ASマシンガン、ラッツリバー式三連二連ミサイルポッド、SA-712クラッカーポッドを装備する。機体面でも短距離通信アンテナを2本装備したダブルアンテナタイプや、頭部中央に大型アンテナを装備したシングルタイプが存在した。その中でもD型の実戦テストを担った「カラカル隊」は、ダブルアンテナタイプを駆ったことでも有名である。生産数は、初期に両機種がそれぞれ43機ずつ、後期にはシングルアンテナタイプに仕様を統一し、28機が生産された。

MS-06K

ザクキャノン

SPEC	
全高	17.7m
本体重量	59.1t
全備重量	83.2t
ジェネレーター出力	976kW
スラスター推力	41,000kg
センサー有効半径	4,400m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	180mmキャノン砲 ヒップガン 2連装スモークディスチャージャー、ほか



VARIATION
ラビットタイプ

対空戦から支援砲撃までこなすキャノンタイプ

連邦軍の影響で本格化した支援砲撃用のザクタイプ

MS-06Kザクキャノン（K型）は、ジオン公国軍の地上侵攻に際し、より機動性の高い対空防御役というコンセプトで考案されたバリエーションである。マザーブランではMS-06Jザク Ⅱに対空砲をオプションで装備するという単純な案だったが、重量バランスなどの問題を解決できないまま、保留されていた。だがその後、地球連邦軍のRX-77ガンキャノンの情報がキャリフォルニア・ベースへもたらされ、計画は再検討されることになった。さらには対空用という目的すらも見直され、対モビルスーツ戦における支援用の機体として開発が進められることとなった。

K型の1号機はキャリフォルニア・ベースでロールアウト。支援用の大型砲は右肩に背部のランドセルと一体化した180ミリキャノン砲（スモークディスチャージャー、給弾用マガジン装備）1門を装備。通常のランドセルを換装することで、Jタイプと同様の運用が可能という幅を持たせた設計となっている。

頭部は全周式モニターや短距離通信アンテナ、後方監視カメラを装備し、通常のザクとは趣が異なる。また、脚部はMS-07Bグフのノウハウを活かした補助推進器が装備され、機動力を補完している。

試作機9機のみが生産され、全機が北米で実戦に参加した。

PILOT FILE

イアン・グレーデン

先読みの名手として知られるジオン公国軍のMSパイロット。戦後に連邦軍によってニュータイプかどうか検証されたほどの腕前を誇る。キャリフォルニア・ベース攻略戦に参加後、同基地守備隊として活躍。階級は中尉。愛機のパーソナルマークを機体の左前腕に施している。撃墜スコアは航空機34、車両71、MS 2となっている。

MS-06M (MSM-01)

ザク・マリンタイプ

SPEC	
全頂高	17.5m
本体重量	43.3t
全備重量	60.8t
ジェネレーター出力	951kW
スラスター推力	66,000kg
センサー有効半径	3,200m
武装	頭部バルカン砲×2
	M6 G型4連装240mmサブロックガン
	M8型4連装180mmロケットポッド×2

VARIATION レッドドルフィン隊

■局地運用される機体の多くは量産ごとで機体色も異なる傾向が強い

水中戦を念頭に開発された水陸両用機の始祖！

防水性に難はあったが後の水陸両用機開発を支える

ジオン公国軍の地球侵攻において、モビルスーツに課せられた最大の命題は水中への適応である。それは南米アマゾン河流域にある地球連邦軍本部のジャブロー侵攻を視野に入れていたからだ。まずMS-06FザクⅡ（F型）をベースに水中行動を可能とする方向性で進められたMS-06Mザク・マリンタイプ（M型）だが、問題となったのは、F型の気密性は優れていたが、防水性の確保については難航したことである。そのため、F型ベースの水中用プランは早々に却下され、新たに水流ジェット・エンジンの実用試験と、水中用武装のデータ収集という役目を担うことになる。ここで水中用実験機にはM型の型式が付与された。また、本機には「MSM-06M」と同時に「MSM-01」の型式も与えられている。これはM型の先に、水陸両用のMSMシリーズの開発計画が視野に入れられていたためだ。完成した水流ジェット・エンジンは5機のM型プロトタイプ（最終的には7機）に装備され、北大西洋の潜水艦隊「シーサーペント」に実験部隊として配備された。結果的にM型の戦果は目覚ましいものではなかったが、エンジンのテストと各種データの収集という目的は達成した。テスト後は任を解かれ、倉庫に保管されていたが、地中海上陸侵攻作戦の際には実戦参加している。

MS-06F

ザク・マインレイヤー

SPEC	
頭頂高	17.5m
センサー有効半径	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク
	ザク・マシンガン
	機雷散布ポッド ほか

DOA'S COMMENTARY

マインレイヤーは私たちが発注したのではなく、大河原さんから提案してきていただいたものです。当時はオプションハーニアと言っていましたが、バックパックの派生かたくさん考えられました。ケルグゲキャノンのバックパックもそうですね。

その中のアイデアのひとつに「宇宙空間用爆撃型ザク」というのがあったんです。イメージしたのはノースアメリカンのヒノランティという艦上攻撃機です。「T型ラックというのを積んで」という話をしていると思います。それがマインレイヤーのバックパックという形になって出てきた。マインレイヤーと名付けたのはハンダイさんですね。（小田）

特殊なランドセルを装備したザクタイプ

したたかに機雷を撒いて獲物を狙う〝シップキラー〟

一年戦争時、もっとも多く生産されたモビルスーツは「ザク」であり、あらゆる派生型を含めると8000機以上が生産された。中でも完成形といえるMS-06Fザク II（F型）は、背部のランドセルを交換することで、あらゆる作戦や作業に従事することが可能となっていた。そうした豊富なオプション装備の中で、際、異彩を放っているのが機雷散布ポッドである。宇宙空間での機雷敷設を目的とするこのオプションは、その質量増加によってF型本来の機動性は失われるものの、燃料搭載量は通常のF型の5倍にもなり、作戦活動時間は飛躍的に増加している。またこのオプションにはセンサーや機動バーニアも装備され、適切な作戦への対応と、F型よりも細かな姿勢制御が可能となっている。

宇宙用機雷は規格に準じたものであれば最大12発が搭載可能で、ムサイ側にも専用ベッドが設けられていることで、長時間の敷設作業を実現した。

通常は機雷散布ポッド搭載のF型3機と、ムサイ一隻で編成されたチームで作業にあたっていたという。宇宙機雷の敷設作業は、大戦初期のルウム戦役直前から大戦末期まで行われた。エースパイロットのような華々しい活躍ではないが、連邦軍の宇宙艦艇に多大な打撃を与えたことが記録されている。

MS-06E

ザク強行偵察型

SPEC	
頭頂高	17.7m
本体重量	60.4t
全備重量	76.2t
ジェネレーター出力	951kW
スラスター推力	53,750kg
センサー有効半径	3,200m
装備	CE-16TXカメラ・ガン

もやってみたかったんです
E-3型は、大河原さんは直接デザインをしていませんが 当時の アニメーシュ （徳間書店刊）だったかと思いますか ああいうカメラ付の頭を付けていたサクを描かれていたので問題ないかと （小田）

高い機動力を活かし敵地で活動する偵察型

偵察任務に特化したザクバリエーション

MS-06Eザク強行偵察型（当初はRMS-06と呼ばれた）は、MS-06ザクⅡの機動力を利用し、戦略偵察機として転用したものである。それゆえC型、F型の基本構造は継承しつつ、ユニット化された探知システムを搭載した、マイナーチェンジ機体といえる。

これはジオン公国軍部の意図で、戦闘時にユニット交換を行うことで、即時武装化を行うという点にこだわっていた。だが試作機のロールアウト後は方向性が変わり、シールドやスパイクアーマーの排除などの軽量化が進められ、同時にS型用ロケットエンジンの改良型エンジンが搭載された。基本構造でMS-06と異なる点は、背部のメインロケットと、胸部の緊急離脱用のロケットである。外観上の大きな特徴は頭部の大口径大型カメラで、モノアイレールのガラスシールドが排除されると同時に、縦方向の回転も可能となっている。また探知カメラは各部に搭載され、両肩に一基ずつ、股関節にも前方に延長して装備した また武装の代わりとしてCE-16TXカメラガンを装備している。

E型はいち早く部隊に配備されていったが、生産数は100機程度にとどまっている。その後は本機をベースに、機動性と探知システムを強化した特殊任務用のE-3型が少数ながら生産されている。

MS-06E-3

ザクフリッパー

SPEC
頭頂高 ➡ 16.7m
本体重量 ➡ 61.5t

ODA'S COMMENTARY

偵察型は「あってもおかしくない」から作った機体なんです。その中でE-3型（ザクフリッパー）を作ったのは、ザクにカメラを付けるだけじゃ面白くないなというのが一つ。

もうひとつは「ザクじゃないけれどザク」というの

複合式センサーを搭載しより深く敵地に潜入

強行偵察型ザクから発展した性能向上型

MS-06ザクⅡをベースとした戦略偵察機であるMS-06E（E型）は、主に連邦軍側の攻勢や製造コストの問題により、活躍できたのは大戦初期にとどまり、大量生産には至らなかった。だが大戦中から後期にかけ、E型の性能向上型である強行戦略偵察機のMS-06E-3ザクフリッパー（E-3型）が少数生産されている。頭部カメラはもはやザクの面影を残していない3基一体式の強化型が採用された。さらに背部ユニットも新造され、複合探知システムを搭載している。探知システム自体は翼状の6本のブームセンサーで構成されており、母艦から発進する際には可動部分で折りたたまれていることが多かったという。

E型はカメラによる光学的な偵察しかできなかったが、E-3型はこの探知システムの搭載によって、レーザーや超音波による探知を実現している。

またブームセンサーが偵察目標に向かって動くことから、「フリッパー（flipper＝ヒレ）」の愛称でよばれた。

所属は外洋艦隊のほか、特殊偵察任務小隊に配備されている。作戦空域へ赴く際にはバズノーズと呼ばれる予備タンク＋増速用ブースターを使用し、超高速で連邦軍施設や艦隊の偵察を行った。最大の功績はア・バオア・ター攻防戦におけるレビル艦隊の強行偵察とされている。

MS-06V

ザクタンク

SPEC

頭頂高	14.7m
本体重量	53.6t
武装	3連マシンガン

VARIATION
グリーンマカク

マゼラ・ベースにMSの上半身を付けたタンク型

現地改修で補った回収作業用のザクタイプ

MS-06ザクIIの有用性は戦闘だけにとどまらず、人型の特徴を活用し、建設作業などでも効果を発揮した。そこで被弾などによって戦闘能力が欠如したMS-06を再利用すべく、緻密な作業を可能とする腕を活かした作業車両案が提案される。下半身は地上車両の主力であった超大型戦車マゼラ・アタック（マゼラ・ベース）が使用された。MS-06の歩行システムは強固だが、反面、前線の設備で完全に修理することは不可能というデリケートな面を持ち合わせていた。単なる移動のために用いるのであれば、マゼラ・ベースの方が都合もよかったのである。

MS-06の上半身＋マゼラ・ベースという構成が初めて実現したのは、アフリカ戦線で活躍した工作作業中隊である。構造的にはマゼラ・ベースの操縦スペースを排除し、センターデッキ両端を広面積化したエリアに、MS-06の上半身をマウントする可動ユニットが備えられている。腕部は作業用マニピュレーターに置き換えられ、ランドセルはオプションとしてカセット式タンクやクレーンユニット、カーゴデッキの搭載が可能だった。同構成の機体に関しては、便宜上MS-06Vの型式番号が与えられているものの、すべて再利用パーツから構成されている点からも、非常に特殊なモビルスーツであることがわかる。

ODA'S COMMENTARY

ザクタンクって存在としてのスケールは合わないし 無理があるんですよ。講談社の現場のノリで出来上がったもので、当時はよく5～6人で集まって話をしていたんですが その中で「しゃあ設定作るか」と大河原さんがうまいことミックスして画にしてくださったんで だから型式番号は付けていたけど、「せんぶ現地改修で作られたもの」としたんです。模型は上半身のザクの頭の形が実にいいんですよ （小田）

MS-06W

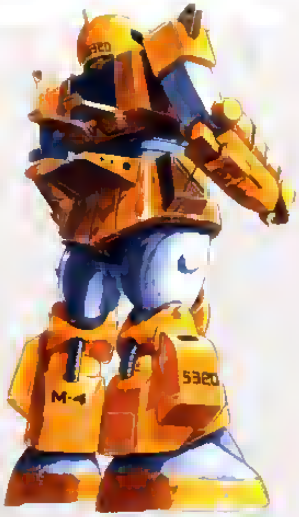
作業用ザク

SPEC

頭頂高	17.7m
本体重量	51.8t

ODA'S COMMENTARY

作業用ザクはちょっとやりすぎましたね。私が簡単なラフを描いた覚えかありますが　大河原さんがまたきれいに上げてきてしまって（笑）。指をミトンっぽくしたり　スコープをつけたのも大河原さんです。こんな特別な格好に改装しなくたって普通のザクでも作業はできますが、なんでも特定の用途に合わせてビジュアルをいじるというのはこの時期の方法論でしたね。バンダイでは1/144の設計図面も完成していました。（小田）



作業機械として現地改修されたリサイクルMS

ザクタンクに並ぶ現地改修型の作業用機体

MS-06Vザクタンク（V型）と同様、使用不能となったモビルスーツを組み合わせて、再利用されたのがMS-06W作業用ザク（W型）である。MS-06Wという型式を与えられているものの、そのほとんどが前線で作り出された出自もあり、便宜的かつ慣例的な呼び名となっている。誕生はV型よりもこちらの方が早く、パーツ構成はMS-05ザクⅠやMS-06ザクⅡ、中にはMS-07Bグフを使用したケースもあったという。おそらくW型からV型へと転用された機体もあったと考えるのが自然だ。

また使用されたのがアジア西部戦線からアフリカ戦線という限定された地域であり、ジオン公国軍内部でも本機の存在を知る人間は少ない。

W型が行うのは、輸送や土木作業など多岐に渡っている。こうした作業用として、背面にランドセルを排除した荷物デッキ、大型スコップ（右腕）、ウインチ（左腕）などが装備されている。現地調達の部品で生産された機体で、統一された規格は存在しないが、これらの装備は多くのW型の共通装備として備わっている。

手はV型のような作業用のマニピュレーターではなく、MS-06のものを流用している。そのため終戦間際の戦力不足の際には、W型にMS-06の武装を施し、戦闘に参加した例もあったという

MS-06Z

サイコミュ試験型ザク

SPEC
- 全　高 ➡ 17.7m
- 本体重量 ➡ 60.4t
- 武　装 ➡ 有線式5連装メカ粒子砲×2

ですよ
だからZ型を踏まえた上で、ジオングのように脚のないMSN-01という形にまでしなければならなかったんですそういう理由で2機登場したわけですね。
サイコミュ・システムの試験運用でどの程度まで精度があげられるのか、という任務の実験部隊が使用してるという想定です。（小田）

ザクとは名ばかりのニュータイプ専用機

稼働時間にネックを抱えたサイコミュテスト用ザク

ジオン公国軍は、ミノフスキー粒子下におけるニュータイプの脳波誘導の特性を、サイコミュ兵器として転用すべく、研究を進めていた。計画案はMS-16Xとして通案され、ジオンMSの集大成という意味を込めて、「ジオング」と名付けられることも決定していた。

だがサイコミュ・システム自体のテストはMS-16Xでは行われず、まずは当面のデータ収集とビーム兵器のテストを兼ねて、3機の母機が開発された。1つが中型戦闘機、もう1つはMAN-03ブラウ・ブロであり、最後にMS-06FザクIIを母体とするMS-06Zサイコミュ試験型ザク（Z型）が用意された。

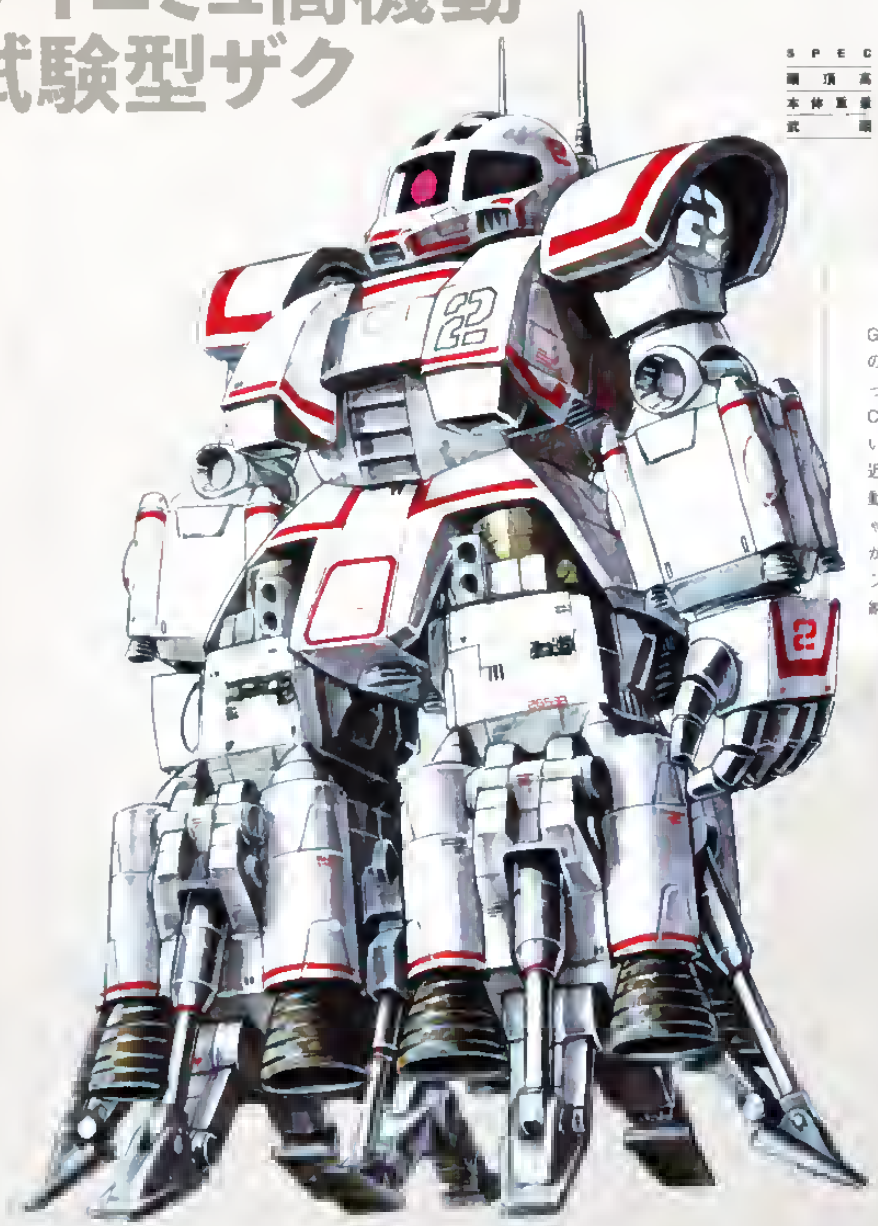
Z型はMS-06と冠されてはいるものの、使用されたのはメインフレーム程度で、頭部を除いてザクを感じさせる形状は残されていない。開発にあたってはMS-16Xの性能を極力再現すべく、肘から先はMS-16Xと同規格の有線式ビーム砲へ置き換えられた。そのため腕だけが異常に大きいアンバランスなフォルムとなっている。また、ジェネレーター容積の拡大とともに推進用エンジンが増設されていることも特徴だ　胸部には左右一基ずつ、背部には3基のロケットエンジンを備え、合計推力は388トンに及んだ。だがその稼働時間はわずか10分程度で実戦での使用は疑問視されている。

MSN-01

サイコミュ高機動試験型ザク

SPEC

頭頂高	→	17.2m
本体重量	→	65.4t
武装	→	有線式5連装メガ粒子砲×2



ODA'S COMMENTARY

Z型は　宇宙翔ける戦士達 GUNDAM CENTURY（みのり書房刊）に文字設定があったんです。その「GUNDAM CENTURY」内に掲載されていた宇宙用サクのイラストに近いから、「サイコミュ高機動試験型は、それのパクりしゃないか」と言われたんですが、そうではなくて　結局、ジオンクの開発まで行く中で、納得させる形にしたかったん

ジオング開発に繋がる高機動型

もはやザクとは別物のジオングのテストタイプ

MS-16Xの開発を目指し、MS-06Zサイコミュ試験型ザク（Z型）で進められたプロジェクトは「ビショップ計画」と名付けられ、コレヒドールに駐留し、データの収集を行っていた。Z型の開発はMAN-03ブラウ・ブロと同様に、MS-16Xへの試験機として開発がスタートしたものの、冷却サーキットとビーム砲の小型化に遅れを取り、実機の完成はMAN-03から10日ほど遅れをとることとなった。コレヒドールで実験が行われた3機のZ型のうち、2号機はグラナダの工廠へと一旦戻され、高機動時のサイコミュ・システムのデータ収集用として両脚部を大出力ロケットエンジンに換装した。ここでMS-16Xの名称をMANナンバーへと移行するため、MSN-01の型式が与えられている。MSN-01は宇宙空間戦用という割り切りからか、脚としての機能は失われ、離着陸時にはロケットに取り付けられたランディングプレートを使用する　機動性自体はZ型よりも向上したものの、増設されたロケノトエンジンを活かせるだけの推進剤が搭載できず、最終的にはMSN-02ジオング開発のためにのみ存在した機体となった。

とても実戦向きとはいえない機体だったが、ア・バオア・クーの決戦に際しては、MSN-01と2機のZ型は戦闘に参加したという記録が残されている。

MS-06R-1A

高機動型ザクⅡ シン・マツナガ専用機

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	61.8t
全重重量	76.8t
ジェネレーター出力	1,012kW
スラスター推力	52,000kg
センサー有効半径	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク
	ザク・マシンガン
	ザク・バズーカ
	ジャイアント・バズ、ほか

PILOT FILE

シン・マツナガ

白狼のエンブレムで知られるエースで、ジオン公国軍宇宙攻撃軍に所属。トスル中将が戦場視察に出向く際には、必ず護衛役を務めるほど信頼の厚いパイロットだ。開戦直前に入隊し、ルウム戦役では上官の死亡から戦場任官され、その後、功績が認められ中尉へ昇進する。そして戦場任官の規定に従い士官学校へ入学し、卒業後に大尉へと昇進。連邦政府のヤシマ家と並ぶ名家、マツナカ家の嫡男でもある。ノロモン戦では本国サイド3に召還されていたため、戦闘には参加することがなかった（搭乗機体は喪失）。そのまま本国で終戦を迎えている。

ドズルの懐刀〝白狼〟の専用機

白いパーソナルカラーで知られるR型ザク

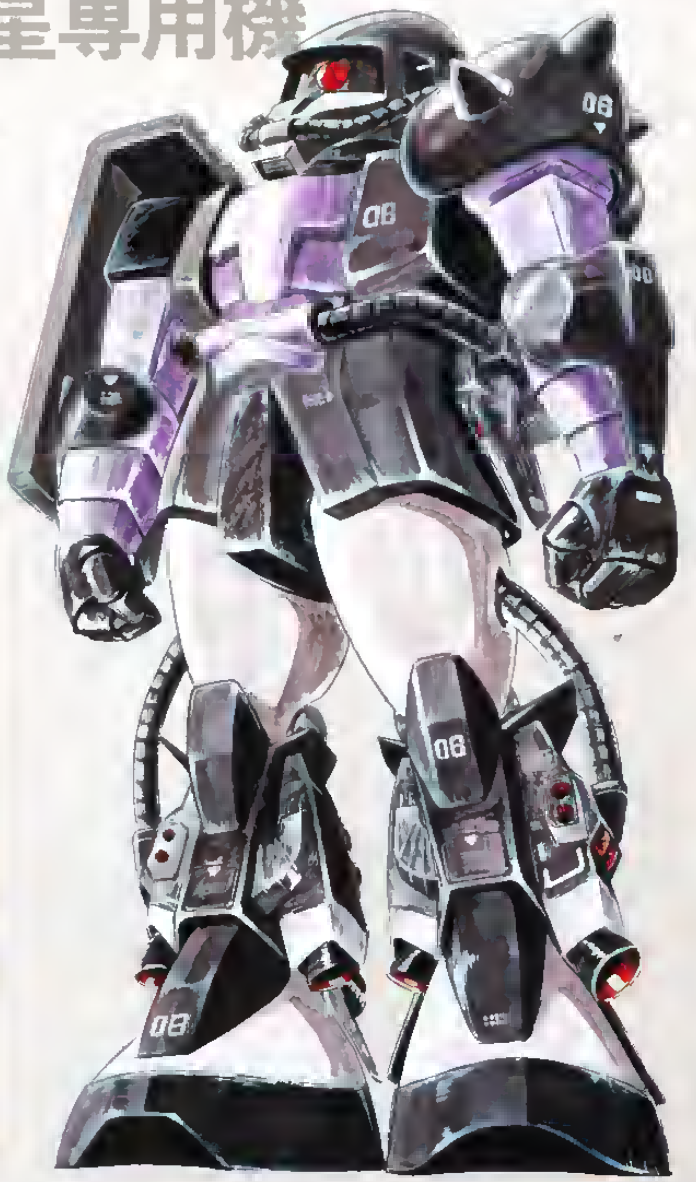
ドズル・ザビ中将の宇宙攻撃軍麾下で名を馳せ、「ソロモンの白狼」と呼ばれたエースパイロット、シン・マツナガ大尉の乗機。一年戦争中、78機生産されたMS-06R-1A高機動型ザクⅡ（R-1型）のうちの1つで、白いパーソナルカラーとブルーのライン、狼のエンブレムが最大の特徴である。マツナガ機はルウム戦役までの期間に、マゼラン級一隻サラミス級5隻を撃沈するという功績をあげ、戦時任官で中尉へと昇進している。

彼は受領したMS-06Fザクの頭部とスパイクアーマーを白く塗装、以降の乗機では、このパーソナルカラーを継承していくことになる。なお本機は、記録上は「R-1A型」とされているが、スリットが入った右肩装甲部、補強プレートのような追加装甲を持つ股関節部装甲、肘関節のアーマー部などは初期のR-1型らしき痕跡が残されてはいる。実際はどちらの機体を駆ったのか、もしくはR-1型をR-1A型にアップデートした機体であるかは定かではない。ソロモン戦時、マツナガ大尉は本機を残したままジオン本国へと召還されており、本人は強く帰還を希望したという。だがその願いもむなしくドズル中将の戦死には、男泣きに泣いたと伝えられる。なおソロモンをめぐる激戦の中、マツナガ大尉が駆ったこの機体は失われたという。

MS-06R-1A

高機動型ザクⅡ 黒い三連星専用機

SPEC	
全頂高	18.0m
本体重量	61.8t
全重量	76.8t
ジェネレーター出力	1,012kW
スラスター推力	52,000kg
センサー有効半径	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ ジャイアント・バズ、ほか



PILOT FILE

黒い三連星
ガイア　オルテガ／マッシュ

ジオン公国軍突撃機動軍第７師団第１モビルスーツ大隊司令部付特務小隊に所属　シャア大佐のような単独で戦果を挙げるエースではなく　３人一組で行動するチームエースであった。三位一体で敵目標に突撃する「ノエノト・ストリーム・アタック」戦法を得意とし　ルウム戦役においては連邦軍のレビル将軍を拿捕するという　多大な戦果を挙げている。その後　地球へと降下しオデッサ作戦に参加するが　その際　連邦軍の第13独立部隊との戦闘により全員が戦死した

ルウムで名を馳せたチームエースのR型

黒い三連星がドムの前に使用した機体

MS-06R高機動型ザクⅡ（R-1型、R-1A型）は、主力であるMS-06FザクⅡ（F型）の性能向上を目的として計画された。改修点のポイントとなったのは、背面（ランドセル）、腰スカート、脚部を中心としてエンジンの強化を図るというもの。特にランドセルは通常タイプを上回る推力218トン×2基を装備するという驚異的なものだった。試験機MS-06RPによるグラナダでの実験を経て、すぐさま22機の初期生産分（R-1型）うち10機は後にR-1A型仕様へ改修）が発注された。だがR-1型は、実戦テストを兼ねて各方面へと配備されたものの、高機動を操縦しきれぬパイロットが続出し、積載量の少ないロケット燃料をすぐに使い果たしてしまう事態に陥った。

そこで背部と脚部の燃料槽をカートリッジ式に置き換えたR-1A型に改良され、56機（最終生産数80機）が生産される。さらに常同するムサイにも補給設備を備え、小隊に一機の割合で燃料補給用ザクが随伴した。一方、パイロット問題は優秀な熟練パイロットによって性能が引き出されることが実証され、各部隊のエースへ優先的に配備された。キシリア少将の直属部隊「黒い三連星」もその1つで、彼らがMS-06SザクⅡに搭乗していた時から採用したブラックを基調としたパーソナルカラーで塗られている。

MS-06R-1A

高機動型ザクⅡ エリック・マンスフィールド専用機

ODA'S COMMENTARY

カラースキームでグレーというのを作ってみたかったんですよ。ゲルググキャノンより前の時期ですが、グレーの最後の機体がミリタリーカラーとして存在しているといいかなと。この色は本国防衛隊仕様で　ドイツ軍風の格好良さがあります。ギレン総帥の直衛親衛隊の機体です。(小田)

ジオン本国防空隊で活躍したエースの機体

グレーのモノトーンで彩られた謎多きエースの高機動型ザク

ジオン公国軍のエースパイロットの一人であるエリック・マンスフィールド中佐の専用機。所属はジオン本国防衛本隊であった。戦績はモビルスーツ撃墜数156機、艦船撃墜数3隻とされ、これはジオン公国軍内でも第4位の記録だが、事実かは不明だ。本機の特徴は、グレーのロービジリティ・パターンで塗装されていること。また、ブレードアンテナが側頭部にあり、右肩に本国防空隊エンブレムの「グリフォン」が描かれている。最終的にギレン総帥とともに本国からア・バオア・クーに移動し、攻防戦に参加したとされている。

※本機のスペックはMS-06R-1高機動型ザクⅡを参照のこと

MS-06R-1A

高機動型ザクⅡ マサヤ・ナカガワ専用機

ODA'S COMMENTARY

上半身の写真がまずあって、陸戦用のザクかと思ったら下半身は06Rで宇宙用だったという、その仕掛けのためだけの色です。写真に関してはさんざんミリタリーで肩透かしを食らったり苦い思いをしていますが、これもそういう一種のごっこ遊びです。(小田)

陸戦機と誤認された日系エースのR型

写真が発見されたことで宇宙戦用機として認定される

ア・バオア・クーのEフィールド防空大隊に所属するマサヤ・ナカガワ中尉の搭乗機。機体の特徴として、まずブレードアンテナが頭頂部に装備されている点が上げられる。また右肩部アーマーのスリットなどにR-1型の特徴は見られるが、スリット自体は塞がれている。R-1型の改修型、もしくは生産中の仕様変更型と考えられるが詳細は定かではない。パーソナルカラーは紫色を基調としたもの。当初、連邦軍では上半身の写真しか入手できず（R型の特徴である脚部や背面が写っていない）、地上用の機体と認識されていた。

※本機のスペックはMS-06R-1高機動型ザクⅡを参照のこと。

MS-06R-1

高機動型ザクII（初期型）

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	61.8t
全備重量	76.8t
ジェネレーター出力	1,021kW
スラスター推力	52,000kg
センサー有効半径	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ ジャイアント・バズ ほか

ODA'S COMMENTARY

R型だけどカラースキームは普通のザクと同じというのが点へて格好いいですよね。まあ実際の戦闘機でも奇抜なカラーやマーキングを入れるパイロットはごく一部でしたから 06Rは78機くらい製造された設定ですが こういう普通の色の機体が多いと思います （小田）

性能は高いが整備性の悪さがネック

もっとも初期に製造された原型機となる高機動型ザク

MS-06R高機動型ザクIIの最初期量産型。MS-06RPでのテストから構造の見直しが図られ、外部設置式の伝導ケーブル、サーキットの増加、小型スラスターの追加や腰部インテグラルタンクを胴体部や脚部へ分散するなどの変更が施された。

MS-06Fザクをベースに開発が進められていたが、全面的に再設計が行われた。そのため右肩シールドの補強リブやスリット、腰部装甲の補強など、MS-06Fからの変更点も少なくない。すぐさま22機が生産されたが、燃料補給に伴う運用・構造上の問題から、R-1A型へアップデートされた。

MS-06RP

プロトタイプ高機動型ザク

SPEC	
頭頂高	17.5m
武装	360mmバズーカ 420mmバズーカ

ODA'S COMMENTARY

これはテスト機ということで蛍光オレンジを身にまとこ 記録撮影用のマーカーも体中についてます。06Rシリーズのカラーリングやパイロットは 基本的にはドイツ空軍を思い浮かべながら作りましたね。この機体は50年代のアメリカ空軍機 （小田）

S型以上の機動性を求めた高機動型の始祖

新たなるザクの可能性を追求するために開発

MS-06R高機動型ザクIIの始祖であるテスト機で、開発は月面のグラナダ基地で行われた。1号機、2号機はオレンジイエローの塗装が施され、各種テストが繰り返された。また外観的には、ブレードアンテナを後頭部に備えていることも特徴。テストパイロットは「ザク」の開発当初から参加してきたエリオット・レム少佐が招かれ、2週間にわたり各種テストを行った。結果はきわめて良好で、すぐさま生産が開始されるが、実戦で一般のパイロット搭乗後、「性能を御しきれない」という思わぬ結果を招くことになる。

MS-06R-2

高機動型ザクII ジョニー・ライデン専用機

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	49.5t
全備重量	75.0t
ジェネレーター出力	1,340kW
スラスター推力	60,000kg
センサー有効半径	5,600m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク, ザク・マシンガン ザク・バズーカ, シャイアント・バズ ほか

ODA'S COMMENTARY

ノオニ ク社はケルククを開発中で ザクは汎用機としては限界に近づいている. たけれどもエンジンの載せ替えやチューニングによってはサクをベースにしてスケールアップすることができると考えていたんです ケルククは多分受注するけと それに勝くには競作にはなんとか勝たなければと. ノイマット社のトムの競争試作機として「06R-2」を設定し サクを無理矢理改造したのが MSV のR-2なわけです カラーリングはもろにランホルキーニ・イオタSVRです 赤のベースに黒か入ってホイールの金の代わりに黄色か差し色にな ている 06R-2が4機いるっていうのも初期のイオタ伝説からと ものです 機体ごとに競争試作のイメージは違う トム対06R-2は僕的には昭和30年代の空自における次期主力機の原田調査団がイメージソースです 無理やりJ79エンジンを積んでマッハ2級の速力をもたせたスーパー・タイカー それか06R-2の正体なんてす 小田)

ジオントップエース〝真紅の稲妻〟の搭乗機

赤い彗星と誤認された真紅の稲妻専用の高機動型

本機は、MS-06Fザク II に代わる次期宇宙用主力機として、MS-09Rリック・ドムと選定にかけられたMS-06R高機動型ザクII（R型、R-1A型）の発展型だ 当時ジオニック社では、MS-09Rに配備数が奪われることに脅威を感じ、完成が遅れていたMS-11の代わりとして、急遽、R型の改修を行った。

R型は高性能ながら、すでに性能の限界が見えていたMS-06が基本設計ゆえ、開発は難航し、大幅な設計変更が必要とされた MS-06R-2（R-2型）は、さらに脚部装甲材の強化、軽量化及び耐衝撃性の向上を見据えた各部装甲材の変更、燃料搭載量の18%増大、コクピット搭乗方式の変更が行われた。また、メイン・スラスターはR-1A型から強化されている。搭載ジェネレーターは、開発中のMS-11用を簡略化したものを搭載し、ビーム兵器の搭載を模索していた。つまり外観こそMS-06やR-1A型の意匠を残すものの、中身は別物の新型機といえるのだ

最終的に4機が生産されたR-2型を受領したパイロットの中で、もっとも著名なのは、「深紅の稲妻」ことジョニー・ライデン少佐で、突撃機動軍第2方面軍特務中隊の指揮官として活躍。しかしR-2型の使用期間は短く、大戦末期はキマイラ隊に参加している。

MS-06R-2

高機動型ザクII
ギャビー・ハザード専用機

SPEC	
全高	18.0m
本体重量	49.5t
全備重量	75.0t
ジェネレーター出力	1,340kW
スラスター推力	60,000kg
センサー有効半径	5,600m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ ジャイアント・バズ、ほか

ODA'S COMMENTARY

色替えはプラモデル的にわかりやすいですよね。アンテナなどディテールの違いなども特に意味があって作ったものではなくて　目先が変わっていいかなという程度です　（小田）

ダークカラーが特徴的なエースの専用機

見た目はザクの意匠でも中味は別物の高機動宇宙戦用機

4機生産されたMS-06R-2高機動型ザクIIのうち、1機はジオン公国軍突撃機動隊所属のギャビー・ハザード中佐が使用した。彼の一年戦争のスコアはモビルスーツ撃墜数138機、艦船撃墜数2隻と記録され、これはジオン公国軍第6位の成績だが、詳細は不明である。ギャビー・ハザード中佐のパーソナルカラーはブラウンとブラックを基調とし、宇宙戦用機には珍しいカラーリングといえる。基本的な性能に変化はなく、他の機体と同じである。最終的にア・バオア・クー攻防戦に参加したという説もあるが、その後の戦歴や消息は不明となっている。

MS-06R-2

高機動型ザクII
ロバート・ギリアム専用機

SPEC	
全高	18.0m
本体重量	49.5t
全備重量	75.0t
ジェネレーター出力	1,340kW
スラスター推力	60,000kg
センサー有効半径	5,600m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ ジャイアント・バズ、ほか

ODA'S COMMENTARY

ショニー・ライデン機がそうなんですが　R2の足のカウルは増尾さんがこちらの変更を汲んで描き足したものなんですよ　最初にR-1を描いて上から貼った原稿がどこかにあるんじゃないかなあ　（小田）

希少なR-2型を駆る謎多きエースの機体

希少な高機動宇宙戦用機で謎がつきまとう機体の戦歴

合計4機という少数の生産に止まるMS-06R-2だが、ジオニック社の社内研究用の1機（その後も改修を受け続けた、通称R-3型と呼ばれた試作機）を残し、各エースパイロットへ渡された。そんな3機目を受領したのは、突撃機動軍所属のロバート・ギリアム大佐である。パーソナルカラーはスカイブルーとクリームイエローを基調とし、性能面に変更はない。本機も他機体と同様、ロールアウト時にブレードアンテナを付けているが、指揮官クラスの使用を想定したわけではない。また、ギリアム大佐の本機受領後の戦歴などは不明である。

M.S.F.

ガルマ専用ザク

SPEC
武　装 ➡ 頭部カドリング砲×4
専用ヒート・ホーク
サブ・マシンガン ほか

PILOT FILE
ガルマ・ザビ

ノオン公国軍地球方面軍司令官で階級は大佐。実質的にノオン公国を支配しているザビ家の末弟（四男）でシャア・アズナブルとは士官学校の同期生でもある。自ら進んで戦場に赴き、時には専用のトノ戦闘機で出撃するなど好戦的な性格に映るが、そうした行動も家柄によるコンプレックスやある種のプレッシャーによる焦りといえなくもない。北米大陸にホワイトベース隊が飛来した際、撃墜してきたシャア少佐（当時）と共闘するが敗死した。また、ガルマ大佐自体はノオン公国での人気は高く、部下からの信頼も厚かた

ザビ家末弟に用意された専用機

ジオン公国を統べるザビ家末弟の専用機

MS-06ザクIIの初期生産型であるC型は、当時の戦況を踏まえ、耐核防備用重複合装甲、放射線遮蔽壁を備えていた。が南極条約の締結によって対核装備の必要性がなくなったことから、これらの装備を排除したF型が開発されたのである。ガルマ・ザビ大佐専用機で知られるFS型は、F型の頭部に40ミリ機関砲を4門搭載した、いわばマイナーチェン版だ。機関砲の変更以外はF型を基本とし、F型の生産ラインで作られているF型の性能向上型であるS型が登場するまでのわずかな期間に、指揮官機とここく少数の機体が生産された。

内蔵型の頭部機関砲は、搭載スペースに十分な装弾数を確保できず、10秒程度で弾切れになったという。そのため戦闘用装備というより、威嚇や牽制用に用いられたとされる。本機はFS型の中でもザビ家の専用機として、F型から精度の高い機体を選別し、さらにチューニングが施されているという。指揮官機の証明である頭部ブレードアンテナに、ガルマ大佐のパーソナルカラーのブラウン系で塗装されている。ガルマ大佐の機体として開発されたものの、彼は早々に地球方面軍司令として地球に降り立ち、すぐにドズやガウ攻撃空母に搭乗していた。そのため、実際に本機に搭乗して戦闘に参加したと記録は残されていない

MS-06F

ドズル専用ザク

SPEC

頭頂高	17.5m
本体重量	57.6t
武装	大型ヒート・ホーク

過度な装飾が目を引くザビ家の象徴

勇猛果敢な猛将の駆る専用チューンがされたザク

ジオン公国軍では高級将校が専用のカスタマイズモビルスーツを所有することが認められており、その中でもザビ家のドズル・ザビ中将が搭乗する専用のMS-06FザクⅡ（F型）は、異彩を放っていた。F型をベースに開発されたカスタム機である本機は、巨漢であるドズル中将に合わせてコクピットの容積を拡大化。装備面では左肩シールドを排し、両肩を4本のスパイクアーマー仕様としている。また、拳にも3本のスパイクが装備されているのも通常型との違いである。ザク・マシンガンなどの火器類は一切持たず、大型ヒート・ホークのみを装備している。なお性能的にはF型から変化はないとされている。

本機最大の特徴であり、一際目を引くのが、全身にあしらわれた金色のエングレービングと呼ばれる装飾である。こうした華美な装飾が施されていることから式典用モビルスーツと思われているが、一年戦争初期において、ドズル中将は戦場視察を名目にして本機で実戦へと参加し、前線へと赴き兵士たちを鼓舞したという。その際も一切火器は持たず、大型ヒート・ホークのみを装備していたといわれる。その後、本機が実戦に参加したという記録は残されておらず、ソロモン攻略戦時に格納庫で焼失したともいわれている。

OBA'S COMMENTARY

ガルマ機は画が先にできたんです。描いたのは増尾隆幸さんなんですが、増尾さんが「テキちゃったんでガルマ機にしてもらえないか」ということでガルマ機にしたんですよ（笑） その時にパーソナルカラーを設定しても、本編の設定に抵触しないのはガルマ機しかなかったんですよ。

一方、ドズル機についても

PILOT FILE

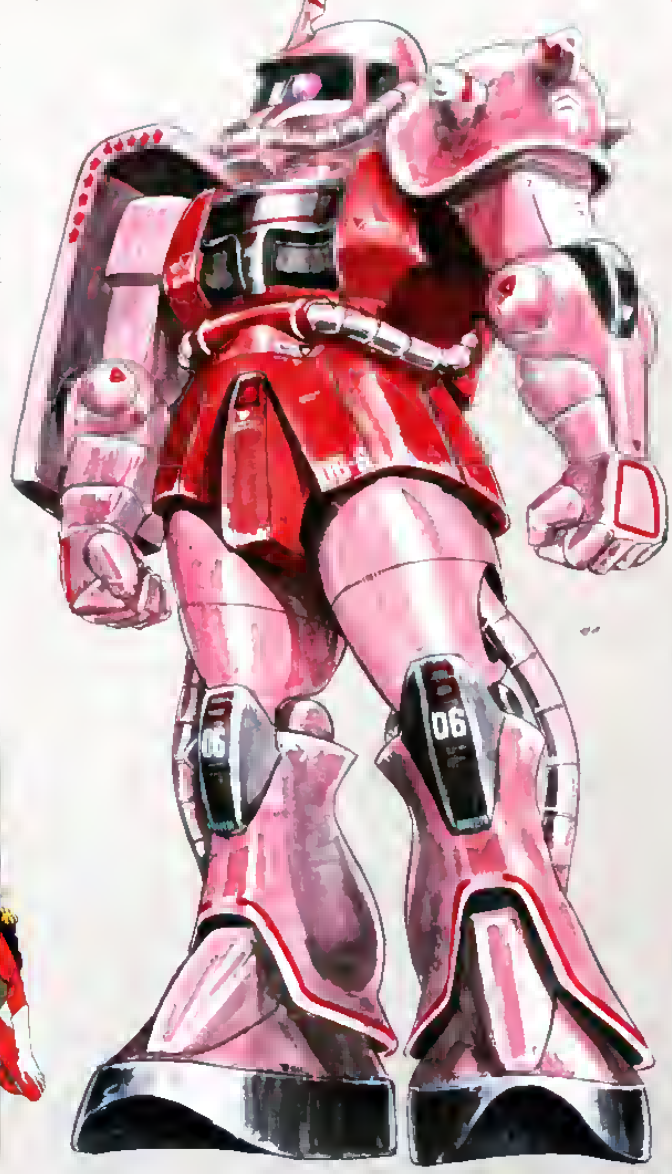
ドズル・ザビ

ジオン公国宇宙攻撃軍総司令でありザビ家の三男。階級は中将。身長2mを越える巨漢で強面ではあるが 愛妻家で部下思いの武人である。特にガルマ大佐への期待は高く それだけに彼が戦死した際のドズル中将の落胆ぶりは相当なものであった。ソロモン戦ではソロモン基地にて指揮を執るが 連邦軍の新兵器「ソーラ・システム」により壊滅的打撃を被り敗北を喫した。自身はビグ・ザムに搭乗しティアンム艦隊に特攻をかけ 艦隊を撤退するが第13独立艦隊との交戦で戦死した。

MS-06S

シャア専用ザク

SPEC	
頭頂高	17.5m
本体重量	56.2t
全備重量	74.5t
ジェネレーター出力	976kW
スラスター推力	51,600kg
センサー有効半径	3,200m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・ホーク ザク・マシンガン ザク・バズーカ ほか



PILOT FILE

シャア・アズナブル

ジオン公国軍の中でも著名なエースパイロット。一年戦争の勃発である一連の戦争での功績により少佐へと昇進し、続くルウム戦役では艦艇5隻を沈める活躍をみせた。その時"赤い彗星"の異名で呼ばれるようになる。ガルマ大佐の戦死と前後して、宇宙攻撃軍から突撃機動軍へと転籍。それに際し大佐へと昇進。ホワイトベース=第13独立部隊との因縁も深く、ア・バオア・クー戦で交戦するが行方不明となる。だが、後の宇宙世紀0085年にはノオン・ズム・ダイクンの遺児であることが本人の口より明かされている

連邦軍が恐怖した〝赤い彗星〟の乗機

ジオン公国軍のトップエースが搭乗した指揮官用のザク

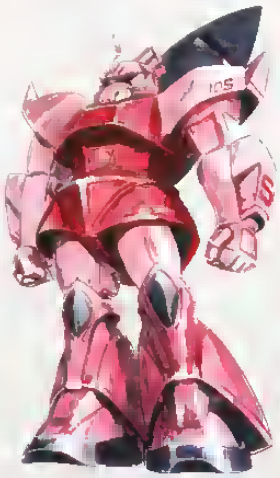
MS-06Sシャア専用ザク（S型）は、MS-06Fザク Ⅱ（F型）の総合性能向上型であり、F型のスペックでは補えないエースパイロットへの要望に応えるほか、指揮官向けの用途として開発された。F型の基本構造を維持しつつも、細部へのチューニングによって、推力は30パーセントの向上を果たしている。だが、燃料の搭載量は通常のF型とは変らないため、稼働時間は短縮している。そのほか指揮官の搭乗が前提で、頭部には通信能力の強化を目的としたブレードアンテナが標準装備となっている。また、ベースがF型であるため、特に装備換装を必要とせず、宇宙・地上にも対応可能だ。

ジオン公国軍では指揮官のパーソナルカラーの使用が許可されており、S型を駆った著名な人物としては、シャア・アズナブル少佐が上げられる。彼の乗機は、「赤い彗星」の異名どおり、すべてを赤系のパーソナルカラーで塗装している。特にシャア少佐が搭乗するS型は、「通常の3倍のスピードで迫る」と称された。だが、これも彼のような熟練パイロットが、限界まで機体性能を引き出した結果であり、誰もが自在に操れたかといえばそうではない。かえって不慣れなパイロットでは、まともに操縦することすらできないといわれ、極限にまで性能を突き詰めたのがS型といえるだろう。

その他のシャア専用モビルスーツ

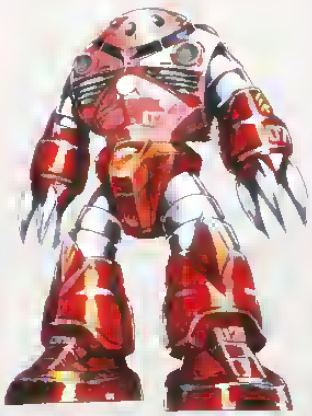
MSN-02
ジオング

SPEC	
全頂高	17.3m
本体重量	151.2t
全重量	231.9t
ジェネレーター出力	9,400kW
スラスター推力	187,000kg
センサー有効半径	81,000m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	頭部メガ粒子砲 有線式5連装メガ粒子砲 腹部メガ粒子砲×2



MS-14S (YMS-14)
シャア専用ゲルググ

SPEC	
全頂高	19.2m
本体重量	42.1t
ジェネレーター出力	1,440kW
スラスター推力	61,500kg
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒーム ナギナタ ヒーム ライフル
備考	ショルト装備



MSM-07S
シャア専用ズゴック

SPEC	
全頂高	18.4m
本体重量	65.1t
全重量	96.4t
ジェネレーター出力	2,480kW
スラスター推力	83,000kg
センサー有効半径	5,200m
装甲材質	チタン・セラミック複合材
武装	アイアン・ネイル メガ粒子砲×2 6連装240mmロケットランチャー

一年戦争を通じて多彩な機体を駆ったエースの遍歴

モビルスーツが独立戦争の杜であるジオン公国軍にとって、優秀なエースパイロットに高性能機を優先で配備する、という流れはごく自然なものだった。「赤い彗星」の異名を持つシャア・アズナブル少佐が高性能機を駆る転機は、ルウム戦役で戦果を挙げたことである。ここでMS-06Sザクを拝領し、エースパイロットとして認められた。その後、ガルマ大佐の戦死に際して方面軍に転属されるも、キシリア少将の突撃機動軍に編入され、大佐へと昇進。当時最新鋭の水陸両用型、MSM-07ズゴックのハイチューン版のMSM-07S（S型）に搭乗した。その後、後期生産型のMSM-07は、シャア大佐のS型をベースに生産されている。

宇宙に上がったシャア大佐が拝領したのは、MS-14ゲルググの先行量産型として、25機が生産されたYMS-14ゲルググだ。テキサスコロニーの戦闘などでRX-78ガンダムと互角の戦闘を展開するも、急遽投入による慣熟が不十分で機体は中破した。シャア大佐の最後の乗機、MSN-02ジオングは、正式には専用機ではなく、機体を失ったシャア大佐にキシリア少将が与えたもの。多様な機種を乗りこなしてきた彼だが、最後にニュータイプ専用機で、相打ちながらもRX-78ガンダムを戦闘不能に追い込んでいる。

独特の美意識を持つキシリアの側近

PILOT FILE

マ・クベ

ジオン公国軍突撃機動軍に所属しオデッサ基地司令官を務める。階級は大佐。地球圏の美術に対して造詣が深く、壺など美術品の収集を行っている。プライドの高い性格からか自らの専用機を駆り戦場に赴くという勇ましい一面もある。地球にてジオン公国軍における鉱物採掘資源用の最重要拠点でもあるオデッサ基地の司令官を務めている。オデッサ戦の敗北後は宇宙に上がったか、記録によってはギャンに搭乗してテキサスコロニーで戦死したとも、一年戦争を生き延びたともいわれ、その後は不明な点も多い。

青い巨星の異名を持つ名門出身のゲリラ屋

PILOT FILE

ランバ・ラル

ジオン公国軍宇宙攻撃軍に所属する大尉。父はダイクンのシンパでもあった政治家のシンパ・ラルだが、ランバ・ラル自身はあまり政治に関心はないようだ。また、タイクンの実子であるキャスバルやアルテイシアとは幼い頃に出会っていたようで面識はあった。モビルスーツパイロットとしての腕前も高いが、ゲリラ戦や白兵戦といった肉弾戦を得意としていた。ガルマ・ザビ大佐の戦死によって仇討部隊に志願し地球へと降下、ホワイトベース隊とは数度にわたり交戦したが、結局、部隊諸共全滅している。

YMS-07

プロトタイプグフ

SPEC	
頭頂高	17.7m
本体重量	55.7t
武装	ヒート・ホーク ザク・マシンガン
備考	シールド装備

ODA'S COMMENTARY

グフ系MSVは大河原さんの絵がまずあって、そこに私たちが設定を考えたものですね。ヒート・ロッドはない　手はマシンガンになってない。だけどシールドはセパレーションになっている　ここから武装の固定化が進んでグフは局地戦用機となっていく設定ですか　その辺は私のさじ加減でしたね。だけど「プロトタイプ」という言葉をMSVで初めて知ったという人も多いんじゃないかと思います。便利な言葉ですよね。(小田)

MS-06J
ザクII

ザクIIをベースにした陸戦用の改良強化新型

装甲とラジエーターの最適化と軽量化がなされる

ジオン公国軍は、地球での陸上戦闘をにらみMS-06Fザク II（F型）を改修し、MS-06Jザク II（J型）を開発した。このJ型は陸戦用に調整された機体ではあったが、より陸戦に適し、モビルスーツ（MS）同士の白兵戦を行える機体が必要と判断された。この要求を満たすMSの実現は、旧来のMS-06を改修するという手法では実現が難しく、新規の陸戦MSの開発に踏み切る。

この計画は後にMS-07Bグフとして結実するが、その過程で製造されたのがこのYMS-07プロトタイプグフである。J型に比べると、ラジエーターの能力向上が図られているほか、脚部には格闘戦用に補助バーニアが装備された。また、徹底した軽量化も行われており、総合的な陸上での機動性はJ型をしのぐ。さらに装甲も最適化され、軽量化されてなお性能は上回るものとなった。

生産型のMS-07Bグフの特徴ともいえるヒート・ロッドや5連装75ミリマシンガン（フィンガー・バルカン）といった装備は、試作3号機から装備されることとなる。そこからさらに外装の整理が行われ、先行量産型が製造された。この先行量産型は1、2号機に近い、腕部に5連装75ミリマシンガンやヒート・ロッドを持たないタイプで「MS-07A」と呼ばれ、32機が製造されたとされる。

MS-07B

マ・クベ専用グフ

SPEC	
頭頂高	18.2m
本体重量	58.5t
武装	ヒート・ロッド
	5連装フィンガー・バルカン
	ヒート剣
備考	シールド装備

DOBA'S COMMENTARY

ガルマやドズルのザクがあるのなら マ・クベのグフも出てきていいのでは？という発想です

といっても 当時のシオン公国の事情を考えると苦しいなあ 式典用というのも そこまで余裕ないでしょう。今でこそ式典用機という考え方が定着しているようですが。これはいつのまにかマ クベ用として増尾さんから画稿が上がってきたので安井さんの発注です。（小田）

YMS-15
ギャン

もう一つの
マ・クベ専用機

過度に装飾された オデッサ基地司令官の専用機

マ大佐は果たして この機体に乗ったのか……!?

シオン公国突撃機動軍マ・クベ大佐の専用機。機体各所にエングレービングを施し、さらに頭部はスピアヘッド状のアンテナで装飾された、いってみれば非常に豪奢な機体である。その一方、性能的にはベースのMS 07Bグフと大きく変わらないとされるが、丁寧な調整は受けていたであろう。

ジオン公国宇宙攻撃軍司令であり勇猛で知られるドズル・ザビ中将もカスタムタイプのザクを所有していたが、ドズル中将は部隊査察や軍式典などの際にこの機体を使用したとされる。マ大佐の本機もこうした儀礼用の機体と考えるのが通例だ。それに本機は、ドズル中将の専用機と比較しても、負けず劣らずの派手さであり、戦場では目立ちすぎる。

しかし、マ・クベ大佐は後にYMS-15ギャンに搭乗し、連邦軍のRX-78ガンダムと交戦している（諸説あり）。この際、ニュータイプと噂されるRX-78のパイロット、アムロ・レイ少尉とそれなりに戦っている。YMS-15はいうまでもなく近接戦闘を主体とした機体で、本機と性質が近い。意外にもマ大佐は機会があれば、本機を駆って戦うつもりだったのかもしれない。

MS-07C-3

グフ重装型

SPEC

頭頂高	17.7m
本体重量	64.2t
装甲材質	超硬スチール合金
武装	5連装85mmマシンガン×2

と不本意な機体なんですが、H-4という空力的に洗練させたものを増尾さんに描いてもらいましたね。

ピンクの機体はバンダイさんが完成見本を見本市用に作っていた中で出てきたものなんですよね。ドイツ機色のグラウバイオレットを拡大解釈すると　あのピンクになるのでしょう　あるいはテザートピンクとか　（小田）

グフの重武装化を図った高火力型

両腕を5連装マシンガンへ換装 さらに給弾も容易に

ジオン公国軍が開発したMS-07Bグフ（B型）は局地戦用機として、その後も改修により機体の細分化が進められた。MS-07C-3グフ重装型（C型）もそのひとつである。B型では左腕だけだった固定兵装を右腕にも備え、両腕部を5連装マシンガンとした。その口径も85ミリと拡大され、威力の増強が図られた。また、B型では内蔵式で給弾性に問題があったマガジンも見直され、外部から簡単に交換を行えるよう変更した。腰部には2個の予備マガジンを備え、砲撃の継戦能力もアップしている。また頭部はジオン公国軍のモビルスーツ（MS）によく見られるブレードアンテナではなく、一般的な棒状のアンテナを備え、センサーも増設された。これは射撃重視の機体の性格に合わせた改修と見られる。

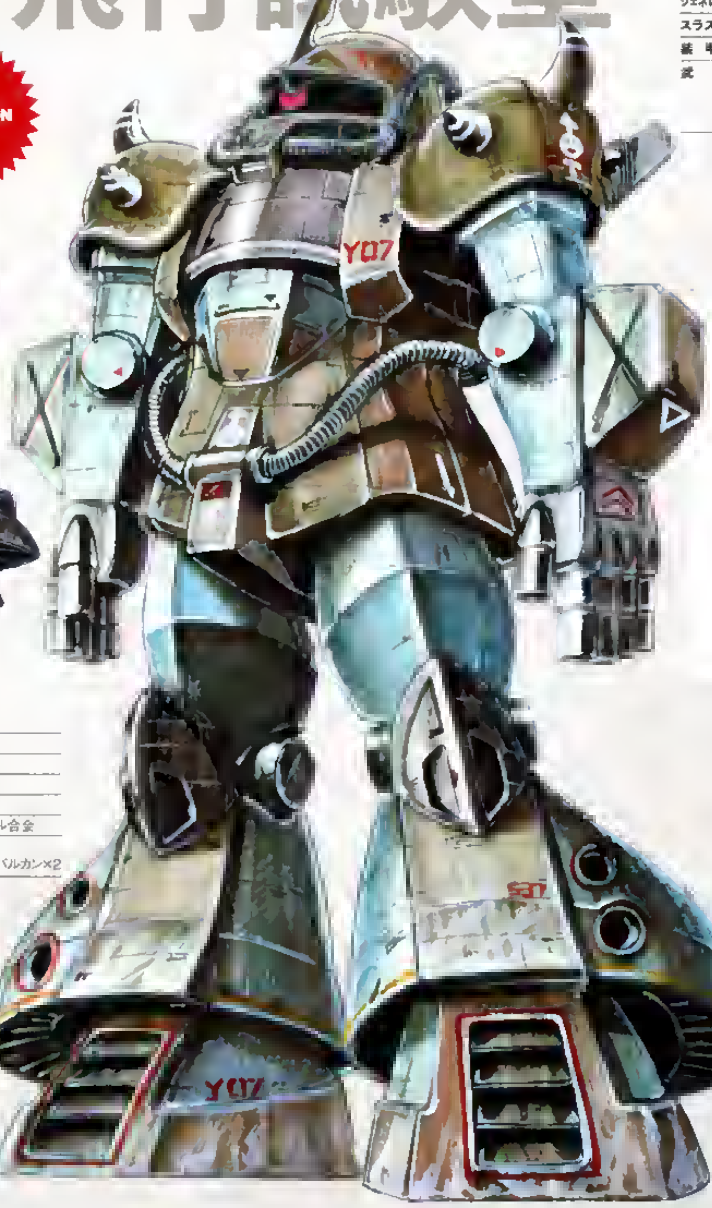
装甲面も強化がなされており、シールドは基本的に装備しない　一方、B型の大きな特徴のヒート・ロッドは撤去されている。なお、C型には、この他にも両腕をマシンガン化としたMS-07CIや、両足の補助推進機を大幅に変更したMS-07C-4、さらにMS-09ドムの開発テストベッドになった、MS-07C-5など様々なモデルが存在する。中にはテスト段階だけのものもあったが、本機はヨーロッパ戦線をはじめとする各地へと投入され、実戦を経験している。

MS-07H

グフ飛行試験型

SPEC	
頭頂高	18.4m
本体重量	58.5t
ジェネレーター出力	1,034kW
スラスター推力	50,875kg
装甲材質	超硬スチール合金
武装	5連装75mm フィンガー・バルカン×2 ジャイアント・バズ

VARIATION



MS-07H-4
グフ飛行型

SPEC	
頭頂高	17.7m
本体重量	62.5t
ジェネレーター出力	1,034kW
スラスター推力	50,875kg
装甲材質	超硬スチール合金
武装	5連装75mm フィンガー・バルカン×2

ODA'S COMMENTARY

グフの重武装タイプの両腕がフィンガー・バルカンなのは、ムチ（ヒート・ロッド）を振るわせたくなかっただけです（笑）　一方のグフ飛行型は、安井さんから「なんとかグフを飛ばしてくれないか」と言われて作ったものです

でもドダイYSで成功しているんだから、結局はうまく行かなかったという設定しか考えられませんでした　割

空戦能力の獲得を模索したテストタイプ

事故にめげず試験を行なうもジャンプ移動が限界だった

ジオン公国軍はMSの移動、展開能力改善のため、MSに飛行能力を付与する試みを行っていた。この結果生まれたのがMS-07Hグフ飛行試験型と呼ばれるH型だ。開発はサイド3で行われ、YMS-07Aから3機、YMS-07Bから1機、計4機がH型へ改修された。

飛行方法はホバーボートを用いるなど、いくつか考案されたが、ロケット・バーニアの強化と、熱核エンジンの脚部集中化という手法が採られた。また、両腕部は5連装75ミリマシンガンに改められた。4機の試作機はムサイによってサイド3から地球に運ばれ、当時ジオン公国の勢力下であったアリゾナ・フラットネイル基地に運び込まれた。合計38回のテストを行ったが、トラブルが続発。推進機の能力や燃料搭載量の問題からジャンプ移動という範疇に収まるもので、航空機のような飛行はできなかった。

端的にいえば失敗作で、その結果ドダイYSに載せる手法が選択された。なお、計画は規模を縮小されながらも継続され、YMS-07Bベースの4号機（YMS-07H-4）では、エンジンの換装ならびに肩部可動翼の装着などで、それなりに性能向上を果たした。しかしテスト中に空中爆発事故を起こし、テストパイロットのフランク・ベルナール少尉が犠牲となる痛ましい結果となった。

MS-07C-5

グフ試作実験機

SPEC	
頭頂高	18.7m
本体重量	57.4t
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・サーベル
備考	ノーマル装備

ODA'S COMMENTARY

GUNDAM CENTURY の中で軍事メーカーが2つ書かれたのには非常にヒヒ とくるものかあ ったんです 映像に出た機体は競作に勝った機体としてそこにあると考えると敗れた機体が逆算できるしゃないですか たからMSVには競作エピソートかたくさんあるわけです

でも その設定はあくまでその時点ではオフィシャルではないので画を描かれる大河原さんには関係ありません だからグフ試作実験機はクフとトムの間の機体として描かれてきて こちらの想定と違うので設定を作るのにも苦労しました 大河原さんはもちろんですが MSV は色々な人か作 てきたものをそのまま使うのか基本方針でもあ ったんですよ 子供レヘルて見て 「自分の好きなようにや ていいんた」というのを啓発するということに繋かっていると思うんです (小田)

ドム開発のテストベッドとなるグフタイプ

脚部の推進機構はドムのホバー推進への布石

複数のタイプが作られたMS-07C（C型）だが、その中でもMS-07C-5グフ試作実験機（C5型）は、もっとも異色の機体だ。両腕の固定武装は廃し通常のマニピュレーターとし、ジオン公国軍モビルスーツの大きな特徴であったモノアイは凸型の独特の構造になっている。このC5型は推進関連のテストに用いられた機体（その意味では、飛行試験型のH型とも通しるものがある）で、新型推進機構を用いた高速移動をその課題としていた。そのため、背部ランドセルのスラスターは可能な限りの強化が行われている。それに加え、脚部には補助推進エンジンを内蔵した。また、新型の格闘用武装であるヒート・サーベルのテストも本機に課せられた使命であった。

このことからも本機は、MS-09ドム開発用のテストベッド機といえる。そのため、機体各部にはグフ系の意匠とドム系の意匠が混在しており、異色に見える一因ともなっている。また本機の評価についての詳しいデータは残ってはいないが、その後開発されたMS-09の完成度をみるに、一応の成功を見たということができるだろう。ちなみにヒート・サーベルは本機のテスト段階ですでに完成していた。テストは北アメリカで行われたが、製造されたのは1機のみで、実戦への参加記録も残っていない

YMS-08A

高機動型試作機

SPEC	
頭頂高	18.8m
本体重量	65.2t
全備重量	76.6t
装備	ヒート・ホーク　ザク・マシンガン

ザクから設計を流用 しかしこれが足かせに!?

ジオン公国軍の陸戦用新型MSとして誕生したMS-07Bグフだが、このMS-07Bと並行してMS-08計画も進められていた。YMS-08Aはその計画において開発されたモデルで、基本設計はMS-06Fザク Ⅱを流用し、MS-07B同様ラジエーターの能力向上や装甲の強化、機体の軽量化が行われている。新型スラスターを脚部とランドセルに装備し、短距離ジャンプ飛行を実現しようとしたが、これは出力不足で失敗に終わった。結局、MS-08計画はMS-07Bに統合される形となり、試作機5機が製造されたのみであった。

ODA'S COMMENTARY

作中でサクが重力下でジャンプしながら移動するシーンがありますが、それをもうちょっと発展させて推進器の力で大ジャンプさせて　絵的な軽さを出したらどうかと考えてこのデザインに設定をあてました　デザインラインには連邦がまじっていますが、そこもなんとでも言えます。MS-07との競作機と位置づけました。ザクとかドムとか名前をつけるのは容易じゃありませんでしたから、この機体の名称は「MS-08高機動試作機」です　08は立体で動かしてみるときっと格好いいと思いますよ。（小田）

ペットネームは持たないプロトタイプ

MSN-02

ジオング　パーフェクトジオング

SPEC	
頭頂高	35.8m
本体重量	317.2t
装備	頭部メガ粒子砲 5連装メガ粒子砲×2 腰部メガ粒子砲×2

真のオールレンジ攻撃を行なうための姿をもつ

ジオン公国軍が推し進めた「ビショップ計画」の成果として生まれた有線サイコミュ搭載のMSN-02ジオング。合計３機が製造され、そのうち１機をシャア・アズナブル大佐がア・バオア・クー戦で使用したことは有名だ。本機は準宇宙戦闘用の機体なため一般的な歩行ユニット（脚）は装備されておらず、頭、胸、腰、両腕、両脚の7パートを用いたオールレンジ攻撃が可能な機体というのが、軍本部の描いたMSN-02の真の姿であった。なお、他の２機と同時開発中だった歩行ユニットは戦火で失われている。

ODA'S COMMENTARY

これは私がラフを描いて大河原さんに依頼しました　ジオングはアンテナの形といい　足がない以外にも未完成感がものすごくある機体です。だから完成形に近づいたジオングはもう少し違う形をしているんじゃないか、アンテナの形状も違っているんじゃないか、というようなメッセージを付けたんですが、結局そのあたりを大河原さんがいじることはなかったですね。なので僕の考えているパーフェクトジオングは少し違います。脚のスカートには後方に向けて張り出しを付けてもらっていますが、これは肩の意匠を当てたものです　当時はジオングに足が付いたらどうなるか　というようなことはみんなかまず考えていましたね。自分なりの完成形イメージのジオングは03型としてビショップ計画の最後に出てきます。（小田）

ジオン公国軍の象徴！未完成だったジオングの完成形

YMS-09

プロトタイプドム

SPEC	
頭頂高	18.6m
本体重量	60.8t
装甲材質	超硬スチール合金
搭載	ヒート・サーベル ジャイアント・バズ

戦線なわけです　たから場所かアフリカならTrop（トロピカル）になるのは当然ですよね

これらの元ネタはご存知の通り　第二次世界大戦のアフリカ戦線のメッサーシュミットBf109などの砂漠戦仕様を現すTropです　まあ　防塵フィルターなどを付けただけの機体なのですが。　小田）

陸戦運用の課題をクリアするために開発

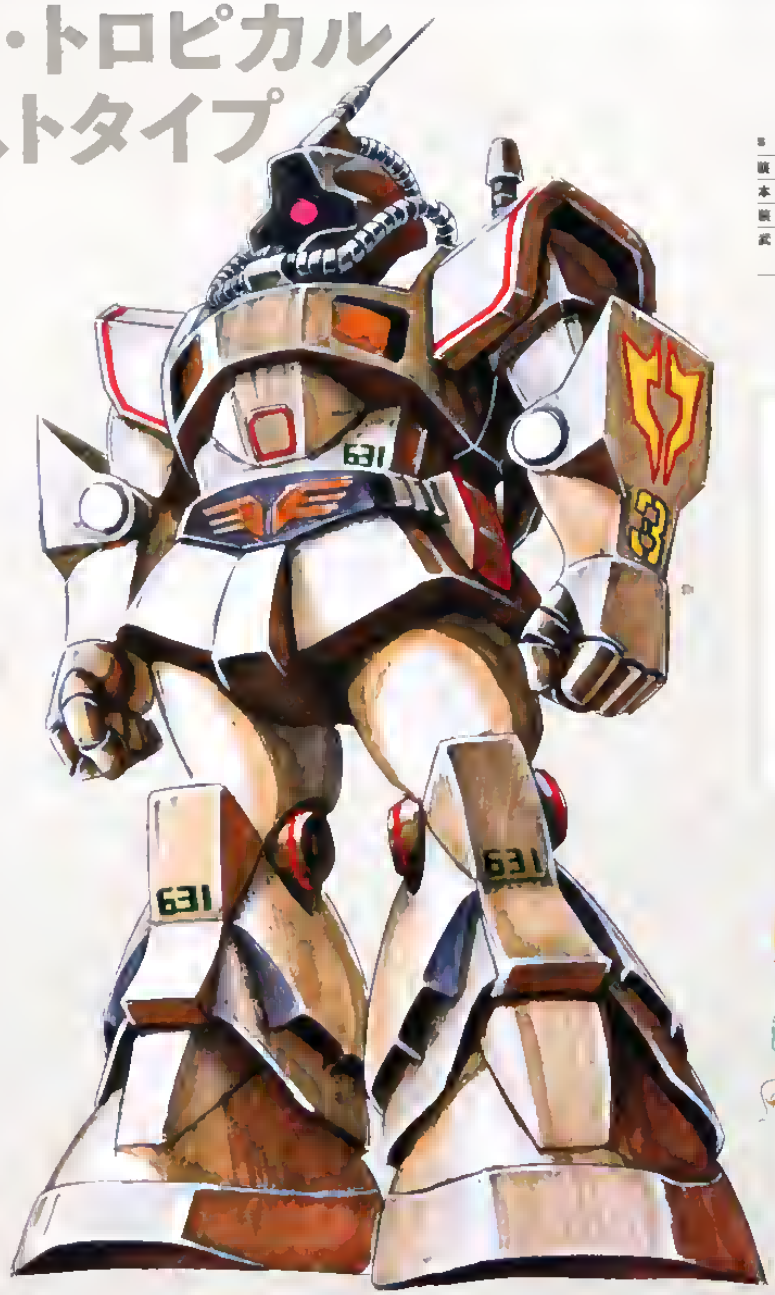
ホバー推進で実現した既成概念を崩す機動性

モビルスーツ（MS）を地上（地球）に持ち込んだジオン公国軍は、重力下におけるMSの移動力、機動力という問題に突き当たった。MS-07Bグフを用いてMSに飛行能力を付与する試みも行ったが、これは最終的に航空機のド・ダイYSと連携する形に落ち着いた。一方で、陸戦のための機動力確保としてホバー推進機能を持つ機体の開発計画にも取り組んでいる。これはMS-07C-5グフ試作実験機を経てMS-09ドムとして花開くのだが、YMS-09プロトタイプドムはその前身にあたる。当初のプランでは純粋なホバークラフト方式だった推進機構は、熱核ジェットとロケットによる複合推力方式にホバークラフト技術を応用したものに落ち着いた。

試作はジオン公国本国で行われ、地球のキャリフォルニア・ベースで実地テストが行われている。ジオン公国では本機の開発に力を入れており、その写真公表や報道も多く行われている。完成記念式典には将軍や高級将校が多数参加しており、主武装の360ミリバズーカの試射を行なう本機の後ろに式典用のマーキングがなされたMS-06Jザクが控えた写真は広く知られている。これはキャリフォルニア・ベースの第5試験場での模様で、機体を操縦していたのはフレデリック・クラムベリー大佐であった。

YMS-09D

ドム・トロピカルテストタイプ



SPEC

頭頂高	18.5m
本体重量	65.1t
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ヒート・サーベル ジャイアント・バズ

OGA'S COMMENTARY

大河原さんのイラストで脚のホバーシェットエンジンかないデザインが上がってきたんです　つまり　ドムの陸戦兵器として革新的な部分が抜けている機体なので、プロトタイプとしたわけです　でも戦線が逼迫すると実戦時投入しなければならなくなるわけです。で、オデッサ戦以降の陸戦での激戦区といえば、アフリカ

通信能力を強化した局地戦用機

酷暑の環境において最適化されたドム

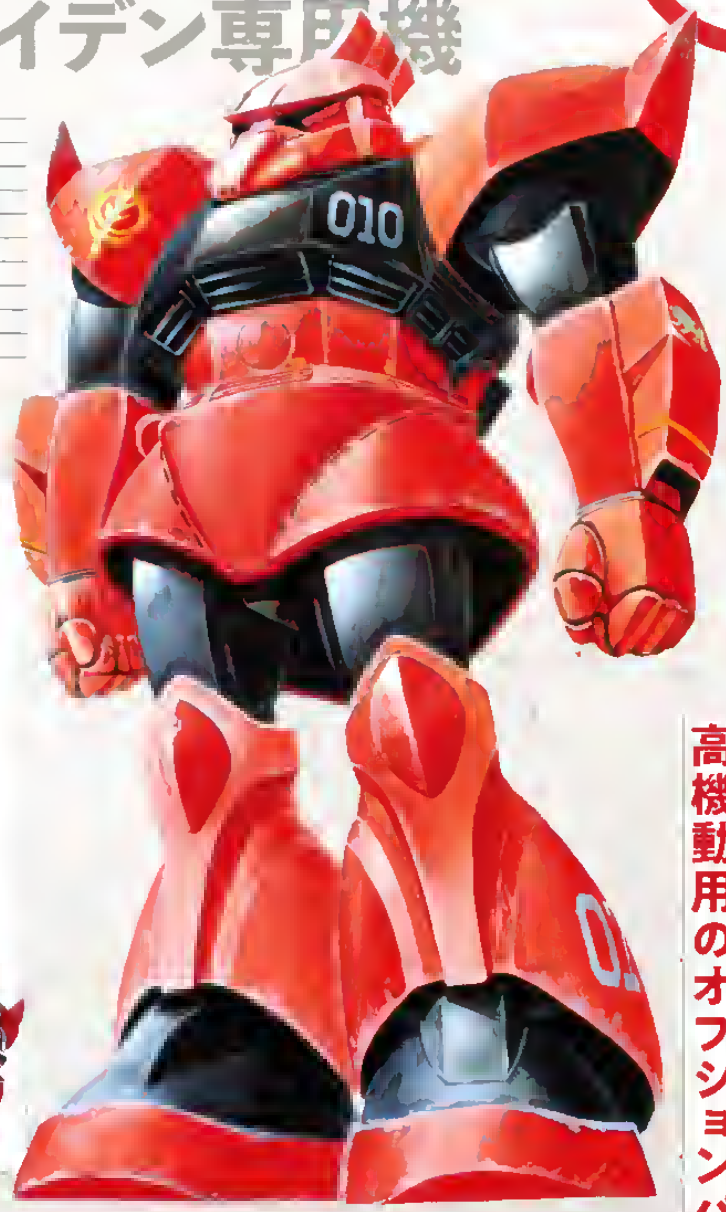
MS　09ドムは、ホバー推進装置を備えた画期的なMSとして成功を収めていた。特にその特性を活かしやすい一部地域での活躍には目を見張るものがあった。アフリカ戦線もそうした戦場のひとつではあったが、厳しい気候や自然環境の中で運用する際、メカトラブルが多発し、現場からはその改善要求が上がってきた。YMS-09Dドム・トロピカルテストタイプは、MS-09で一体化されたランドセルの再分離および冷却システムの大容量化を図り、熱問題の改善を目指した。また、頭部には近距離通信用のアンテナを取り付けている。この通信能力強化も現場からの改善要求のひとつであった。なお、熱帯戦を想定した機体テストはYMS-09の2号機を改修して行っている。これが後に改められ、ドム・トロピカルテストタイプとなった。

このYMS-09Dにおける熱帯戦仕様は通常のMS-09を改造することで同じ仕様にできたため、キャリフォルニア・ベースで改修用キットを生産し、同基地で換装され戦地へ送られた機体もある。オプションを装備した機体を運用した部隊としては、北アフリカのカラカル部隊があり、同隊のロイ・グリンウッド少佐の乗機〝サンダーキャット〟が有名である。このほか、中東のスカラベ部隊も熱帯戦仕様の本機を用いていた。

MS-14B

高機動型ゲルググ ジョニー・ライデン専用機

SPEC	
機頂高	19.2m
本体重量	53.5t
全備重量	76.8t
ジェネレーター出力	1,440kW
スラスター推力	79,900kg
センサー有効半径	6,300m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ビーム・ナギナタ ロケット・ランチャー ジャイアント・バズ、ほか



高機動用のオプションパックを装備したゲルググ

エースパイロット向けの調整を受けた機体と装備

一年戦争末期にジオン公国軍のモビルスーツ（MS）開発ノウハウの集大成として登場したMS-14Aゲルググ（A型）。当然軍部からの期待も大きく、YMS-14としての初期生産型の頃から、すでにオプション装備類は考案されていた。増速用ブースターとビーム・キャノンパックがそれで、このうち増速用ブースターを装備した機体をMS-14Bゲルググ高機動型と呼んだ（通称B型）。初期生産型のうち24機がパイロットに応じたチューニングを受け、これらオプションパックを装着している）。この増速用ブースターなどのオプションパック類は簡単に脱着が可能で、ブースターを外したMS-14BはA型と同様の運用が可能であった。また、A型には小改造でB型用のブースターパックの取り付けができた。

本機の1号機は、ジオン公国突撃機動軍キマイラ隊所属のエースパイロット、ジョニー・ライデン少佐の乗機となった。この他にも11機がエースパイロットに渡ることとなる。キマイラ隊は大戦末期になって各部隊のエースパイロットをよりすぐって編成された精鋭部隊だ。その来歴ゆえ活動期間は短かったが、謎の多いエース部隊としてその名は広く知られていた。"真紅の稲妻"ことライデン少佐は31名のキマイラ隊所属パイロットの中でも大いに活躍した人物である。

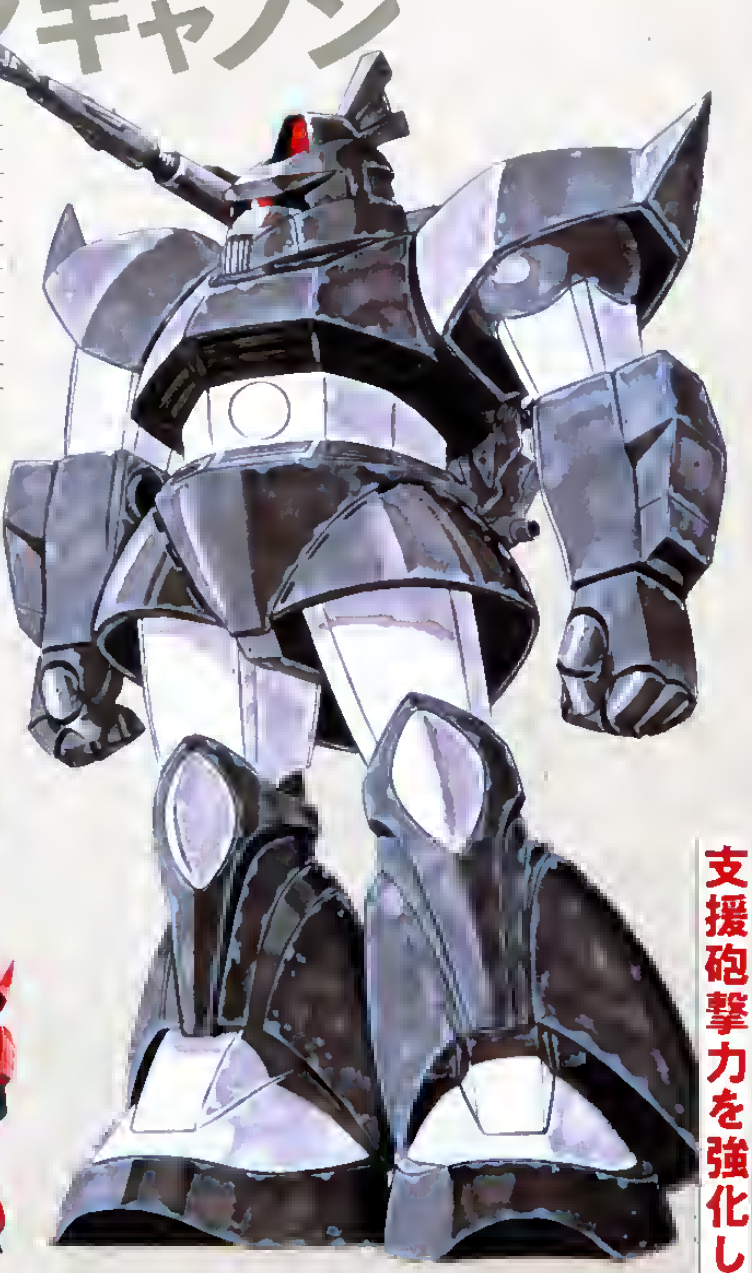
ODA'S COMMENTARY

大戦末期の機体なので　ハリエーションはそれほどないはずで　せいぜい3つで収まればいいんですよ　で　大河原さんから上がってきたゲルググのハリエーションはバ　クバックが付いていて赤いんですよ　本来バックパックを廃止しているのがこの機体の良さなのですが　これは増速用のアフターパーツにするしかないと　B型を設定したわけです　キャノンの方はバックパックを活かすのはこの手しかなかったんです　たからB型と兵装交換出来るようにして　キャノン砲ではなくビーム・カノンにして　ライフルと併せて二重のビーム兵器にするというわけです　「ザクⅡとケルクグをメッサーシュミットで例える！」と設定していましたザクⅡはドイツ空軍機のメッサーシュミットBf109なのに対して　ケルググはMe262であると　ビーム兵器の有無が　世代を分ける分水嶺なわけです　それにさらにロケットエンジンを付加したMe262C 1aはケルグクのキャノンなんですよ。（小田）

MS-14C

ゲルググキャノン

SPEC	
頭頂高	19.3m
本体重量	55.8t
全備重量	79.8t
ジェネレーター出力	1,440kW
スラスター推力	73,900kg
センサー有効半径	6,300m
装甲材質	超硬スチール合金
武装	ビーム・ナギナタ
	ビーム・キャノン
	3連装ミサイル・ランチャー
	バックラー・シールド



VARIATION

支援砲撃力を強化した砲撃タイプの最新鋭機

精鋭「キマイラ隊」が運用したことで有名

初期生産型であるYMS-14ゲルググのロールアウトと同時に用意された、ビーム・キャノンパックを装着したモデル。この他、射撃精度を高めるため補助カメラが頭部に追加されている。また、360ミリロケット砲2門を装備することもできた。なお、ビーム・キャノンを装備した機体の総数は15機どまりであった。このMS-14Cゲルググキャノンも、MS-14B高機動型ゲルググ同様、キマイラ隊などエース部隊へ配備された。ザンジバル改級「キマイラ」を中心として活動していたため、キマイラの呼び名があるこの部隊は、様々な部隊からエースパイロットを抜擢し編成されたトップエース部隊であった。隊員はジョニー・ライデン少佐をはじめトーマス・クルツ中尉、ジェラルド・サカイ大尉などで、当時最新鋭機であるMS-14のチューニング機（MS-14BおよびMS-14C）を駆るに相応しいメンバーといえる。

キマイラ隊はア・バオア・クー戦の直前にティアンム艦隊に背後から攻撃を仕掛け、サラミス級巡洋艦2隻撃沈、MS14機撃墜など大きな戦果を上げたという。一方、キマイラ隊でもMS-14C2機が撃墜されるなど被害が出た。ア・バオア・クー戦においても活躍したとされるが、その後の隊員の消息を含め、不明な点や謎が今なお多い。

RX-78-1

プロトタイプガンダム

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	43.4t
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
武装	頭部バルカン砲×2
	ビーム・サーベル×2
	ビーム・ライフル（ハンドショットガン・スタイル）

OOA'S COMMENTARY

決定稿直前のちょ と太めのカンダムかやりたかったんですか オーダーをちょっとしくじりましたね。「その時のもの」という伝え方であのホリュームになるとはかり思っていました 上がってきたイラストは足のスリットや腕などティテールたけがその当時のものになっていて太くはなっていなかったんですね 腰のパーツはビーム・ライフルのホルスターっていうのが定説てすかよく見るとそれもちょ と違う気がしますよね G3カンダムは色が違うたけですか これはいろんなG-3があっていいと思います 小説版のG-3は「鷹いクレー」だったかと思います 小田

連邦軍のV作戦で開発されたRX＝ガンダムシリーズの始祖

特殊なライフルマウントを持つ軽量化に特化したガンダム

ジオン公国軍のモビルスーツ（MS）〝ザクに対抗すべく地球連邦軍が開発した試作MSのひとつ 型式番号RX・75、RX・77、RX 78の3種の各MSプランにおいて、RX・75がARV（装甲戦闘車両）の発展型なのに対しRX・77とRX・78は人型となり、より進んだコンセプトであった。

RX・78ではRX・77の固定武装を頭部バルカン砲以外は廃し、シールドやビ1ム・ライフルといった装備類を戦況に合わせ選択可能な、よりMSらしい機体となった。RX・78の原型1号機は徹底した軽量化が図られ、2号機、3号機とともにサイド7へ運ばれ、テストが行われている。1、2号機は当初、ビーム・ライフルと腕部を一体化させる機構を備えており、右腰部には専用ホルスターが設けられていた しかし後に不要と判断され、この機構を持たない3号機と同様の仕様に改修されている。

プロトタイプガンダムの型式番号、RX・78・1の「1」は1号機を表すのではなく、仕様を示しているとされる。1号機、2号機は当初は同じRX・78・1仕様であった サイド7でのテスト時には白、青、赤のデモンストレーションカラーに塗装されている。なお、本機はサイド7がシオン公国軍による奇襲を受けた際に失われたとされる。

RX-78-3

G-3ガンダム

S P S C	
頭　頂　高	18.0m
本体重量	47.2t
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
武　　装	頭部バルカン砲×2
	ビーム・サーベル×2
	ビーム・ライフル、他

マグネット・コーティングが施され高い運動性を発揮したガンダムタイプ

最終決戦間際の改修で反応速度は2倍!?

ジャブローにおいて製造され、サイド7でテストを行った3機のRX-78のひとつに改修を加えたガンダムタイプ。最終的に3号機がG-3ガンダムと呼ばれる仕様となったためRX-78-3といえば3号機を指すのが一般的だが、実際には当初、3号機の仕様はRX-78　2仕様だった。本機は、ジオン公国軍によるサイド7襲撃時に破壊されたと見られていたが、その後ほぼ無傷の状態で発見され、実戦に参加している（ただし、2号機の部品取りとしてホワイトベースに搭載後、オデッサで回収され再構築された、など諸説ある）。

星一号作戦の際には、機体の関節各部にマグネット・コーティングが施され、機体の反応速度を向上させる処理が行われている。また、反応炉用のレーザー加速器も新型に換装され、旧来の2倍の反応速度を得ることとなった。この「マグネット・コーティング処理を行った3号機をテストベッドとして、当時アムロ・レイ少尉の搭乗機体に同様の処理を行った」というのが通説だが、3号機にレイ少尉が直接乗り換えたとする説も根強い。機体のカラーリングもサイド7においては、1号機、2号機と同様デモカラーであったが、後にグレーとライトグレーを基調とした低視認性を追求するカラーリングがなされたという。

DDA'S COMMENTARY

小説版からMSVに登場させた機体です。小説版では低視度迷彩だから　グレー基調ですが、それから紫系になったのはアニメに歩み寄ったからです

ガンダムの色に関しては、時期によって塗装が変わっていると設定的に逃しているんです。サイド7にはテモンストレーションカラーが行っている」白い機体を使っているのはそのため。プロトタイプガンダムがこの時期は胸が赤いとか、3号機の胴回りはルナ・チタニウム合金の地金のまま無塗装であるなど、様々設定しました。（小田）

FA-78-1
フルアーマーガンダム

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	62.5t
装備	頭部バルカン砲×2
	2連装ビーム・ガン
	キャノン砲
	肩部ミサイル・ベイ×2
	腰部ミサイル・ベイ×2

装甲だけではなく火力も大幅にアップ

一年戦争も末期頃、連邦軍で進められていたRX-78用の増加ウェポンシステムを装着したガンダムタイプ。胸、肩、腰、脛などに簡易装着型の装甲を増設。さらに背部ランドセルには360mmロケット砲、右腕部に2連装ビーム・ライフルを備える。また、これら装備類の重量増を補うため、脚部およびランドセルの推進装置は強化されている。この強化プランはFSWS計画と呼ばれ、完成後はニュータイプ部隊が運用する予定だったが、実働寸前で中止されたとも、テスト機による実戦が行われたとも伝えられる。

ガンダムの増加ウェポンシステムプラン コードネームはFSWS計画

RX-78-2
ガンダム

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	43.4t
全装重量	60.0t
ジェネレーター出力	1,380kW
スラスター推力	55,500kg
センサー有効半径	5,700m
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
装備	バルカン砲×2
	ビーム サーベル×2
	ビーム・ライフル
	ハイパー バズーカ
	ガンダム・ハンマー 他

一年戦争でもっとも有名となったガンダム

連邦軍がジャブローで開発・製造した3機のガンダムタイプのうちの1機。RX-78-1から細部に変更が加えられ、ビーム・ライフルや腕部、足首部の装甲など、各部形状に違いがある。サイド7において1号機、3号機とともにテストが行われていたが、ジオン公国軍の襲撃時に民間人の少年、アムロ・レイが偶然により搭乗。以後、ニュータイプパイロットとして開花する彼の活躍により、"ガンダム"といえば、この機体を指すほどに有名となった。ア・バオア・クー戦時、損傷により擱坐、放棄されている。

後に伝説となった連邦軍初の白兵戦用機

RX-77-3

ガンキャノン重装型

SPEC	
全高	17.5m
本体重量	58.6t
ジェネレーター出力	1,380kW
スラスター推力	62,200kg
センサー有効半径	6,000m
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
武装	バルカン砲×2、ビーム・ライフル キャノン砲×2、グレネードランチャー

単独での運用までも考慮された機体

V作戦によって完成したRX-77-2ガンキャノンを改良・発展させていく途上で開発された機体。装甲や火器、および射撃時の反動といった課題を解決すべく手が入れられている。特に連射能力と給弾能力が改善されたのが特徴。また、本機の開発において「単独または同機種による部隊編成で集団戦が可能なこと」という性能要求項目が存在する。RX-78との連携運用や支援を期待されていたRX-77の運用方法を一変させるものである。が、実際には集団戦はともかく、単機での戦闘を行なうにはまだ不十分な点が多く残った。

ODA'S COMMENTARY

ガンキャノンのMSVはハンダイさんの要望で出した部分が大きいです。部分的に進化させていった感じなので支離感がありますね。重装型の青いカラーリングは色味的に好きです（小田）

ガンキャノンの運用データをベースに開発された武装強化型

RX-77-4

ガンキャノンII

SPEC	
全高	18.0m
本体重量	52.7t
武装	バルカン砲×2 ビーム・ライフル、ビーム・キャノン マガジン装備型ファイア・ナッツ

精度と火力の双方を向上させた発展型

RX-77-3をさらに発展させたモデル。武装も大きく刷新され、大型のビーム・キャノンと精密な射撃を実現する照準システムを搭載している。これにより固定武装の砲は一門となったが、連射性は向上している。また、標準装備として腰部にマガジン装填式のファイア・ナッツを装備している。その他の特徴として、機体重量を軽減させたことや、スラスター推力の強化により、ジャンプ飛行が可能となった。少数が完成し実戦テストを兼ねて北アメリカ戦線に参加したとされるが、実戦に参加することはなかった、という説もある。

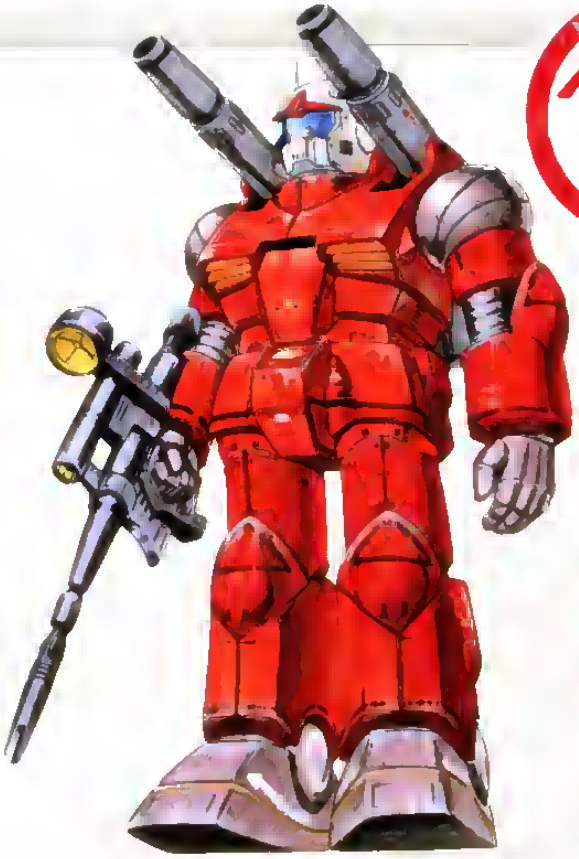
ODA'S COMMENTARY

この頃の大河原さんは「Zカンダム」の第一グループのラフを描いていた頃じゃないかな。「コミックボンボン」で、永野（護）さん時代のガンダムMk IIをスクラッチで作っている途中で無理やり藤田一巳版へ変更してた混乱期、MK IIのテストショットが来たのでそこにガンキャノンIIとRMV-1を並べて、新世代のカンダムトリオ、というような写真を撮りたい、という企画がありました。そういった企画のページがどこかに残っているはずです 私が手がけたティターンズカラーで塗り直したRMV-1があるんですよ。（小田）

ビーム兵器搭載で火力の増強を図る中距離支援機

RX
ガンキャノン

SPEC	
頭頂高	17.5m
本体重量	51.0t
全備重量	70.0t
ジェネレーター出力	1,380kW
スラスター推力	51,800kg
センサー有効半径	6,000m
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
備考	バルカン砲×2 ビーム・ライフル 240mmキャノン砲×2 ハンド・グレネード



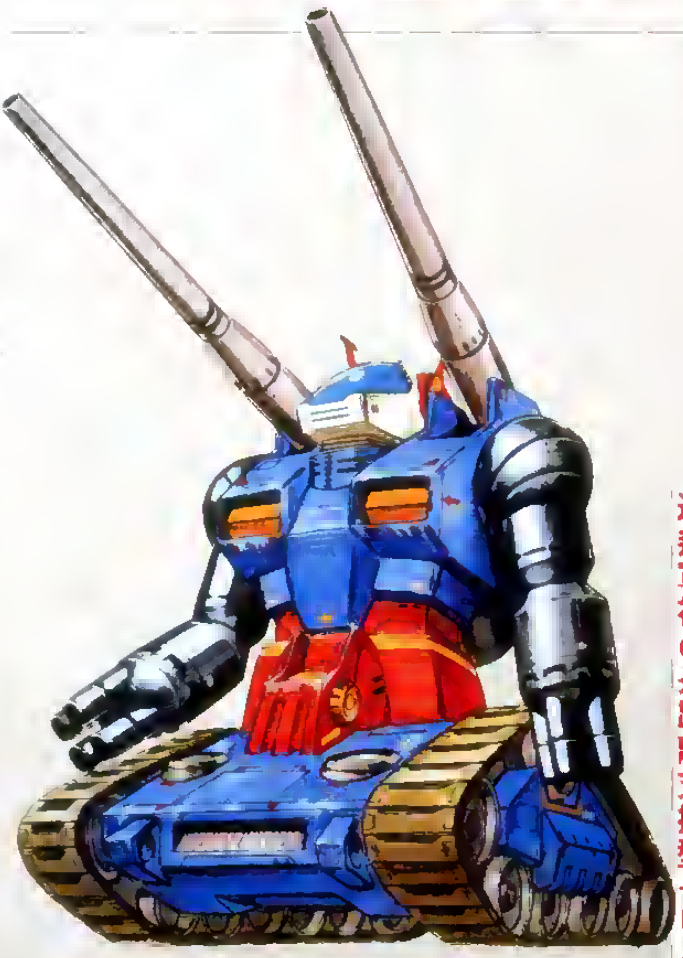
ホワイトベース隊で活躍した中距離支援型

陰ながらガンダムを支えた ホワイトベース隊のいぶし銀

地球連邦軍が開発したモビル・スーツ（MS）／MFV枠としたRX-75ガンタンクと比べ、小型、高い走行というMSとしてのコンセプトを持つ。コア・ブロック・システムを搭載し、長射程のビーム・ライフルや肩部の240mm低反動キャノン砲など中距離からの火力支援を目的とする。そのため、装甲は厚いもののシールドは装備していない。また、運動性もRX-78-2ガンダムに比べるとやや低い。一年戦争においてホワイトベース隊のカイ・シデンなどが同機による活躍を見せたが、これ以外にも複数が製造され、各地で戦闘の記録が残っている。

RX
ガンタンク

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	56.0t
全備重量	80.0t
ジェネレーター出力	878kW
スラスター推力	86,000kg
センサー有効半径	6,000m
装甲材質	ルナ・チタニウム合金
備考	4連装ポップ・ミサイルランチャー×2 120mm低反動キャノン砲×2



コア・ブロック・システムを実用化した 連邦軍初の長距離支援型モビルスーツ

陸上での砲撃戦から 宇宙空間戦まで奮闘

RTX-44をルーツとし、地球連邦軍が初めて開発したMS。戦車の車台に上半身を載せた姿で、MSとしては明らかに進化の途上にある特徴をもつ。120mm低反動キャノン砲や腕部のポップ・ミサイルランチャーなどを備え火力は高い。また、RX-77ガンキャノンやRX-78ガンダム同様コア・ブロック・システムを採用する。陸上戦闘ではそれなりに有用性が認められたのか、後継機も開発されている。ホワイトベース隊のハヤト・コバヤシやリュウ・ホセイが本機で戦闘を行っているが、宇宙空間では苦戦する場面も多かった。

RMV-1

ガンタンクII

SPEC	
頭頂高	15.2m
本体重量	98.4t
ジェネレーター出力	221kW
装甲材質	チタン系合金
武装	車輪部機関砲
	長距離キャノン砲×2
	3連装ミサイルランチャー
	4連装ロケットランチャー

OGA'S COMMENTARY

MSVは、TVシリーズだろうと、劇場版だろうと、小説版だろうと分け隔てなくネタにしているのですが、ガンタンクだけは、当時の私の趣味でいじってないです。ガンタンクバリエーションは、大河原さんが自発的に描かれた絵だったと思います。僕は発注していないですが、モビルスーツよりもAFVの方向に持っていったので、カッコいいですよね。

今でこそガンタンクは立体映えする面白い形をしていると思うのですが。Gアーマーはコア・ブースターが登場したので触りませんでしたね。（小田）

ガンタンクの高い火力を強化した超攻撃型の戦闘ビークル

先祖返りしつつも戦闘力を強化させる

もともとAFV（装甲戦闘車両）から発展していった地球連邦軍のモビルスーノ（MS）開発は、一年戦争においてRX-78、いわゆるガンダムでひとつの到達点に達することになる。RX-78の開発計画の過程で生まれたRX-75ガンタンクは、MSとして未完成な機体ではあったが、支援砲撃や対空砲火といった従来のAFVが担う役目だけでなく、敵MSへの対処もある程度はできた。

そこで、AFVの延長線上にある機動兵器として後継機の開発が進められることとなる。それがRMV-1ガンタンクIIである。武装として、頭頂部両側部の120ミリキャノン砲のほか、4連装の180ミリロケットランチャーや3連ミサイルランチャーといった兵装を備え、RX-75よりもさらに火力が増強されている。スモークディスチャージャーを備えている点や、乗員が3人（上部1名、下部2名）となっている点もAFVらしさの残る部分といえよう。なお、RXシリーズの特徴であったコア・ブロック・システムは他の多くの量産化を前提としたMS同様オミノトされている。

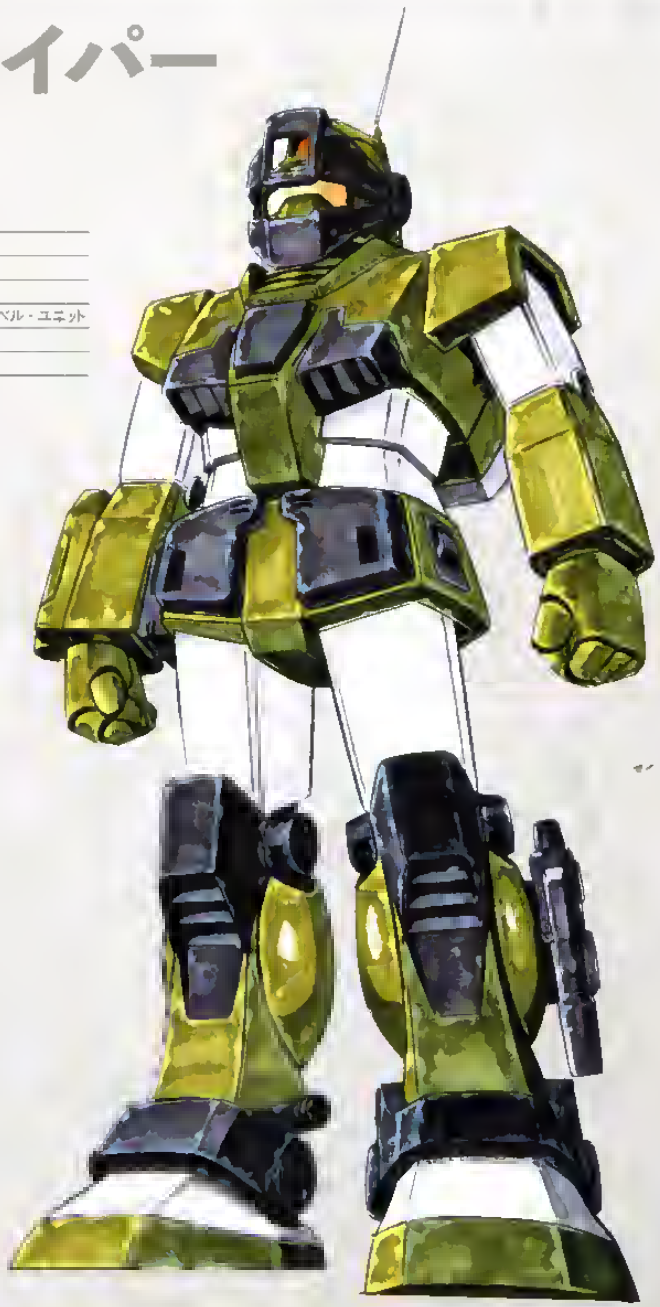
本格的な量産化は間に合わなかったが、6機が生産され北アメリカや中央アジアに配備されている。しかし戦いの場はすでに宇宙に移っており、本格的な実戦を経験することなく終戦を迎えた。

RGM-79SC

ジム・スナイパーカスタム

エース専用機としてカスタマイズされた高機動重武装のジムタイプ

SPEC	
全高	18.0m
本体重量	44.2t
装甲材質	チタン系合金
武装	ホノクスタイプ・ビーム・サーベル・ユニット
	R-4タイプビーム・ライフル
	ハンド・ビーム・ガン　他



連邦軍の機体は、'トリコロールカラーを使っているので　ミリタリーカラーにしなかったんだけど、ガンダムに近い性能を持っている機体をということで、スナイパーカスタムにはミリタリーカラーを背負わせたんです

携行する武器は、当時アニメのTVコマーシャルが企画された時、板野一郎さんに発注されて設定したもので　最初は小型のビーム・ライフルを持たせていたんです「カノダムはものすごいお金をかけた機体で　おいそれとは量産できない」という立ち位置を持たせたわけです。（小田）

艦隊防衛などに活躍した高性能なスペシャル・ジム

一年戦争において地球連邦軍の主力量産モビルスーツとして重要な役割を果たしたRGM-79ジム。ジオン公国軍の主力であるMS-06ザクIIなどに比べれば性能的には勝っていたが、それでもRX-78ガンダムのような圧倒的な優位ではなかった。この点に対して連邦軍の一部（エース）パイロットからは改善の要求があり、優秀なパイロットに向けたRGM-79のカスタムモデルが製造されることとなる。そのひとつがRGM-79SCジム・スナイパーカスタムである。

武装は専用のビーム・ライフルが用意されたが、これは射程および出力が強化されている反面、装填数（発射回数）は少ない。推力を向上させたランドセルや脚部のサブスラスターによって機動性の強化がなされているほか、各々パイロットの要望に合わせて、個別に調整がなされている。しかし、このような高コストなカスタム機ゆえに製造数は50機ほどにとどまっている。

本機に搭乗した著名なパイロットとしてはフランシス・バノクマイヤー中尉が挙げられる。彼の機体は頭部に格闘戦用のバイザーを装備するほか、脚部に2連装ビーム・ガンなどを持ち、非常に重武装な機体であった。この装備は有用とされ、それゆえ生産された約半数の本機がこの仕様と同様となった。

RGM-79L

ジム・ライトアーマー

極限まで装甲を削って高機動化したもう一つの連邦軍のエース専用機

SPEC	
頭頂高	17.8m
本体重量	36.8t
ジェネレーター出力	1,250kW
装甲材質	チタン系合金
武装	ビーム・サーベル
	ビーム・ライフル
	ビーム・スプレーガン

極限の機動性こそがビーム兵装に対する防御

RGM-79ジムの派生機で、RGM-79SCジム・スナイパーカスタムと同様に一部パイロットに向けたカスタム機だ。本機の特徴は主に装甲周りを中心とした徹底的な軽量化がなされている点だが、これはビーム兵装を用いた戦闘における勝敗の決定を前提として、高い機動性を追求した結果だ。武装はビーム・ライフルを装備し、一撃離脱戦法を基本戦術とする。このため、艦載空間戦闘機から本機に機種変換を計ったパイロットにも馴染みやすく、違和感なく受け入れられた。

OOA'S COMMENTARY

ジムの3機種は、「連邦軍を入れてくれ」というバンダイさんからの要望で製作したものです。でも、ジムは実戦投入されて1～2カ月という機体で、その時点からバリエーションがあるというのはおかしいと、あまり乗り気じゃなかったんですよ（笑）。

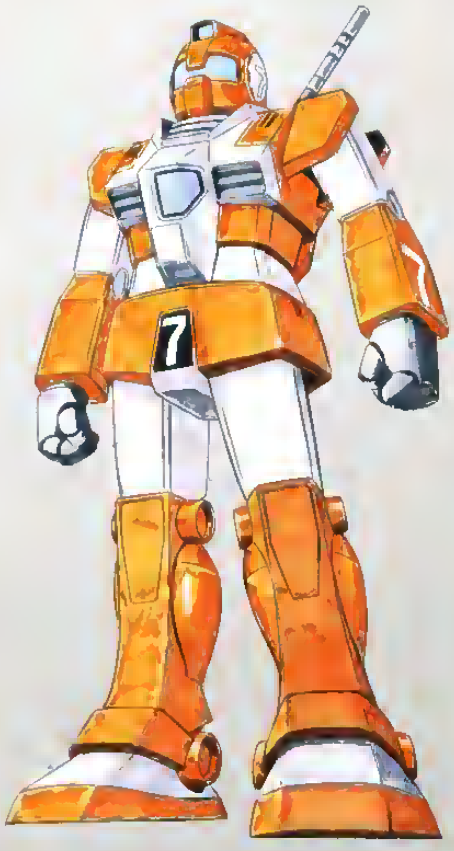
だからジムの3機種はカンダムの色の要素を三色にはらして、「トリプルファイター」（昭和47年放送の円谷特撮作品。グリーン、レノド、オレンジファイターが合体してトリプルファイターになる）です。だから一体すつは一人前じゃないんですよ（笑）。

TGM-79

ジム・トレーナー

モビルスーツパイロット養成のため開発された練習機

SPEC	
頭頂高	17.8m
本体重量	40.5t
武装	ビーム・サーベル
	ビーム・スプレーガン



武装も装備しているが実戦には使われなかった

地球連邦軍はRGM-79ジムを大量生産したが、必然的にそれを操縦するパイロットも大量に養成する必要があった。本機はこうしたパイロット養成のために開発された練習機である。そのため、通常のコクピットのほか、教官搭乗用のガラス張りのコクピットが設けられている。基本的な性能はRGM-79ジムと同等だが、練習機ということで装甲のグレードは落とされており、実戦向きではない。操縦訓練の他にも、後方部隊において作業用機体としても運用されている。

RGC-80

ジム・キャノン

SPEC	
頭頂高	17.8m
本体重量	49.9t
ジェネレーター出力	976kW
スラスター推力	63,500kg
装甲材質	チタン系合金
武装	バルカン砲
	240mmキャノン砲
	ビーム・スプレーガン
	ビーム・ライフル

ODA'S COMMENTARY

これもスナイパーカスタムたちと同様に　バンダイさんから「連邦軍側の機体もラインナップしてほしい」という要望から生まれた機体です　ノムには無理がある部分もありましたが、ンム・キャノンは　まあまあアリなんですよ

ンム・キャノンについては、カンキャノンというような中距離支援型という機体はあっていい。「でも量産するのはどうか？」ならば「ノムをベースにできないか」というのがアイテア。「上半身とのバランスをとるため、下半身に強固なイメーンを」というのは　安井尚志さんのアイデアでした　（小田）

ガンキャノンの量産化を図った中距離支援用のジムタイプ

パーツとラインの共用化で低コストで支援機を実現

RGM-79ジムは、RX-78-2ガンダムの実戦データを参照して開発されており、近距離戦用の機体であった。しかし実戦においては中距離における火力も必要と考えられ、連邦軍はRX-77-2ガンキャノンに類する中距離火力支援機の開発生産を計画する。しかし、RGM-79の生産がやっと軌道に乗ったタイミングで、また新規機体の大量生産は合理的ではない。そこでRGM-79の生産ラインを利用し、製造を行えるようにしたのがRGC-80ジム・キャノンである。使用されるパーツは約60パーセントがRGM-79と共通している。

U.C.0079年10月に一号機がロールアウトしたが、試験においてキャノン砲発射時の安定性に問題があることが発覚し、これを低反動ロケット砲に改め、射撃時の安定性を増すために、重心を下げる意味で脚部に左右分割式の増加装甲を取り付けている。武装はビーム・スプレーガンやバルザック式380ミリバズーカなども装備されている。その他、RX-77系の中射程ビーム・ライフルを装備する計画もあったとされる。

本機の総生産数は58機で、ティアンム艦隊および、レビル艦隊に14機、北アメリカ戦線に6機、アフリカ戦線に19機、そしてジャブロー防衛に9機が配備されている。

RGM-79

ジム

SPEC	
頭頂高	18.0m
本体重量	41.2t
全備重量	58.8t
ジェネレーター出力	1,250kW
スラスター推力	55,500kg
センサー有効半径	6,000m
装甲材質	チタン系合金
武装	バルカン砲×2
	ビーム・サーベル
	ビーム・スプレーガン　他

質は悪くなく量も多い 量産機はかくあるべし

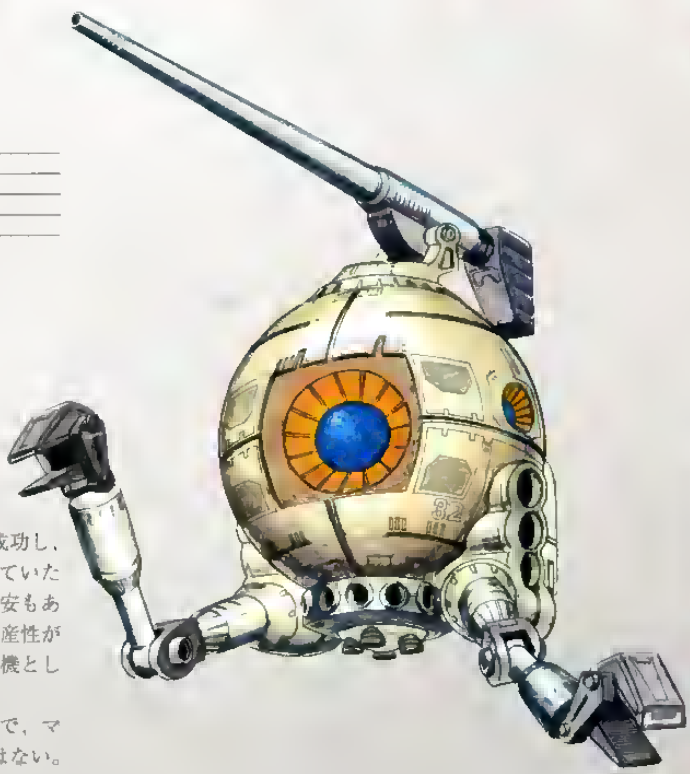
地球連邦軍が本格的に大量生産を行った初のモビルスーツ。RX-78ガンダムの実戦におけるデータを参照し、量産化に向けた設計が行われた。特に装甲材質のグレードはRX-78に比べて劣るものの、生産性は考慮された結果といえる。また、コア・ブロック・システムもオミットされ、武装もビーム・ライフルからビーム・スプレーガンが標準装備と変更され、ビーム・サーベルも一本となった。それでも性能ではMS-06ザクⅡを上回り過不足無く仕上がっていた。ただ一部パイロットの要望でカスタム機も製造されている。

一年戦争を支えた連邦軍の主力機

RB-79

ボール

SPEC	
頭頂高	12.8m
本体重量	17.2t
ジェネレーター出力	400kW
武装	キャノン砲



個々の戦闘力は低くても 数で押し込める火力を備える

地球連邦軍はRXシリーズの開発に成功し、さらにRGM-79ジムの生産開発を進めていたが、モビルスーツの絶対的配備数に不安もあった。そのような状況下において、生産性が高く、かつ低コストで投入できる支援機としてRB-79ボールが開発された

武装は口径180㎜の低反動砲が基本で、マニピュレーターはあるが格闘用装備はない。実際の戦闘においてはRGM-79の僚機としてジオン公国軍と戦ったが、後方から火力支援を行うというより、自ら戦線に突入する戦い方も見られ、損失数もそれなりに多かった。

キャノン砲で戦線と味方を支援する

試作機RX-76

見た目はボールだが れっきとした RXナンバーの機体

連邦軍が開発を進めたRXシリーズの性能は高かったが、それに比してコスト高や配備数の不足を招くことになった。そうした事態を打開すべく、主力モビルスーツの支援機としてRX-76が開発されている。これはスペースポッドのSP-W03をベースに、RX-75の主砲を改修して搭載したものである。本機は簡易モビルアーマーとすら呼び難い戦闘型モビルポッドであるが、後に生産型のRB-79ボールに発展した。RB-79は既存のスペースポッドの生産ラインを利用することで大量生産を可能とし、一年戦争で連邦軍を支えた。

作業用機械に武装を施したボールの原型機

ODA'S COMMENTARY

ホールは富野さんの穴埋めメカという感じですが、私としてはノータッチでした。このホールのイラストも記憶に無いんですよね（注＝イラストそのものは　当時刊行された講談社のポケットブックなどに掲載されている）　スペース・ポッドはボールよりサイズは小さくて　おそらく1/2くらいですよね。大河原さんの箱の遊びに任せて登場したものです　（小田）

SP-W03

スペース・ポッド

兵器として転用される前の コロニー建設の必需品

RB-79ボールのベースとなった宇宙空間作業用のモビルポッド。無論、武装などは持っていない。また、作業時の視界を確保するためコクピット周りがガラス張りになっている。この機体を基に対モビルスーツ戦闘を考慮し、本体の大型化＆装甲化を施し、武装を備えて生まれたのがRX-76、ひいてはRB-79である。球状の本体やマニピュレーター、サイドのスラスターにその面影が残っている。

コロニー建設などで活躍した作業用機械

地球連邦軍の航空戦力
宇宙戦闘機から高高度戦闘機まで

MSVが紹介されるのと同時に、ホワイトベースやマゼランといった宇宙艦艇や、様々な兵器類（中にはコスチュームや部隊エンブレムなど）が紹介されていた。ここでは当時のイラストを再録しつつ、連邦軍の航空兵器の魅力に迫ってみたい。

FF-S3
セイバー・フィッシュ

空間戦闘機に関する連邦軍の新構想において　もっとも完成が期待されていた新上空間戦闘機　機体の上下に2基ずつブースターパックを装備する。このパックには前方用3門後方用1門のロケット噴発射機がある。

ODA'S COMMENTARY

この時期「連邦でなにかやってくれ」というオーダーがあったんです。それに最初にお答えしたのがコア・ファイター系なんですが，戦闘機じゃあバンダイさんは納得しませんよね。MS開発でジオンに遅れをとっていた連邦も、航空機なら極限までいったものがあってもいいんじゃないかと。推力と制御だけで飛ぶ飛行機です。机にも推力つけて制御すれば飛ぶ，というような考え方ですね。セイバー・フィッシュは大河原さんの絵の段階ではキャノピーのラインが違いましたし，武装ポッドブースターも付いてませんでしたね。そのあたりはこちらで変えさせてもらいました。（小田）

FF-6
TINコッド

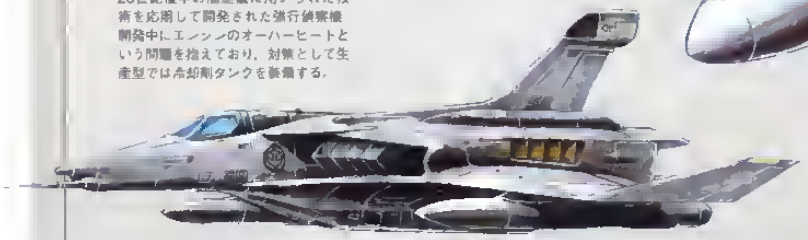
FFシリーズの中では比較的後期に開発された機体　高高度用の防空戦闘機であり，航続距離は短い　ペンシルミサイルが主兵装。

フライダーツ

リフティングボディを採用した高高度戦闘機で，推進装置はロケットエンジン。通常は地上より打ち上げられて運用するが，大型爆撃機からの発進も可能。機体左脚には帰還時に使用するフックが備わる。

フラットマウス

20世紀後半の高速機に用いられた技術を応用して開発された強行偵察機　開発中にエンジンのオーバーヒートという問題を抱えており，対策として生産型では冷却剤タンクを装備する。



マングース

一連の新構想プランにおいては初期の機体。対地攻撃機として開発され　低空・低速での性能は優い　対戦車戦闘では効果的だったがジオン公国軍のモビルスーツに対抗するにはまったく力不足だった

画：右間雄一

画：石橋謙一

画：石橋謙一

MSV

イラストギャラリー

ボックスアートイラストで振り返るMSVの姿

当時のMSVを語る上で欠かせないのが各機体の活躍を描いたイラストの数々だろう。ここでは主要アイテムであったプラモデル（全34種）にフィーチャーし、製品を彩ったイラストで振り返ってみたいと思う。

－各MSの表記名は当時の商品名（主にカタカナ）であり、現在の名称とは必ずしも一致しません。ご了承ください。また価格はすべて発売当時のものになります。

No.1
MS-06R
ザクⅡ
83年4月発売
1／144：500円

No.2
YMS-09
プロトタイプドム
83年4月発売
1／144：600円

No.3
MS-06K
ザクキャノン
83年4月発売
1／144：500円

No.4
MS-06D
ザクデザートタイプ
83年5月発売
1／144：500円

No.6 MS-08M ZAKU MARINE TYPE

画：石橋謙一

No.5 RGC-80 GM CANNON

画：石橋謙一

No.7 MS-14C GELGOOG CANNON

画：石橋謙一

画：石垣謙一

No.5
RGC-80
ジムキャノン
83年5月発売
1　144：400円

No.6
MS-06M
水中用ザク
83年6月発売
1　144：500円

No.7
MS-14C
ゲルググキャノン
83年6月発売
1　144：600円

No.8
RX-78-1
プロトタイプガンダム
83年6月発売
1　144．400円

No.9
MS-07H
グフ飛行試験型
83年7月発売
1／144．500円

画：石橋謙一

画：石橋謙一

画：石橋謙一

画：石橋謙一

No.10

FA-78-1

ガンダムフルアーマータイプ

83年7月発売

1　144：400円

No.11

MS-06E

ザク強行偵察型

83年8月発売

1　144：500円

No.12

MS-06V

ザクタンク

83年9月発売

1　144：600円

No.13

MS-14C

ゲルググキャノン

83年9月発売

1　60：3,000円

No.13 MS-1[illegible] GELGOOG CANNON

画：上田信

No.14 MS-06R ZAKU II
573
画：上田信

画　増尾隆幸

No.14
MS-06R
ザクⅡシン・マツナガ中尉機
83年10月発売
1　100：1,000円

No.16
YMS-09
局地戦闘型ドム
83年10月発売
1　144：600円

No.16
YMS-09
局地戦闘型ドム
83年10月発売
1　100：1,000円

No.17
MS-06K
ザクキャノン
83年10月発売
1　100：1,000円

画：石橋慎一

No.18 MS-09R ZAKU II

No.20 YMS-09 PROTOTYPE DOM

FA-78-1 GUNDAM FULLARMOR TYPE

画・石橋謙一

No.18
MS-06R
ザクII
黒い三連星使用機
83年10月発売
1　60：2,500円

No.19
FA-78-1
ガンダム
フルアーマータイプ
83年10月発売
1　60：2,200円

No.20
YMS-09
プロトタイプドム
83年11月発売
1　100：1,000円

No.21
MS-06R-2
ザクII
ジョニー・ライデン
少佐機
83年12月発売
1　60：2,500円

画：石橋謙一

画：上田信

No.22
RGM-79
ジムスナイパー カスタム
83年12月発売
1　144：400円

No.23
MS-06R
ザクII ジョニー・ライデン少佐機
84年2月発売
1　144：600円

No.24
MS-06E3
ザクフリッパー
84年3月発売
1　144：500円

No.25
MS-06F
ザクII マインレイヤー
84年3月発売
1　144：400円

No.25 MS-06F ZAKU MINE LAYER

画：石橋健一

No.28 FA-78-1 GUNDAM FULLARMOR TYPE

画：石垣純一

No.29
FA-78-1
ガンダム フルアーマータイプ
84年4月発売
1　100：1,000円

No.27
MSN-01
高速機動型ザク
84年5月発売
1　144：600円

No.28
RX-77-4
ガンキャノンII
84年5月発売
1　144：500円

No.29
MS-06Z
Zタイプザク
84年5月発売
1　144：600円

画：上田信　　画・石膳一

No.29
RX-78
パーフェクトガンダム
84年6月発売
1　144・600円

No.30
MSN-02
パーフェクトジオング
84年7月発売
1　250・500円

No.32
MS-14B
J.ライデン少佐用ゲルググ
84年9月発売
1　144・800円

No.33
MS-06R
J.ライデン少佐用ザクII
84年9月発売
1　100　1,200円

No.34
RX-78
パーフェクトガンダム
84年12月発売
1　100・1,400円

No.34 RX-78 MOBILE SUIT PERFECT GUNDAM

画：石垣純一

MSVは映像作品でないにも関わらず、雑誌などのメディア展開から ガンタム の一部としてファンに認知され、ガンプラフームも手伝いフラモデルという製品化まで漕ぎ着け、大成功を収めた そして、MSVを継くへくさらなる飛躍と市場の拡大を狙って企画されたのかMS-Xてある 結果的に短命な企画となったか、MSVを語る上では欠かせないピースといえるたろう。ここでは、そんな野心的なモヒルスーツたちにスホットをあてる

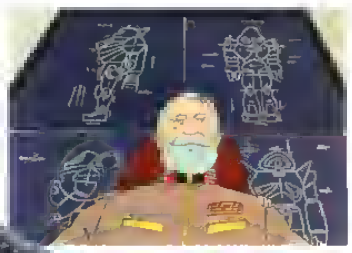
その後のMSV MS-Xとは!?

〈 MS-Xを知るためのキーワード 〉

その1 ➡ ベズン計画

MS-Xの舞台の中核となる設定で ノオン公国軍の極秘計画の一つであり 一年戦争後期 戦局打開のために開発されたという数々の試作兵器群を指す これを地球連邦軍のテン・ハサーク大佐率いる特殊工作部隊が調査のために派遣される、という内容で物語も進められる予定たった 雑誌等でも告知された)

また、現在においては計画の発祥地＆名称の由来となる「小惑星ベスン」についても、MS-Xか展開されている時点では明確に設定はされていなかった



スキウレ
分類｜宇宙用移動砲台
武装｜大型メガ粒子砲

ノオン公国軍か開発した移動式ビーム砲台で MA 05ヒクロなどのメカ粒子砲を運用し 砲台ユニトのコントロールはモヒルスーノか行う

その2 ➡ 機動戦士Zガンダム

84年末 ハーフェクトカンタム (1/100) の発売をもってMSVンリーズは終了となった その後 新たなシリースとして展開される予定のMS Xではあったものの 機動戦士カンタムの続編として 機動戦士Zカンタム の製作決定を受け、企画は終了となり、製品類も試作原型などが公開されなから見送られた しかし MS-Xという企画で起こされたテサインや設定類などの資産は、Zカンタム にも受け継かれ 一部のモヒルスーノは映像作品に登場し 別の形ではあるが日の目を見ている

その3 ➡ 新型メカの登場 スキウレ&バストライナー

MS-Xの企画的な特徴として モヒルスーノだけでなく 支援兵器などのメカ類も数多く設定されていた とりわけ直球的なテサインであるハストライナーやスキウレなどのメカは人気かあり 中でもガンキャリー コルヘ トフースター (連邦軍 やスクート ノオン軍 などのモヒルスーノ用のサフユニトなどは Zカンタム や 機動戦士カンタムZZ でホヒュラー化したサフ・フライト・ンステムの原型てあり 後世に与えた影響は少なくない

バストライナー
分類｜モビルスーツ用移動砲台
武装｜大型ビーム・ランチャー

連邦軍のFSWS計画て産生した中型突撃艇に戦艦クラスのビーム砲を搭載した支援兵器 フルアーマーカンタムによる運用か想定されていた

非常に短命の企画だが後世に多大な影響を与えた

映像作品てはないにも関わらず、異例の人ヒットを記録したMSV ンリース好評で数々のモデルかリースされた 84年にもなるとデサインや設定類は 出尽くしつあった そこて新たにつくられたのかMS Xてある

MSVヒト要スタッフの構成メンハーは変わらないか、ストーリー設定と脚本に「機動戦士カンタム」の脚本家、星山博之氏を迎えているのか特徴だ 登場メカなどは、「カンタム」のTVンリーズ製作時に富野喜幸 当時 監督が構想したメモ、いわゆる「トミノメモ」から多くを選定していた TVシリースか当初の予定通り全50話として放送されれば登場する予定だった、本編未登場の機体群 オフィシャルな要素も濃かった

イラスト面は大河原邦男氏と増尾隆幸氏が手掛け、情報発信などは、カンタム関連の主要メディアであった月刊誌「コンプティーク」(講談社 の84年4月号の連載告知を皮切りに、バンダイよる告知されていた情報誌「模型情報」などと連動する形で展開されていた 富野監督のMS Xに関するインタヒューも掲載されていた か、84年秋ころ、「カンタム」の続編 機動戦士Zカンタムの製作が決定し、それらが本格化したころてMS Xは終了となった 結果的な企画となり、製品化にも恵まれなかったか、後々のカンタムリールの形成に多大な影響をもたらしたことは疑いようのない事実といえる

MS-10

ペズン・ドワッジ

SPEC
頭頂高 ➡ 18.9m
本体重量 ➡ 61.4t
武装 ➡ ヒート サーベル 専用ジャイアント・バズ
8連装ロケット砲 ビーム・カノン 他

ODA'S COMMENTARY

「トミノメモ」でリック・ドム用に用意されていたドワッジ あるいはドワスが名称候補にありましたが 設定画から明らかにドム系の機体デザインだから というところだけです。ペズン計画はシオン公国の秘匿兵器が多数明らかになるという筋だったので、一体一体が異なる機種であるため、MSVのような型式番号よりも機種の名称で認識されるように仕立てています MSVでもドム系の流れがリック・ドムで止まっていたので その延長線上のポジションに収まった感じです 装備の換装で作戦状況別に対応するための 武器類がいくつか設定されています (小田)

VARIATION

重装甲、重火力で敵を蹂躙する局地戦用の突撃型

ドムの系譜といわれる高機動・高火力機

シオン公国軍のペズン計画で開発されたモビルスーツ 型式番号「MS-10」や外観形状からMS-09ドムの系譜を彷彿とさせることから、発展型の機体と考えられていた。また、本機の想定される運用環境がMS-09に似ただけであって、機体設計や機器類、システムなどはMS-09と別系統で開発されたともいわれる。機体背面に大型のスラスターを3基、さらに腰部や脚部の裾部分に中型スラスターを搭載し、MS-09より速力や突進力の向上が図られている。またスラスターの強化により重装甲化も進められ生存性も向上している。武装面はジャイアント・バスに加え、8連装大型ミサイル発射器の装備も可能。対艦戦闘などで高い戦闘力を発揮できたという。

このように局地戦用機であるMS-09ドムの発展後継機として、十分な性能を発揮したといえる本機だが、戦争終結により試作機が製造されるに止まり、正式量産はされずに終わった。戦後、試作機が地球連邦軍によって接収されているが、生産化には繋がらなかった 性能は決して低くないものの、時代的なニーズにそぐわない機体だったといえるだろう また機体名称の「ドワッジ」だが、開発時には単にドワノジのみだったが、MS-09の改良発展型MS-09Gドワノジの制式化により、本機の名称が改められた。

MS-11

アクト・ザク

SPEC

頭頂高	18.2m
本体重量	59.1t
武装	ヒート・ホーク
	ブルパップ・ガン、他

ODA'S COMMENTARY

これは名称　文字設定　デザイン画が企画スタートの時点ですでに用意されていました　ザクからケルクに至るシオニック社の系譜をMSVで構築していた立場からすると、ちょっと説明に悩む機体でした。最初からザクにマグネット・コーティング処理を施してある、という設定が用意されていました　なぜかその後の映像作品に登場もしている機体です　特定の武器類については、新しく設定されたものはありませんでした　ザクの系譜ではあるけどむしろ戦後のハイザックに繋がる流れのようにも思えます　（小田）

VARIATION

マグネット・コーティングを施した高機動型のザクタイプ

次世代主力機を目指しザクをアップデート

MS-06ザクⅡの改良発展型といえるモビルスーツ（MS）。目まぐるしい発展を続けるMS開発の中で、旧式化しつつあったMS-06の性能面の向上を目指し、ペズン計画で開発された高機動タイプ。特に本機は、運動性能の向上のため、機体の関節各部にマグネット・コーティングを施しているのが特徴といえる。

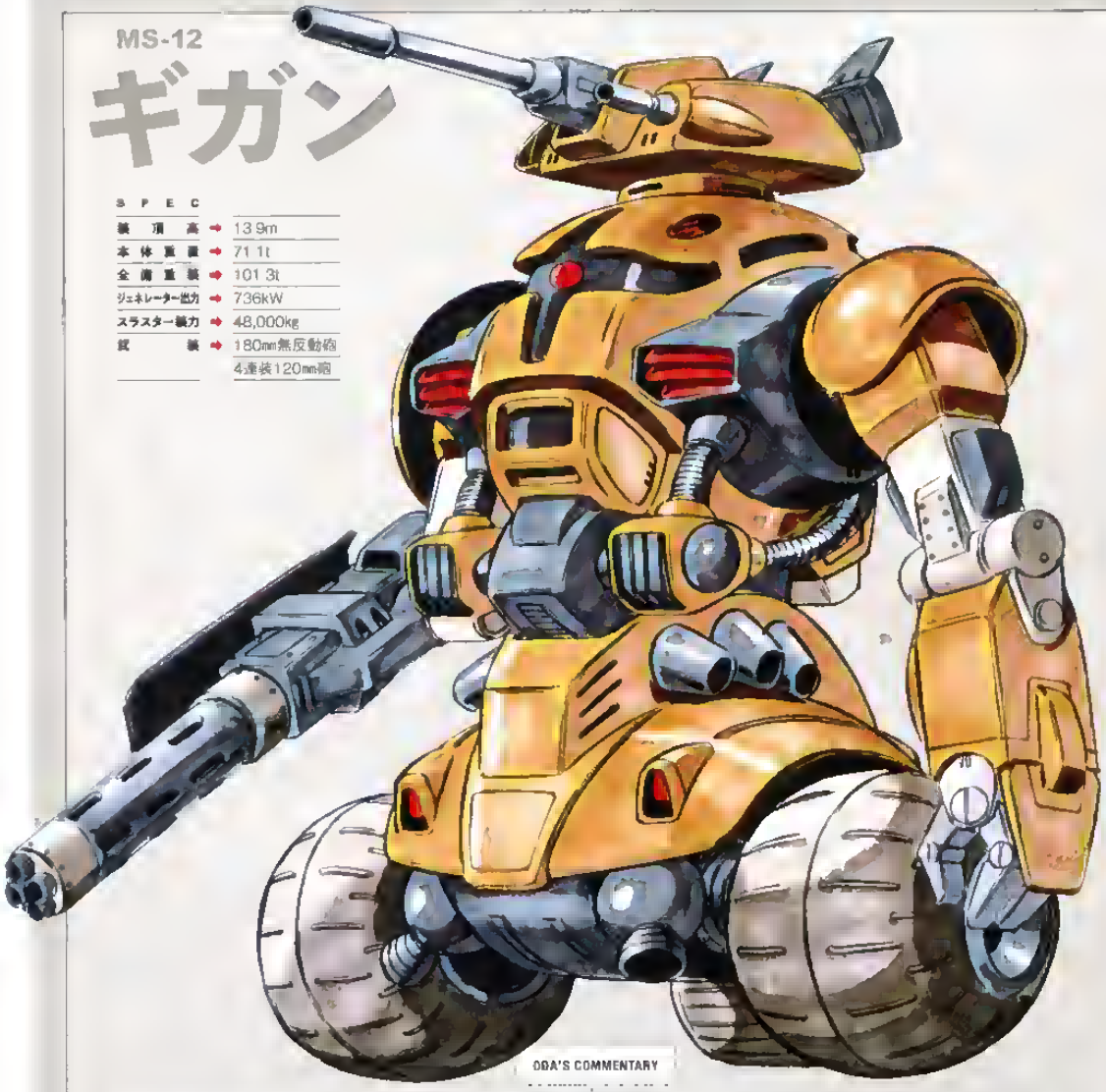
従来型のジオン公国軍系MSならば、流体パルス・システムを利用した駆動方式が主流である。それを連邦軍系MSで主に使われているフィールド・モーターの搭載は異例といえるだろう。一見、敵軍の技術応用に見えるが、裏を返せばフィールド・モーターという技術が宇宙世紀でも、とりわけポピュラーなものの証だろう。これにより機体性能は大幅に向上し、機動性などはMS-14ゲルググに匹敵する性能を発揮したという。

試作機によるテストは良好だった本機だが、一年戦争中に実戦配備されることはなかった。本機の型式番号「MS-11」は、本来ならばゲルググに付与される予定だったが、量産化の遅延から見送られ、最終的にゲルググには「MS-14」が割り振られたという。試作段階においてはMS-14ゲルググよりも本機が早く完成に漕ぎ着けたということだろう。もっとも、型式番号の割り振り方法は諸説あるので、この限りではないが。

MS-12

ギガン

SPEC	
頭頂高	13.9m
本体重量	71.1t
全備重量	101.3t
ジェネレーター出力	736kW
スラスター総力	48,000kg
武装	180mm無反動砲 4連装120mm砲



3輪式のタイヤを備えた要塞拠点防衛用の移動砲台

移動は2足歩行ではなく3輪式のタイヤで踏破する

数あるペズン計画機の中でも異質といえる機体。3輪の走行ユニットを採用した遠距離支援機でありMSというよりも、AFV（装甲戦闘車両）や移動砲台に性格が近い。頭部に180ミリ無反動砲、右腕部に4連装120ミリ砲を備え、拠点防衛を主目的に開発された。左腕部のマニピュレーターもクロータイプで通常のMSとは異なる（一部仕様や武装の異なる機体も確認されている）。コクピットも複座式でパイロットと砲手の2名が搭乗する。MS開発では連邦軍に先行するジオン公国軍だが、本機の仕様は一種の先祖返りともいえ、旧式機のRX-75ガンタンクに通ずる点も散見され興味深い。また3輪式走行ユニット部分を宇宙空間移動用の大型スラスターに換装し、宇宙戦用モビルアーマーとして運用する改修案もあった。それなりに試験評価は良好だったらしく生産も決定した。

しかし、一年戦争も末期になるとジオン公国軍による戦線維持能力は低下し、戦況は極めて不利となっていた。そのような場合、拠点防衛といった用途が限定される本機よりも、戦力拡充のため、最新鋭機であるMS-14ゲルググや、他の機体の生産配備が優先されるのは自明の理といえた。結果的に本機の生産数は少数にとどまり終戦を迎えた。加えて実戦投入などの記録については不明である。

ODA'S COMMENTARY

「ガンダム」全52話構成のトミノメモにある拠点防衛用の大型移動砲座型モヒルスーツ。設定をそのまま当てはめているので用途がはっきりしている存在です。下半身デザインは車輌型と歩行ユニット型の2種類が用意されましたが、やはり見るからに試作モヒルアーマー的要素か濃い機体。大河原さんの導き出した、移動砲台のフォルムはデザイン的に遠いところでどこかゾノクに似ている気もします。モノアイの正面ファインダーフレームは増尾隆幸さんのカラー画稿では、少し凶悪な面構えになるようデザインアレンンしてもらいました。（小田）

MS-13

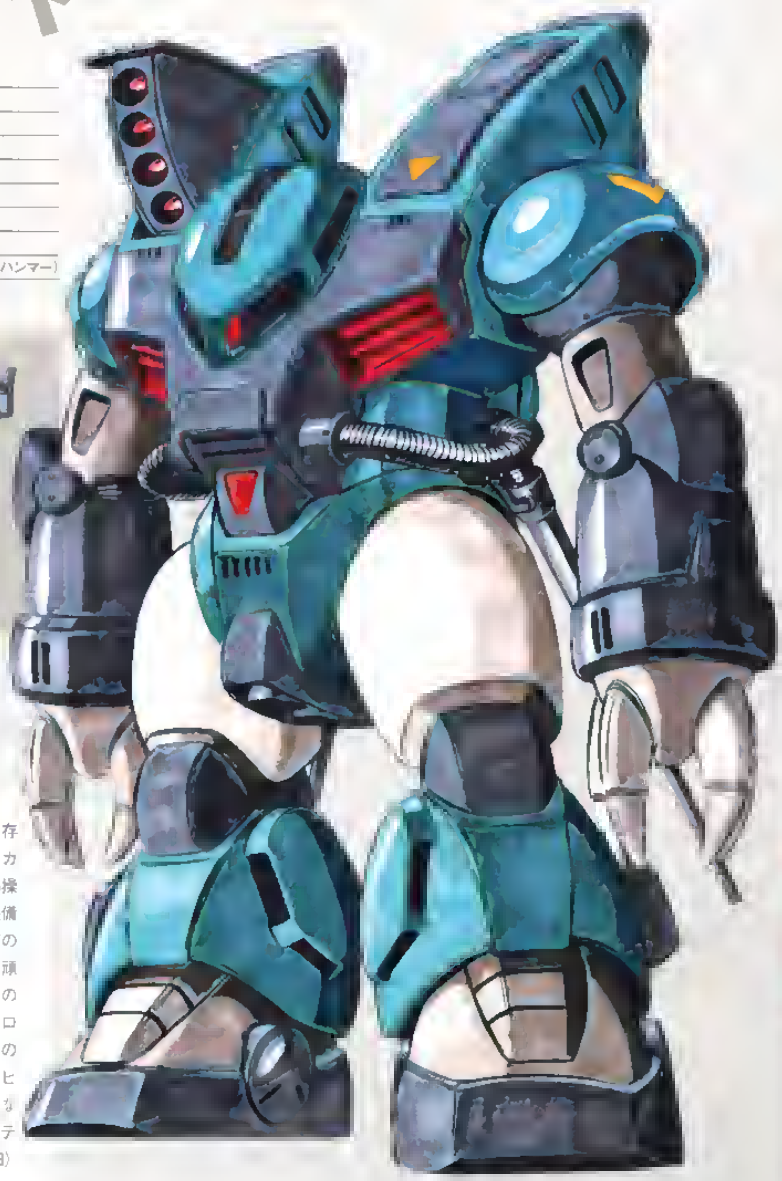
ガッシャ

リック・ドムとの運用を想定していたMAのような突撃型MS

SPEC	
頭頂高	15.1m
本体重量	89.7t
全備重量	116.5t
ジェネレーター出力	1,076kW
スラスター推力	42,900kg
武装	アイアン・ネイル×2 4連装ミサイル・ポッド ハンマー・ガン〔山越えハンマー〕

謎の武器、山越えハンマーとは？

月面などの低重力下では曲射攻撃が可能といわれている撃ち出し式の打突兵器。しかし、兵器としての効果範囲や命中精度を示すデータなどが存在しないため、その実態は謎に包まれている



ODA'S COMMENTARY

やはりトミノメモに名前が存在するモビルスーツですか　カンダムを苦境に立たせる遠隔操作兵器「山越えハンマー」を装備していることで人気・知名度の高い存在、デサイン画からは頑丈さ堅牢さがハノキリ判るものとなっていますか　ハントクローか水陸両用型を思わせるものになっているので　かなりモビルアーマー的なヒシュアルとなりました　ハンマー射出機のデサイン画も作られました　小田〉

水陸両用機に見えるが突撃型の宇宙戦用機

ヘズン計画によって開発された突撃型モビルスーツ（MS）。外観のフォルムはMSM-07ズゴックなどの水陸両用機を彷彿とさせるが、宇宙戦闘においてMS-09Rリック・ドムとの連携を想定して開発された強襲攻撃機である。

前腕部のアイアン・ネイルは、クロータイプのマニピュレーターで、別名コンハット・ネイルとも呼ばれ、爪の先端部が可動式で武器などの把持が可能となっている。通常の一体型のアイアン・ネイルと比べて本機のそれは強度面で不安はあるものの、携行式の武器が扱えるという利点は大きいだろう。機体後部から突き出ている2本のアンテナは対地センサーである。コクピットはMS-12ギガンと同じく複座式を採用しており通常2名で操縦する（役割分担は不明）。

主な武装は両肩の4連装ミサイルポットとハンマー・ガン。このハンマー・ガンは月面で使用すると山を飛び越えるほどの飛距離が出る曲射攻撃が可能という例えから「山越えハンマー」とも呼ばれていた。連邦軍のRX-78ガンダムが扱うガンダム・ハンマーのような質量兵器と思われるが、効果のほどは定かではない。軍による評価も「MSM-07の持つ高い戦闘力を宇宙用MSに持たせただけの機体」と、あまり高くはなく、試作機が製作されたのみで終戦を迎えている

MS-17

ガルバルディ(α)

VARIATION

SPEC

頭頂高	18.4m
本体重量	41.7t
武装	ビーム・サーベル ビーム・ライフル

ギャンの後継として開発された格闘戦を主眼にするMS

外見はゲルググに似るがコンセプトはギャン譲り

ジオン公国軍における次期主力MSの競合試作でYMS-15ギャンは敗れたが、その格闘戦能力の高さは注目されていた。ペズン計画でもそうした格闘戦能力を主眼にした機体の開発が進められていた。それがMS-17ガルバルディである。

一年戦争の中期、マ・クベ大佐の主導による統合整備計画を受け、MS-14ゲルググとの部品共有化なども図られた機体仕様だ（外観がMS-14に似ているのは、そのためともいわれている）。

本機には陸戦型のA型と、宇宙戦型のB型という2つのモデルがあり、A型では大気圏内における飛行を実現すべく、腕部にMS-14のような熱核ジェット・エンジンが搭載されている。しかし、性能が所定のレベルに達しなかったため計画は頓挫した。一方、B型は高い運動性能を示し、ビーム兵器の運用も可能な高性能機になった。だが、操縦性においてはパイロットへの負担が大きく、性能を抑えて運用する必要があったという。

また本機の呼称に「α」を用いるケースもあるが、これは一年戦争終結後、連邦軍によって接収されたMS-17のB型が改修を受け、RMS-117ガルバルディβとして制式採用されたためだという。しかし、一説によるとMS-17のA型、B型すべてを「α」とする例もあり、これらの名称については不明な点も多い

ODA'S COMMENTARY

元々、試作機というよりは本編でゲルググの流れを汲む次世代主力機として設定されていた機体　終盤ではシャアが乗り継ぐ機体のひとつとして知られており　描かれなかった月面基地グラナダ攻防戦では主力機として登場するはずでした　なので　MS-Xのモビルスーツ群の中でもかなり血筋がしっかりしている機体です。キマイラ隊の装備変換でもこの文字設定を取り入れる予定がありました　本編後半　富野監督のラフによって進められたモビルスーツデザインの流れを表現しようとしましたか発注側で明確なラフが用意できず　ケルククの次世代機としてキャンの格闘戦性能を取り入れた　より強力なものという文字設定のみで大河原さんにお願いしました　ガルバルディβから逆算すると永野護さんが近年創作したMS-23は原作のガルバルディのイメージに近いかもしれません　（小田）

FA-78-2

ヘビーガンダム

SPEC

頭頂高	➡	18.4m
本体重量	➡	52.2t
武装	➡	ビーム・サーベル
		肩部ビーム・キャノン
		フレーム・ランチャー
		専用ビーム・ライフル
		専用バズーカ

VARIATION

ODA'S COMMENTARY

当初は「ストロンクガンダム」と呼んでいたようにも記憶しています 要するにプラモデルで人気の出たフルアーマーカンダムの派生型で、フルアーマーと違って 増加装甲ではなく基本設計の段階て本体か重装甲になっている機体です」重装型ガンダムなのでヘビーカンダム。MSVの時に連邦軍の特殊兵器として立案されたFSWS云々のニュアンスとは若干立ち位置の色合いが異なります。ノオン掃討作戦のために編成された部隊の主力装備として設定されました。それを率いるのかテン・バザーク大佐。人物名が出てくるのはこの機体だけです （小田）

連邦軍のFSWS計画の第2試案フルアーマーガンダムの代替案!?

フルアーマーガンダムの問題点解消を目指す

一年戦争末期、連邦軍のFSWSよって開発されたFA-78-1フルアーマーガンダムの第2試案（もしくは代替案）がFA-78-2ヘビーガンダムである。FA-78-1については、詳細な記録がなく不明な点も多いが、機体重量の増加と機動性の低さは問題視されていた。

そのため本機では、重装甲、重武装化されたRX-78を新たに開発しようと試みたのである。それによりAパーツ（上半身）および脚部などが新規設計となっている。本体に肩部ビーム・キャノンとビーム・サーベルを備え、武装も専用ビーム・ライフル、バズーカに加え、複合兵装のフレーム・ランチャーを装備する。これはガトリング砲と4連装ミサイルランチャーが一体化した重火器で前腕部とランチャー本体を一体化する形で装着する。こうした改修により機体重量などはFA-78-1よりも軽量化されたが、機動性の低下は懸念されていた。

この点はハービック社製の新型推進器の搭載で解消される予定だったが、推進器の開発遅延と、RX-78による実際の戦闘データから、必要性そのものが疑問視されてもいた。そのため、RX-78のGパーツのような支援兵器・ガンキャリーも開発されているが、結果として、すべての開発計画は宇宙世紀0079年11月末に中止されることになったという。

Reading material & Interview

読み物／インタビュー

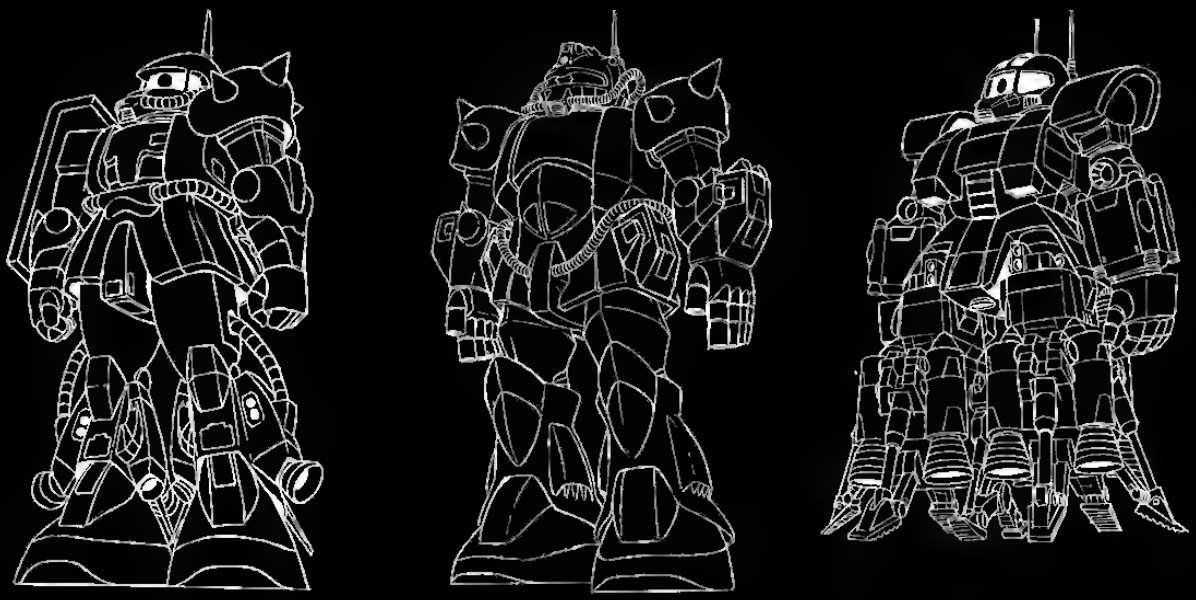
MSV

Interview

小田雅弘
ストリームベース

川口克己
BANDAI SPIRITS ホビー事業部

松本　悟
元バンダイ ホビー事業部開発部



コレが元ネタ!?

MSV
THE ORIGIN

MSVの起源

機動戦士ガンダム」の世界観である宇宙世紀の歴史は、一種のフェイクヒストリーであるが、その中でのMSVは映像化された正史に対する野史、叛史に類すべきものだろう。しかし、それゆえにMSVには正史にはない魅力がある。ここからは、本書でも言及されている小田氏のインタビューや、過去の発言を参考にしてMSVのイメージソースを探ってみよう。

文：小高正稔

01 日独決戦戦闘機隊の「キメラ」としての「キマイラ」

ジオン公国軍のエース部隊「キマイラ」はMSVの中核をなす設定である。類勢覆うべくもない戦場に一閃の光芒を放って消えた精鋭部隊という設定はロマンを掻き立てるが、キマイラにはモデルとなった部隊が２つある。それはドイツ空軍の第44戦闘団（JV44）と日本海軍の第343航空隊（343空）である。

JV44は自らも104機撃墜のエースパイロットのアドルフ・ガランド中将を指揮官に1945年１月に編成された戦闘機隊だ。JV44はジェット戦闘機Me262を優先的に供給され、パイロットも多くが騎士十字章授章のエースという点で、明らかにキマイラのイメージソースである。またJV44の誕生はガランドとゲーリング元帥との確執を理由とするが、こうした政治的な背景もキマイラのイメージに影響しているのだろう。

一方、日本海軍の343空も太平洋戦争の後半に編成された戦闘機隊である。指揮官の原田実大佐は戦闘機パイロット出身であり　新鋭戦闘機「紫電改」の集中運用と熟練パイロットの多くを集めたという点で類似している。

キマイラのMSパイロットの中にはジェラルド・サカイの名が見えるが　これは343空に所属していた坂井三郎からの命名だろう。キマイラは文字通り日独の戦闘機部隊の「キマイラ」なのだ。

⬇エリート部隊であるJV44は、世界初のジェット戦闘機であるMe262装備が前提の部隊であり、その装備数は20機程度でしかなかった。

⬇日本海軍の新鋭戦闘機「紫電改」で編成された343空　写真は3つある飛行隊のうちの一つの指揮官であった菅野直大尉の機体。

02 幻の高性能機 Bf 109-K14とMS-06R-2

戦争は巨大な技術革新の場であるために、従来の機体と隔絶した能力をもつ新型機がある日突然に戦場に登場することがある。だがその一方で、兵器生産の現実から既存の生産ラインを利用できる既存機の改良も進められる。限界まで改良された旧式兵器にある種の魅力があることは否定できない。

1935（昭和10）年に初飛行したドイツ空軍のメッサーシュミットBf109は、日本海軍でいえば零戦より前の九六式艦上戦闘機と同世代の機体である。そのため第二次大戦中期に登場したF型で空力的設計は完成しており、発展の余地は少なくなっていた。K14はG/K型系列の最終的な発展型として計画された機体で新型過給器つきのDB605Lエンジンを搭載し、高度9000mで時速740kmを発揮可能とされた、最終的な発展型である。

K14の実機は完成しなかったとも２機が完成したとも言われるが、この機体イメージは高機動型ザクⅡ、特にMS-06R-2のイメージに重なる。一年戦争開戦前からのザクⅡのイメージを残す上半身に対して、大出力が一目でわかる背面のデザイン、歩行脚を事実上の推進器とした下半身のアンバランスさは、大出力エンジンを搭載し四翅プロペラを装備した異形のBf109のMSV的な解釈といえるだろう。

⬆メッサーシュミットBf109K型。K14は写真などは残ってなくBf109唯一の4枚プロペラ機であったという。そういった謎かいところに魅力を感じるのがミリタリー・マニアたちなのだ。

03 ザクキャノンの型式= Kは、大砲の「K」

ザクキャノンの型式番号MS-06Kの「K」はドイツ語で大砲を意味する「Kanone」の意味合いをもって、恣意的に割り当てられたものである。「Kanone」というとドイツのJu87（スツーカの愛称で知られる急降下爆撃機）の有名なバリエーション「カノーネンフォーゲル（大砲鳥）」がイメージされ、実際にバックパックに巨大な砲をマウントしたMS-06Kは　いかにも37㎜砲のポッドを両翼下に装備したカノーネンフォーゲル的である。だがカノーネンフォーゲルの型式は、実際にはG型でありK型ではない。ドイツ空軍はJu87に順番に型式番号を振っていったから、間に多少の計画型があっても、D型の後、K型には飛ばない。

だが、現実の歴史を紐解くと、恣意的に形式が当てはめられた例もある。旧日本海軍の大和型戦艦の計画案は「A140」という基本計画番号があてられていたが　そのバリエーションの「A140G」の`G"は「GUNREtBU＝軍令部案」という意味があったという説もある。MS-06Kという型式番号は、MSVの「懐の広さ」とてもいうべき遊びといえるだろう。

⬆ユンカースJu87G型　両翼から伸びた大型機関砲が　ロマンを掻き立てる。

04 パイロット・エンジニアとしての エリオット・レム

エリオット・レムは、MS-02の開発という初期段階からモビルスーツ開発に携わったジオニック社の技術者である。軍装のイラストが著名で印象的だが、これは軍属（佐官待遇）としての姿。エリオット・レムの風貌は明らかにアドルフ・ガランドを下敷きにしはているが、その経歴はパイロット、エンジニア的なものであり、むしろフォッケウルフ社でFw190やTa152を開発した名設計者クルト・タンクに近いものがある。

クルト・タンクはフォッケウルフ社のエンジニアであったが、機体設計だけではなく自ら操縦桿を握るパイロットでもありTa152試作機を操縦中に米軍のP-51と遭遇、これを振り切って逃走に成功したというエピソードも持っている人物なのだ。もっとも最後までザク系統の改良にこだわったエリオット・レムとは異なり、クルト・タンクはFw190系列の発展だけではなく、まったく新規のジェット戦闘機の開発にも積極的であり、後年のジェット戦闘機であるMiG15の開発にも大きな影響を与えているTa183の設計も行っている。

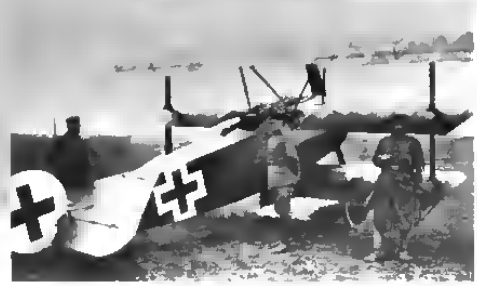
⬆ドイツ空軍の名パイロットで指揮官でもあるアドルフ・ガラント。『MSV』のエリオット・レムのイラストはほぼこのまま（笑）。

05 ジョニー・ライデンと真紅の戦闘機

MSVの中でもシン・マツナガと並び、別格の認知度を誇るエースパイロットのジョニー・ライデンの人気は、その真紅に塗装されたMS-06R-2高機動型ザクⅡ（R-2型）やMS-14B高機動型ゲルググの持つ、強いキャラクター性にある。乗機を赤く塗装したパイロットとしては第一次世界大戦の撃墜王であり、愛機のフォッカーDr1を真っ赤に塗装していたことから「レッドバロン」と通称されたマンフレート・フォン・リヒトホーフェンがもっとも有名だろう。

もっとも乗機を赤く塗装したエースパイロットはリヒトホーフェンだけではなく、第二次世界大戦におけるロケット戦闘機であるメッサーシュミットMe163のヴォルフガング・シュペーテなども知られる。もっともシュペーテの場合は本人の希望ではなく、リヒトホーフェンにちなみ整備員が勝手に塗装したもので、シュペーテは元の塗装に戻すように命じたという。赤く塗られたシュペーテのMe163は圧倒的な速力と上昇力の反面、動力飛行時間は数分にすぎないロケット戦闘機であり、フォッカーDr1もピーキーな機体ではあったが、R-2型の印象としては、シュペーテのMe163の方が近いかもしれない。

➡⬇マンフレート・フォン・リヒトホーフェンと愛機であるフォッカーDr1。複葉機ではなく3枚主翼が特徴　赤く塗られていたが　派手な塗装は第一次世界大戦時の戦闘機にはよくあることだった。



06 次期主力機コンペティション

軍用兵器の調達に関して、しばしば競争試作や複数の候補機などのコンペから選定されるケースがある。だが巨額の受注が見込めるコンペには、常に政治的な思惑も絡み純粋な機体性能だけで決着がつかないことも多い。ジオン公国ではザクの後継機=ゲルググの開発が遅れ、暫定後継機の座をMS-06R-2高機動型ザクII（R-2型）とMS-09ドムの空間戦闘型、MS-09Rリック・ドムが争い、リック・ドムに軍配が上がったとされる。小田氏によると、この競争試作は、航空自衛隊のF-86後継機選定がイメージという。この選定ではノースアメリカン社のF-100とロッキード社のF-104が本命視され（他にF-5、F-102も候補だったが有力視されていない）、当初F-100が優勢であった。しかし「戦闘爆撃機」という種別が政治的な理由から採用は退けられ、次期主力戦闘機はグラマン社のF-11F-1Fが有力視されるなどした後　原田実航空幕僚長らの訪米によってF-104に決定された。R-2型とリック・ドムのコンペでも幾度かの揺り戻しがあり、この2機以外にもいくつもの機体が暫定主力機候補に検討された、という想像も楽しいだろう。

⬇上がF-104スターファイターで下がF-11F-1Fスーパータイガー　F-11F-1FはF-11の改良機であり、制式機ではなかった

07 偶然と必然の「砂漠戦仕様」

MSVでは汎用機から発展した局地戦仕様の機体が多数デザインされたが、ドムの「トロピカル・テストタイプ」に代表される砂漠戦用機は、その代表である。ドム試作機を改修した砂漠戦用機であるトロピカル・テストタイプはサンドカラー（あるいはサンドカラーとオリーブドラブの2色迷彩）というミリタリー色の強いカラーリングによって、独特の存在感と説得力を持っている。もっとも　このデザインと設定は半ば偶然の産物らしい。

小田氏によれば、ドムの特徴である脚部のホバー機構がデザイン的に弱いバリエーションデザインをプロトタイプやプロトタイプ改修の砂漠戦用機として設定した、という経緯があるらしい。こうした理由から、オリジナルよりも技術的に洗練されていない印象を受ける砂漠戦仕様だが、それが逆説的にリアリティを生んでいる。

それは露出した頭部の動力パイプなどが、アフリカ戦線仕様のBf109の重要なアイコンであるサンドフィルターなどをイメージさせるということだ。想定しない戦線の拡大に伴って急遽追加された現実の兵器の姿と、戦略の破綻によって地上戦を余儀なくされたジオン公国軍の汎用機から局地戦機への転換は不思議に符合する。

砂漠戦用機のデザインには、偶然と必然が混在しており、それが魅力ともなっているのだ。

⬇トイノのメッサーシュミットBf109F型のトロピカル仕様　外見はエンジン横のフィルター（×2個）しか変わらないが　そういった形状の違いは、もちろんロマンを掻き立てる存在だ。

現実世界にイメージソースを求めたMSVのリアリズム

『機動戦士ガンダム』における「宇宙世紀」は、ある種のフェイクヒストリーII偽史であるが、TVシリーズで描かれた物語を正史とすれば、MSVはある種の叛史ともいうべき存在である。それは決して正史になり得ないがために正史以上に強固なリアリズムが要求される企画ではあった

もともと『ガンダム』は、スペースコロニーの描写に見られるように、当時の水準としてかなりハードなSF観で作中世界が構築された作品である。ジオン公国軍のモビルスーツ開発史が、旧日本海軍戦闘機の発達史や、ドイツ戦車の発達史のようにも見えるのは、TVシリーズの時点で、ある程度まで現実のそれに即した技術発展体系がイメージされていたことを示唆している。MSVとは、こうした世界観を補完するように構築された虚構の兵器体系であり、その設定やデザインには史実における兵器開発やエースパイロット像を、時に大胆に、時にさりげなく援用して、独特のリアリズムを実現している。

もっともモビルスーツやキャラクターにどのようなイメージを投影するかは人によって差があったらしい。例えばジョニー・ライデン機のイメージを「レッドバロン」

08 ゲルググとMe262の不思議な符合

一年戦争末期に登場したMS-14Aゲルググは、ジオン公国軍として初めて実用的携行ビーム兵器の運用を可能とした機体で、カタログ性能ではRX-78ガンダムを凌駕するともいわれる高性能機であり、そのイメージは、戦争末期に枢軸国陣営に出現した新型戦闘機などのイメージに重なる。有り体にいえばゲルググのイメージソースはMe262なのだろう。画期的な高性能機であったゲルググの系譜だが、一年戦争後の世界で花開いたようには見えない。リゲルグを除けば直系の発展機らしきものは見られず、むしろMS-Xのガルバルディ系列機の方が成功を収めているように見える。

こういった流れも、Me262と相似する。実戦投入された画期的高性能機であったMe262より、終戦時に完成していなかったTa153やMe P1101といった試作機　計画機が戦後のジェット戦闘機大きな影響を与えることになったからだ。

これはおそらく偶然であろうが、こうした符合にこそフェイクヒストリーとしてのMSVの面白さが秘められている。

⬇先に挙げたJV44でも使用していたMe262。ロケットモーター追加型や　大口径機首搭載型など、そのバリエーションはMSVなみ

09 Xシリーズとサイコミュ試験型ザク

MSVにおけるジオン公国軍の「ヒジョノプ計画」の一環として設計されたサイコミュ試験型ザクの特異なデザインは、ジオングに至るための要素技術実験のためだ。サイコミュ試験型ザクはあくまでも試験機で、アメリカのXシリーズに近い存在なのだろう。たとえばリフティングボディ検討機のX-24はX-24A、X-24Bなどの技術がスペースシャトルなどに活かされたのと同様の、技術的アプローチがそこにはあったのだ。

⬇リフティングボディの実験機であるX-24A。リフティングボディといえばZカンダムを思い浮かべる人も多いことだろう。

10 ジオングの「足」問題

ジオングの「足」は難問だ。作中では「飾り」と一蹴される一方で、「パーフェクトジオング」のデザインも存在し、さらに両手以外に両足も無線サイコミュとしてオールレンジ攻撃可能な機体として構想されていた、という解説もあるため、真の姿は判然としない。

だがこうした情報の混乱というのは実際の兵器でもよくあることで、このような事態に遭遇したミリタリーライターは「今後の史料発掘を待ちたい」と重くことになるのだ。

ことリヒトホーフェンに置くか否かについては、小田氏とイラストを手掛けた増尾隆幸氏との間でも解釈に違いがあり、小田氏はライデン機のイメージをリヒトホーフェン機そのものではなく、それを模すように塗装されたシュペーテのMe163をイメージしていたようだ。リヒトホーフェン機ではあまりにも「そのまま」という、いかにもミリタリーマニア的な気恥ずかしさが、そこにはあったのだろう。ジョニー・ライデンその人についても、川口克己氏はヘルマン・グラーフをイメージしていた（彼の乗機も機首を赤く塗装されていた）ようで、「赤い機体に乗ったエースパイロット」を当時のミリタリー、あるいは模型マニアがどのように捉えていたのか、興味深くはある。

MSVのイメージ的な源流の多くは第二次世界大戦を中心にした実在の兵器やパイロットにあった。MSVが展開されていた1980年代当時に入手できた資料は、現在と比べて限定されたものであったが、MSVでは、いくつかのモチーフを組み合わせることで、単純な「史実のなぞり」ではないオリジナリティを構築している。MSVの起源としての兵器やパイロットをあらためて考えることは、トリビアルな興味に止まらず、MSVという文化そのものを掘り下げてゆく上で価値あることだろう。

MSV
BEST SCENE 7

TVに登場した

MSV映像記録傑作選

映像作品が主である「ガンタム」のアニメ本編とは切り離され、あくまでも設定上および模型上といったメディアて繰り広げられていたMSVの機体たち。しかし後年の「ガンダム」作品では、時として突然画面に登場する機会が訪れることになった。ここではそんな映像作品におけるMSV（およびMS-X）の機体の戦いぶりを見てみよう。

SCENE 1 まさかの強行偵察型!? 百式との不運な遭遇

アニメーションに登場したMSVの栄えあるトップバッターは、「06R」でも「ゲルググキャノン」でもなく、ナンとザク強行偵察型！　月面のアンマンに鎮座しているアーガマは、ジャブロー攻略のため　グラナダ艦隊と合流すべく準備を進めていたが、そこでティターンズのアレキサンドリアの攻撃を受ける。言ってみれば奇襲なわけで、ザク強行偵察型の出番なのも、ある意味自然かもしれない。この機体はなじみのブルー系ではなく、月面に合わせて（？）のサンドカラー系の塗装だった。なお、機体中のレンズが反射したのか（画面では遠景でピカピカ光っていた）クワトロ大尉の百式に見つかり、ほとんど何もできずにやられてしまった。

MS-06E
ザク強行偵察型

機動戦士Zガンダム ➡ 第10話「再会」より

SCENE 2 ジャブロー基地はMSVサナトリウムと化していた!?

多数のMSVが登場する『Zガンダム』第12話。エゥーゴの部隊がジャブロー基地に降下、制圧にかかるが、そこで連邦軍の防衛戦力としてMSVがゾロゾロと登場した（詳しくはP91の表を参照）。とはいえ、設定上は完全な旧式機だから一種のファンサービスとして登場しただけで、ほとんど活躍しない。あのジム・スナイパーカスタムですら、百式に空中から撃たれて森に逃げ込む始末である。かつてのエース専用機も今は昔。そんな中でも、グフ飛行試験型は水上をホバーで移動し、不意打ちでジムⅡを２機倒している（クワトロ大尉の百式は一人で回避し無傷）。他の多くのMSVが何もできなかった中で大金星といえるかもしれない。

機動戦士Zガンダム ➡ 第12話「ジャブローの風」より

SCENE 3 水中用MSの面目躍如! 海中に潜む影が迫る!

ザク・マリンタイプから名前が変わったマリン・ハイザックが登場するのが第18話。交渉材料として人質になってしまうミライ親子。アムロが体を張ってミライたちを逃し、ミライはボートを走らせようとするが海上で突然停止。そこには海中からボートを捕らえたザク・マリンタイプの姿が！　水中用MS独特の不気味さが表現されたシーンだ。だが、その後は救援に現れたカミーユのガンダムMk-Ⅱと戦闘になり、４機のマリン・ハイザックは全滅。水中でバズーカを避けて多少は頑張ったが、やはり勝つのは難しい。浅深度で戦っていたため性能を活かしづらかった？

MS-06M
マリン・ハイザック

機動戦士Zガンダム ➡ 第18話「とらわれたミライ」より

SCENE 4 コロニーで繰り広げられる水陸両用機バトル!

「ガンダムZZ」第40話では、富豪スタンバ・ハロイが私物と化していた中立コロニー・タイカーバウム内でアッグガイが登場。スタンバ・ハロイはモビルスーツをコレクションしており、アッグガイの他にもズゴックやゴッグといった機体もある。ただし、これらの中身はそれなりに新鋭になっており、ものによってはなかなかの性能のようだ。アッグガイも両腕のヒート・ロッドでジュドーのズゴックを絡め取るという活躍を見せたが、やはり「あっ」という間にやられてしまった。さらにその後　アッガイにハマーン様が乗るため、アッグガイの登場インパクトが薄れてしまったのは残念。

機動戦士ガンダムZZ ➡ 第40話「タイガーバウムの夢」より

SCENE 5 ジュアッグの真の戦闘力が発揮された戦い

フル・フロンタル率いる「袖付き」の動きに呼応し、地球で活性化する旧ジオン残党軍。ダカール市街を襲撃したそのモビルスーツ部隊の中にはジュアッグの姿があった。守護隊のジムⅡ&Ⅲコンビにロケット弾を浴びせ、増援のネモのビーム・サーベルを砲身で受けて殴り倒す。見た目からは計り知れないジュアッグの戦闘力がいかんなく発揮されたバトルだった。

最後はヒーム・ジャベリンで倒されてしまったが、これだけ開発年代の違う相手(しかも複数)に善戦したのは、とても立派!

重装甲、重火力という設定が見事に活かされたシーンであった。

機動戦士ガンダムUC ➡ ep 4「重力の井戸の底で」より

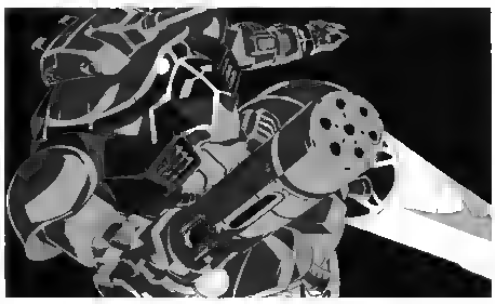
SCENE 6 スーパーMSV大行進! トリントン基地は大騒ぎ!

オールドファンにむけた一種のサービス映像ともいえるのが、「機動戦士カンダムUC」のep 4だ。地球全土の旧ジオン残党軍が「袖付き」のために陽動作戦に打って出るのだが、残党軍だけにお約束の旧式機が、わんさか登場する。各機少しずつ見せ場はあるが、中でもゾゴックは印象深い。襲撃先のトリントン基地ではヒート・サーベルとシュツルム・ファウストでジムⅡを2機しとめ、さらに対バイアラン・カスタム戦では転がりながら受け身をとって、ブーメラン・ミサイルを発射!

設定的にも画的にも最新鋭機のセー・ズールとコンビで描かれると、あらためて試作メカの面々が異形な機体であることがわかるシーンでもあった。

機動戦士ガンダムUC ➡ ep 4「重力の井戸の底で」より

SCENE 7 ペズン計画の幻の機体まで!『袖付き』の執念恐るべし!



「使えるものは何でも使う」を信条に、新旧問わず、なんでも自軍の戦力として活用する「袖付き」は、なんとペズン計画のキガンまでも戦線に投入している。しかも事実上の最終決戦といえる戦いに、である(決戦だからこそ総力を出し切ろうとしたのかもしれないが)。とはいえ、「袖付き」の常として、機体にはかなりのアップデートが行われているようで　右手が大型バルカンになり、脚部も3輪式タイヤではなくプロペラントタンク&ブースターだ。これは通ならば膝を叩くだろうギガンの改修案の姿であり、ひねりの効いた演出にヒックリだ。作中ではガトリング砲を発砲するだけで特に何かを撃破したといった描写はないものの、登場するだけでありがたい。

機動戦士ガンダムUC ➡ ep 7「虹の彼方に」より

MSV TV 雑学1 TVには出たけれど製品化されなかったMSV

MSVファンにとって　機動戦士Zガンダム」の第12話「ジャブローの風」は忘れられざるエピソードであろう。何しろ数多くのMSVがチョイ役とはいえ　数多く登場したのだから。

しかし、そんなMSVの中でも、カンキャノン重装型とカンキャノンⅡの関係性はちょっと面白い。どちらもガンキャノンの派生型だが、『Z』第12話で登場したのはガンキャノン重装型の方だ。この機体はMSVシリーズの連邦軍機でありながら、じつはプラモデルになっていない機体だ。

一方、ガンキャノン重装型の後継発展型にあたるガンキャノンⅡは、プラモデルにはなっているものの　件の第12話はおろか、映像作品には登場していない。どうせならばジャブロー基地に出てくる機体を入れ替えて、ガンキャノンⅡにしてあげば、製品売上にも少しは貢献できたのでは（まあ意外と機体の線が多いから難しかったのかもしれない）？

本書の各機解説のページのコメントで小田氏が述べているように、ガンキャノンⅡはもっと別の形でガンダム作品に登場させようという意図があったのかも。ちなみに後年の「機動戦士カンダムUC」に少しだけ登場したグフ重装型もプラモデルになっていない。“重装型”は製品化に恵まれない星を背負った宿命なのか!?

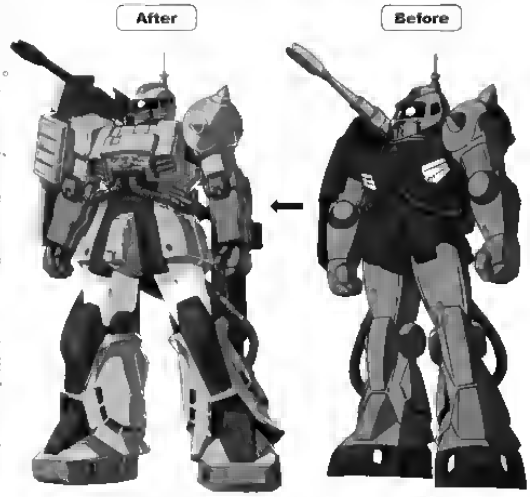
RX-77-4
ガンキャノンⅡ

RX-77-3
ガンキャノン重装型

MSV TV 雑学2 作品の時代で姿が変わる!? 旧MSのアップデート

今から40年近く前に作られた「機動戦士ガンダム」の作画は、平成も終わろうとしている現在の視点から見ると、そのモビルスーツなどのメカのディテールはあまりにシンプルだ（ダイナミックな動きは素直に格好いいのだが）。「ガンダム」の後にもロボットアニメやそれらをモチーフとした関連製品などは作られ続け、当然のこととして、クオリティや情報量はアップしていく。

当然、見る側の視聴者たちの眼も肥えてくる。2010年代に制作された『機動戦士ガンダムUC』では旧来のMSV系のモビルスーツも多数登場している。だが、その多くは右図のように現代的にディティールアップが図られている。これは作品のクオリティに準拠するためであり、同時に手足の長さや頭の大きさにも修正が加えられ、現代的なバランスにリファインされているのだ。「こんな小顔のザクキャノンは、オレの知っているザクキャノンじゃない！」とお怒りのファンがいるかもしれない。しかしディテールを足し、パーツごとの情報量を増やし、時代性に合わせてバランスを自分好みに整える、というのは、近年のガンプラ作りで多くの人がやってきたことであり、ある意味　プラモデルを源流とするMSVらしい修正と考えれば、こうしたアップデートも悪くないのではないだろうか。



2010年
ガンダムUC」のザクキャノン

1985年
Zガンダム　のザクキャノン

確かに刻まれていたMSVの因子たち

MSVはいうまでもなく、模型などが牽引したムーブメントだ。しかし、逆の言い方をすれば映像作品ではない関連企画である。MSVは確かに流行したが、「TVに出てこないからプラモデルも要らない」という層がいたのも確か。しかし、85年から放送された『機動戦士Zガンダム』では、前ページで紹介したようにMSVの機体が画面に登場した。まさに映像化の念願が叶った瞬間だ　その扱いはカメオ出演的なものだが、『Z』版のMSVのプラモデルも発売される、というアナウンスに当時のユーザーたちは盛り上がった。

しかしフタを開けてみれば、箱絵と成形色を変えただけの製品で、画面で飛び散りを食らわせていたガンキャノン重装型も発売されず、落胆する者もいたとか！：　その後も『機動戦士ガンダムZZ』『機動戦士ガンダム　逆襲のシャア』といったガンダムシリーズの製作は続き、それを追う形で関連製品は発売された。中には、ドワッジなどMSVの雰囲気を宿す新型機も登場したが、MSVそのものが画面に登場する機会はなかった。

平成に入り、宇宙世紀以外を舞台としたガンダムシリーズが世に出てはきたが、そこには旧来のMSVが登場する余地は無論なかっ

映像作品に登場したMSVのおもな作品リスト

機動戦士Zガンダム

MSの名前	登場話数	サブタイトル
MS-06E ザク強行偵察型	第9話	「新しい絆」
MS-06K ザクキャノン	第11話	「大気圏突入」
MS-06V ザクタンク	第12話	「ジャブローの風」
MS-07H グフ飛行試験型	第12話	「ジャブローの風」
RX-77-3 ガンキャノン重装型	第12話	「ジャブローの風」
RGM-79SC ジム・スナイパーカスタム	第12話	「ジャブローの風」
RGC-80 ジム・キャノン	第12話	「ジャブローの風」
MS-06M マリン・ハイザック（ザク・マリンタイプ）	第18話	「とらわれたミライ」

機動戦士ガンダムZZ

MSの名前	登場話数	サブタイトル
MSM-04N アッグガイ	第40話	「タイガーバウムの夢」ほか
MSM-08 ゾゴック	第40話	「タイガーバウムの夢」

機動戦士カンダムUC

MSの名前	登場話数	サブタイトル
MSM-04G ジュアッグ	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-06D ザク・デザートタイプ	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-06V ザクタンク	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-07C-3 グフ重装型	ep 4	「重力の井戸の底で」
MSM-08 ゾゴック	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-06K ザクキャノン	ep 4	「重力の井戸の底で」
RMV-1 ガンタンクII	ep 4	「重力の井戸の底で」
MS-12 ギガン	ep 7	「虹の彼方に」

※「ep 4」に登場するデザートゲルルグは、ZZ（CCA）MSVで設定された機体のため、今回は割合している。また、サクI スナイパータイプもハーモニー・オブ ガンダムで設定された機体のため割合した。

た。反面、関連企画として「MSVのようなもの」は、作品に付随して作られていくことになった。

そしてMSVが生き残る場所は別にもあった。それはガンダムシリーズをモチーフとしたゲームだ。ゲームはifを扱う場合が多く、公式（正史）なのかどうか、といった点がアニメ映像に比べれば多少曖昧となる。MSVやその派生機を出すのにも都合がよかった。ガンダムではないが高性能な機体に、アムロではない主人公が乗って活躍する、というシナリオとの親和性も高かった。

このようにMSVの因子は表層には現れずとも、確実に受け継がれていった。それが大きく開いたのは、やはり『機動戦士ガンダムUC』だろう。2010年代のこの作品は、かつてMSVを体験している年齢のスタッフが製作側にいるようになったことは大きいだろう。ある種の洗礼を受けたスタッフが、温め続けていたMSVへの「愛」をフィルムに投影したのだ。作品内に登場したジュアッグの驚異的な強さは、スタッフの思い入れの強さと同義であろう。

MSVが映像作品として直接表舞台に立つことは今のところない。『UC』においても、あくまでゲストだ。しかしガンダム、特に宇宙世紀を舞台にした作品においては、今後も何らかの形でその因子は発現するはずである。

【 MSVの証言 1 】

～MSVを創った男たち～

MSVとストリームベース

ストリームベース 小田雅弘インタビュー①

MSVが流行った時代を“人生の頂点だった”と表現した人がいる。画面に登場しない派生型モビルスーツをそこまでの人気コンテンツに育て上げたのがストリームベースの小田雅弘氏だ。ここではナビゲーターとして当時現場の事情に詳しい元サンライズの井上幸一氏にご登場いただいた。

ナビゲーター　井上幸一

ダグラムと同時代に描かれたMS06スケッチ

――MSVの始まりというと劇場版『I』公開後の講談社の『アニメグラフブック』に、なんの説明もなく、後の大河原さんのMSVザクのデザイン画が掲載されたところからだと思うのですが。

小田　この時は、僕らはまだ発注側にいないんですよ。発注はMSVの仕掛け人である編集者の安井尚志さんで、「軍用兵器のようなスケールモデルとしてデザインしたらどうだ」という提案をしたのは氷川竜介さんだと後になって聞きました。氷川さんはミリタリー畑の人ではないのですが、当時の人は、みんなそういったことを多少は読み齧っているんですよ。僕らはこれを渡された側です。

井上　81年というと、実はもう『太陽の牙ダグラム』の企画がかなり進んでいた時期なんです（放送は81年10月から）。当時すでに、ガンプラファンの人たちにミリタリズムを求めている人が多いことが見えてきていて、企画側もそこを意識していました。それを踏まえて大河原さんもデザインを起こしていた頃なんです。それが影響もしているでしょう。

小田　この時代、大河原さんのデザインは角型を意識して線が増えています。それがよくわかるのがターボザクですね。それまでのガンダム世界にはダグラムのようなターボザックはないんですよ。大河原さんが自由に描いたものを、そのまま使っているんです。今ではMSVと総括して言われちゃいますが、元は大河原さんのイラスト以外はなかったんです。

――大河原さんの絵は、一見リアルに見えるんだけれど、実はそうでもなくて、普通の人にもイメージが伝わりやすいようにデザインしていることがうかがえるものが多いという印象です。

小田　そうですね。この“ほどよい”具合がいいんです。最初の4体のザクバリエーションのイラストを見ると、ポイントに赤を使っているんです。それなど、『ダグラム』のプレゼンテーション用の素材とよく似ているんですよね。

井上　ちょうど『ダグラム』の企画用のデザインスケッチをたくさん描いていた最中ですからね。でも、僕はこれまではMSVをその視点で見たことはなかったんですが、やはり事象を時系列で整理することは大切だと思います。

小田　当時の画稿のやり取りは、講談社経由のバンダイでしたね。

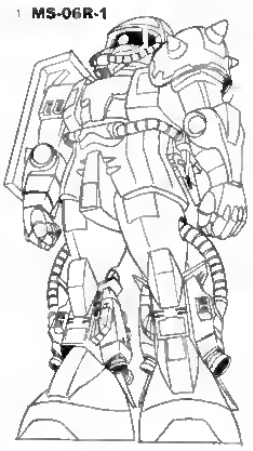
井上　初期の中継場所のひとつは当時の日本サンライズの企画室です。そこには安井さんも何度かいらして、打ち合わせをやっていました。

小田　例えば、ザクなのに連邦軍の意匠が入っていたりするので我々の方では結構料理に苦労しました。なにしろできて来ちゃうので（笑）。当時は学生でしたし、NGは一度も出したことがないです。その代わり、こちらで描いてしまうこともありました。それをOKしてくれるのが大河原さんなんです。また、僕の方が模型でしかやっていないものを、大河原さんが絵に描き起こしたりもしています。大河原さんは、僕が作って、大河原さんに差し上げた1／60の06R・2（ザク）を大変気に入ってくださって、お宅の道に面した窓に飾ってくださっていたんですよ。眺める一方ですよね。

ガンダム人気を作ったのはガンプラブームではない

――この後『GUNDAM CENTURY』が発売されるんですが、当時、同人誌を作るようなアニメ好きの最先端の方々の中では、SFやミリタリーからの視点というのは、すでに根付いていたんでしょうか？

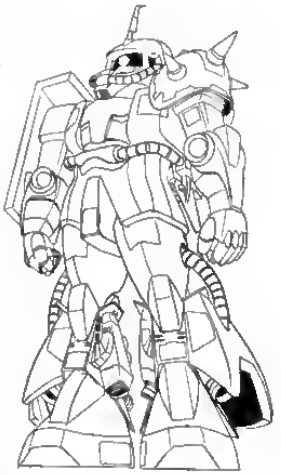
井上　先に『宇宙戦艦ヤマト』があったので、その時からすでにあ



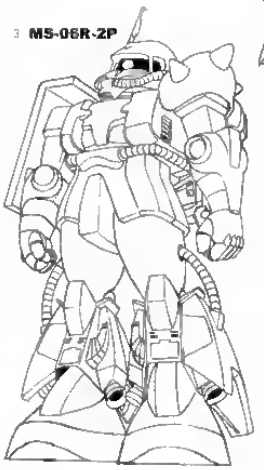
1 MS-06R-1

様々なタイプがあるザクⅡのR型

MSVの花形といえるR型のザクⅡだが、細部のデザインが異なっている機体も多い。①は黒い三連星やシン・マツナガ専用機て知られるMS-06R-1、②がシャニー・ライデン専用機として有名なMS-06R-2　そして③は高機動型ザク・ヒーム兵器搭載型。当時　雑誌などで彩色されたイラストもあった。



② MS-06R-2



3 MS-06R-2P

※本書に掲載されたインタビューは　小社刊「グレートメカニックG 2016冬号」にて掲載された記事を再録し　一部に加筆　修正等を行っております。

りましたよね。

小田　今まとめて読みたいのは「GUNDAM CENTURY」の元になった同人誌「Gunsight」なんですよね。その当時は、ガンダムの模型ファンというのはまだいないんです。ガンダムが好きなアニメファンの多くの人は「Gunsight」に目を通していたと思います。アニメ誌で喧々諤々やっていただけ中に、メカに傾注していた人たちが、そうやってちゃんと集まって形のあるものを作っていくムーブメントがあったんです。「センチュリー」にあるザクの名前の分解とか好きですね。〝ZION AIR COMMAND〟って。だからいまだに「ZAKU」じゃないだろう、という想いがあります。

井上　つまり「ZAC」ってことですね。「GUNDAM CENTURY」自体が「Gunsight」に掲載されていた記事がベースだったと聞いています。ただ、それがガンダムの〝公式〟の記録になってしまったことは、許諾したサンライズ側にとっては当時でもちょっと困惑する材料でもありました。

　そのせいか、あれに関わって本編でも脚本を書かれていた松崎健一さんは、ことあるごとに、「あれはあくまで大人の遊びだから」と、そこここで言ってくれています（笑）。

小田　今では考えられない状況でしょうが、好きな人たちの集まりは、分野でそれぞれ乖離していて、模型ファンは（アニメファンの中では）マイノリティーだったんです。MSVをやっていた頃に一番主力展開していたのが講談社、僕がやっていたのは「テレビマガジン」と「コミックボンボン」ですから、小中学生が読みやすいものですよね。じゃあ「ホビージャパン」の読者は「コミックボンボン」を読むのか？」といったら読みませんよ。僕らがやっていたようなことは、あの頃のアニメーションの純粋なファンの人たちは、冷ややかな目で見ていたなという体感があります。でも、それが逆転してくるのが、小学生が「ガンダム」に入ってきた頃なんです。

――そもそも、「ガンダム」の人気は、最初はキャラ人気と記憶していますが。

井上　その通りです。ただ、その部分が一部ではすっかり忘れ去られていて、ガンダム人気はガンプラファンから始まった、と思っている人が結構います　だから、「ガンダム」は打ち切られ、プラモデルが出るまではまったくダメだったとか言われちゃってるんですが、そう単純な状況ではないんです。

　実際は39話での終了案が出たのちに、様々な事情から最終的には43話まで延長されているくらいなんですよ。今でもよく、ブームを作るのは女性といわれますが、「ガンダム」放送当時には女性を中心としたファンたちが作った同人誌が、「ガンダム」の制作スタジオに山のように届いていたそうです。また「無敵超人ザンボット3」の頃から「アニメノック」の前身である「マニフィック」という本でサンライズに出入りするようになった編集担当者が、ガンダムをいち早くフューチャーしたりしていました。当時の「アニメック」には、寄せられたガンダムの同人誌がずらっと掲載されてもいましたし。さらに、そこに「月刊OUT」も追従しましたから。アニメファンにもいわば硬派と軟派がいるわけで、「ガンダム」も初めに騒がれたのはその多くはキャラ好きの方々だったんです。

――模型も、当時は発売後すぐに盛り上がったのではなく、劇場版のⅠ、Ⅱを経て爆発的に広がったというようにも記憶しています。

井上　放送がひと段落したことでファンの方々の熱も一旦落ち着いていたそうなんですが、劇場版をやるためにはやはり盛り上げる仕掛けが必要ということになって、新宿駅広場の〝アニメ新世紀宣言〟とかいくつものイベントが計画されたりしました。MSVなんかもその一角を担うわけです。

――あの頃は普通にイトーヨーカ堂なんかで、まだ出たばかりのガンプラが買えました。たしかに将棋倒し事故は新世紀宣言より後ですし。

井上　ポスターなんかも、キャラの安彦さん、メカの大河原さん、背景の中村さんといった各絵描きさんたちに描いていただいて、そこには例えばザクだとか黒い三連星だとか、作品ごとの登場モビルスーツが描かれ、劇所や街中に並ぶということになりました。そのとき大河原さんも、TVシリーズとは色違いのガンダムを描いたり、それこそ4本爪のズゴックを描いちゃったり（笑）。

小田　富野さんの「ガンダムの人気はプラモデルが作ったものじゃない」という魂の叫びみたいなものがあります。でも、本当にそうなんですよ。最初にムーブメントを作ったのは女子中高生なんですから。

井上　また、最初は、富野、安彦人気だったわけで、大河原さんは前面に出ていたわけじゃないんですよ。でも、劇場版の話題づくりには大河原さんも含めて主要スタッフ皆をフューチャーしようということで、「好きなように描いていいから」ってことでバリエーションのイラストも登場してくるわけです　当然そこにはミリタリー好きも引っ張ろうとの意図もありました。言い換えれば、当時、並行して企画作業をしていた『ダグラム』を生む原動力となったのは、ある意味では、MSVであり、模型のファンの人たちの力でもあるといえるんですよ。

ヤマトからガンプラブームまでのモヤモヤした時期

――ユーザーとしての初めてのシヨックは、小田さんたちの作られたザクとかズゴックのフルスクラッチモデルなんですよ。それを見て、「これがなぜ製品にならないんだ」「どうしたらこういうのが作れるんだ」ということで、ポリパテを買いに行ったりしました。

小田　それは僕らも同じでした。我々にとってもポリパテというのは脅威の存在だったんです。それまでの商品からすると革命的でしたね。こんな風に自由自在に形ができるのかとびっくりしましたよ。関西は粘土をこねて形作る文化ですが、関東は盛って削る文化でしたからね。

　海洋堂のユーザーさんで僕と仲のいい人が居まして、その人が色々と情報を教えてくれてたんですよ。それで、関西に行くことになって海洋堂さんの現実を知るんです。初めて行ったのが83年ですけど、そこで関東と関西のプラモデル文化の意見交換をしたんですよ。海洋堂さんの方も東京の方から人が来るっていうんで身構えてましたね（笑）。方法論とかまったく違いましたから、でも結局は一晩徹夜で語り明かしました　イ

ンターネットなんてないから直接話すしかないわけで、面白かったですよ。そういう時代でしたね。

――ユーザーからすれば、先のスクラッチにおける工作技術とか、プラモデル製作技術の情報更新など色々と教わった時代でした。

小田　それまでもアニメのプラモデルはありました。今井科学（イマイ）が『サンダーバード』などマンガでも映画でも、なんでも版権を次々と取って、文房具屋さんやおもちゃ屋さんなどを中心に売った黄金時代というのがあったんですが、その流れを汲んだのがバンダイなんですよ。イマイの後期の頃『キャプテンスカーレット』や『マイティージャック』などの凄いものを設計していたのがバンダイに移籍した松本悟さんで、バンダイに来て造ったのが『謎の円盤UFO』などのスケールモデル的な物なんです。松本さんは、ちゃんと自分のやりたいことを持ってらっしゃる方だから、大きい会社の中では、ちょっと特殊な立ち位置にあったかもしれません。ガンダムのプラモデルができるまでのところには、ちゃんとそういう人材がいるんですよ。

井上　余談ですけど、『ヤマト2199』のCGパートを担当したサンライズのCG部署の、立ち上げ時の担当役員はその松本さんなんですよ（笑）。

小田「形にして手元に置きたい」という欲求は最初のガンダムのプラモデルが満たしているじゃないですか。それも、ユーザーからも色々言われますから出るたびに改良されてゆきますので、マニアの人から〝進化モデル〟って呼ばれたんです。プラモデルが発売されたのは放映終了後半年くらいしてからですが、立体物＝模型としてのガンダムが盛り上がったのは放送開始すぐなんです。合成素材とかポリエステル樹脂とかが出始めたころで、早稲田大学のゲームサークルが、五センチ弱くらいのコマとしてのモビルスーツを作っていて、川口（克己）君もザクを作っていた。作ると面白いんです。ちゃんと塗装もして楽しんだりしました。つまり、立体を作らせるだけの作品だった、ということです。模型センサーに触れる作品だったんです。

井上　当時すでに『宇宙戦艦ヤマト』では中高生などにプラモデルが売れてましたから、（サンライズの）企画部長の山浦栄二さんも、キャラクター人気の先にある『ガンダム』商品群の新展開として、そこはかなり意識していましたね。

小田『ガンダム』も『ヤマト』と同じで、プラモデルが人気になったのは後追いでしたね。

井上　プラモデルという商品形態では、放映中はどちらもあまり奮わずですね。ただ、ミリタリー風味の『ヤマト』の他に、ガンダムより前の『超電磁ロボ コン・バトラーV』などのロボノトでの合体プラモデルなどもあったわけなので、土壌がなかったわけではないのかと思いますけどね。

小田　この辺りの、濃い一、二年のモヤモヤした部分は、小学生くらいでガンダムに入ってきた年齢の人たちは知らないでしょうね。当時は「キャラもののプラモデルは扱わない」という模型店も結構あったんですよ。

――ありました。大人と一緒でないと入れないお店もあって。

小田　鉄道模型なんかは、今でも完全に別物ですしね。大人しか行かない店がありましたよね。だから、当時のボノブカルチャーである『ヤマト』、『ガンダム』は、そのあたりの感覚が大きく変わる変革期だったんですね。

――『ガンダム』人気の元はキャラだったけれども、それが35年保ったのはプラモデルのおかげと言えるのかもしれませんね。

井上　結果的に、『ガンダム』でMSVがあって、プラモデルが売れたからこそ『機動戦士Zガンダム』という新たなシリーズも制作されたわけですよ。MSVもシリーズがひと段落してしまったバンダイさんとしては、もう一度ガンダムをやれば、また新たなプラモデルが出せるだろうと考えますよね。

小田　数字が裏付けになったわけですよね。とにかく何を出しても〝ポストガンダム〟とキャッチフレーズを付けられましたから。

井上『ヤマト』の場合は元々戦艦大和という元々の土台があったからスケールモデルのイメージが取り込み易かったわけですが、『ガンダム』のMSはそうではなかったはずです。おそらくはMSVができたことによって『ガンダム』のスケールモデル化が進むんです。

小田　たから、『ガンダム』でもその匂いのあるマゼランとかサラミスを見ると、つい「おっ？」と思うわけですよ。（笑）ガウなんて小さいけどよくできたキットなんですよ。繊細でね。

井上　カワイイですよね、あのキノト。大河原さんはMSイラストで〝ハゲチョロ〟つまり塗装の剥げたものとか、汚れた状態のものを描くんです。まるで模型作品を投影するかのように。

小田　剥がれた塗装の部分も『ダグラム』の前と後では使う絵の具が変わってるんですよ。同系色を使って色落ちを表現するのは『ダグラム』からです。それがとても好きでしたね。なので、MSVのイラストというのは、ちゃんと影もつけた着彩で新鮮だったんですよ。『ダグラム』というのは、最初からちゃんと番組に対する商品展開が計画的にできていた整合性の産物ですよね。片や『ガンダム』はどうだったかというと、全部「出たとこ勝負」なんです。

井上『ガンダム』はいまだに「出たとこ勝負」ですよね（笑）。

誰一人振り返っていない前だけを見てる

井上　それまで、フルスクラノチてやっていたファンが、今度は〝ない世界〟で出てきてしまったスケノチを見て、やってみようと思った、というのがMSVですよね

小田　大河原展にも飾られていましたが、ザクの頭の正面と横のイラスト、実はあれが僕らの引き金になっているんです。デザイナーが設計図に近い形で描いてくれているあのザクの頭が、僕の頭の中にあるザクの頭です。ブレードなども航空機調というのはあそこからきてますし。とにかくあの頃はモデルを作るために欲しい絵がなかったわけです。だから、あの最初の4枚は、まさに砂漠に垂らした水ですよね。

――当時小田さんたちが作られていたモデルは、見本市などに飾られてバンダイの人が来場者に感想を聞いたりしていたそうで、映像も何もないから、直接リサーチをやり、プロモーションもやらなきゃならないという意味からも、まさに初めて本気で作ったガンプラがMSVだったといえるんじゃないでしょうか？

小田　僕もそれまでに講談社で設定をかなり書き溜めてあったから、それもあって、商品化の話が来た

という気もします。『ガンダムセンチュリー』とのすり合わせというのもありましたし。

――同時進行的にあったものを一緒にして行くというか。

小田　誰一人振り返ってない。前だけ見てるんです（笑）。小学生主体の『コミックボンボン』は、中学生たちが買い難いということで、煽り文句を変えたりしたそうですよ。

井上　実際、アニメを作っているスタッフにも、実はプラモデル好きは多かったですね。その想いは多少は作品にも反映されるかもしれません。

小田　そんなアニメの世界に後からプラモデルが追いつくんですよ。僕なんかは、元々飛行機が好きなので、ザクには二次大戦機のイメージを重ねたりしました。でも、ガンダムのプラモデルでは汚しやダメージ仕上げをしたりするので、周りには戦車の人と思われていたみたいです。だって、飛行機モデルにダメージはないですからね。ダメージはイコール墜落ですから（笑）。

井上　モビルスーツは殴り合いをしますけど、本来ガンダム世界の基本イメージはカッコいい空軍なんだそうです。

小田　でも、見る人によってどっちにもとれるから、よかったんだと思いますよ。

井上　『ガンダム』はそういう〝どっちつかず〟な部分があったから、MSVがその辺の部分を全部取り込んでしまった、というズルさがあったんじゃないかと。

小田　すみませんでした（笑）。

模型は作る人が自由に作ればいい

井上　タイミングというものもあったと思うんです。『ガンダム』が終わって大河原さんは富野作品と一度離れますよね。『伝説巨神イデオン』には参加してないですし、その後のサンライズの主力である『無敵ロボトライダーG7』『最強ロボ ダイオージャ』は主役ロボットをデザインしたら終わりです。劇場版の『ガンダム』にしてもコア・ブースターの登場までは、すでに描き足すものがない他社の仕事はされていますが、『ダグラム』をやる以外の時間は、イラストやこういうものに向けられたわけですよ。

小田　僕は大河原さんの所に行って、特定のマニア言語を使ったことがないんです。大河原さんは根源的なところで話をする人ですからね。こちらからお話しするのは、このメカはどんな使い方か、活躍状況はどういうものかとか、そういう部分です。デザインについてどうこう言うことはないです。MS-Xの時ですが、競作機の一歩進んだものという意図を上手く伝えられなくて、2つのメカをミックスしたようなものが上がってきちゃったことはありました。あれは発注の仕方を失敗しましたね。

井上　近年でも似たようなことがありましたよ。大河原さんは大変誠実に、発注者の言葉通りのものを上げて下さる方なので、発注側も気を付けないとだめなんです。

――仕掛け人である安井尚志さんとはどのような形でお仕事をしたんでしょうか？

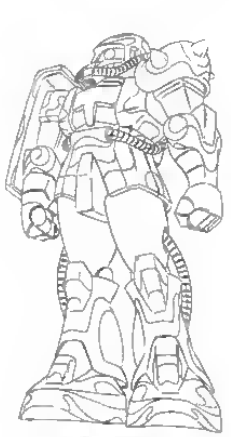
小田　フリーの編集さんですが、本当に色々なところとお仕事されてましたね。安井さんを通じて、僕らも色んなつながりを持つことができましたし、MSVでは面白がってやっている僕たちを上手に泳がせ、遊ばせ、束ねながら、という感じで、一番辣腕を振るわれたのはマネージメントですよね。やってはいけないということは言わなかったですし、出来上がったものは何一つ無駄にしない人でした。もちろん、使い物にならない物に対してのリテイクは厳しかったですよ。

井上　映画の小道具と違ってモデルは立体の全部の面をきっちり作りますよね。その場合、絵にない部分はどうやって？

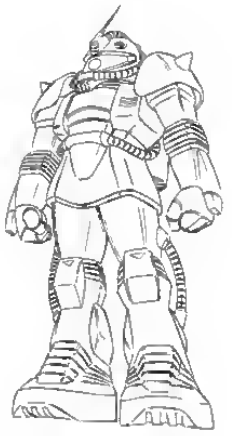
小田　あとから線画を起こしてもらったような気がします。

井上　それで理由が解りました。実は、昨年の大河原邦男展の際にバンダイの静岡工場から、MSVの背面の線画がたくさん発掘されて、展示に追加されたんですよ。

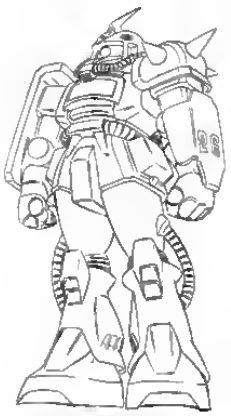
小田　色の使い方では色々と苦労した面はありますね。画面で活躍したものと、こちらで上がってくるものとの違いをどうするのか。また、発注した側の考えの違いというのもあって、実際にあるようなマーキングをそのまま入れてしまうとか、「それはどうだろう？」というものもありましたよ。それで自分で模型を作ったときは、そのカラーリングは採用しなかったりしました。だからイラストとは違う仕上がりのモデルもありますよ。世に出てしまったデザインはオフィシャルということになるんだけれど、僕はそうは考えないんです　模型を作る人は、自分の好



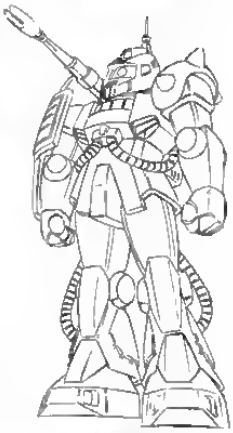
湿地戦用ザク



深海作業用ザク



砂漠戦用ザク



航空機迎撃用ザク

↑現在では名称も異なるが、MSVにとって始まりのルーツといえるのがここに掲載した4機のザクバリエーションである。これがモデラーであった小田氏たちの創作意欲を大いに刺激し　後々のブームの礎となったことは本文インタビューを見ても明らかだろう。

きに作ってよと。そう思うんです。

実はザクしか作りたくなかった（笑）

――大河原さんの初めのイラストからMSVのプラモデルが出るまでの約2年の間は、どんなことをなさっていたのでしょうか？

小田　ひたすら好きなことをやっていましたね。スクラッチ、改造の傍ら、機体の設定、解説をやって、それが毎回の『コミックボンボン』の売りになって行く。それを見た子供たちが、自分もやってみようというんで、機体改造の写真なんかをいっぱい送ってくれるんです。それでコンテストもやりましたし。そういう〝温まり〟の時間を経て、商品化で爆発するんです。こうした情報は安井さんを経て『模型情報』の方にも流れていますので、それを通してバンダイの方も様子を見ていたと思いますよ。こうした時間を経て商品化決定の発表が出た時には盛り上がったと思います。

――それまでのスケールモデル好きの人のポイント、それぞれの機体の裏にあるドラマのようなものを、本編には出ない機体に作ってあげていた、ということでもあるんですね。

小田　富野さんの作るような、ドラマ用の一種特別な人ではなく、ごく普通の軍人を作りました。「ドラマツルギーの中にはいないかもしれないけど、現実の軍隊の中にはいたよね？」という人たちです。そうしながら、本編には抵触しないというのがMSVのポリシーです。

――他のソースでは色々と本編の理屈に合わないものも出てましたよね（笑）。

井上　ザクは、それこそ色々な場所で作られているだろうし、地上に降りてから改造もされているだろうと思うんですが、例えばジムは時間的なことを考えても色んなタイプがあるのは妙だな、と思いますよね。

小田　実際、僕や同じストリームベースの川口君は、ザクしか作りたくなかった、ザクしか頭になかったんですよ（笑）。ザクがあれば、それがグフになり、ドムになり、というのは解るんです。局地戦用だろうというものでは、そういう広がりが考え難いんです。井上さんがおっしゃる通り、ジムのバリエーションには困りました（笑）。

計算では生まれない同時進行による偶然発生

小田　MSVにはTV版も劇場版も小説も全部混ざってます。『GUNDAM CENTURY』で、軍事メーカーが2つ書かれていました　あれは非常にピンとくるものがあったんです。競作メーカーという話は「ああ、なるほどね」と。こういう理由でこちらが採用されたんだろうとか、逆算的に機体を考えることができるんです。

　また、例えば飛行機が好きな人には、失敗作なんだけれども形や色などが魅力的で好きだというファンは多いです。そういう位置づけをMSVではやったりしてるんです。でも、時には大河原さんが自由に描いたもので、競作メーカー同士のはずのメカが融合したものがあったりするんです。そういう場合は〝そっと〟しておきました（笑）。

――ユーザーとしては、そういう点が気になって仕方がなかったんですよ。プラモデルにもならないし（笑）。

小田　あの時代は、まさか後に『Zガンダム』が出てくるなんて思ってもいないわけで、戦後がどうなっているかなんて解らないわけですよ。かといって僕らが勝手にそれに触れるわけにはいかないから、色々と大変だったんです。

――当時は大学生でいらしたわけですから、その〝オトナっぷり〟はスコいですよね。

井上　小田さんたちもそうなんでしょうけど、あの頃はアニメに登場するメカのスペックや文章設定を作っているのも大学生たちだったりしましたからね。でも、そういう場所には一番気を使ったと思いますよ。

小田　バンダイで設計をやっていた人は、初めてこういうプラモデルをやったわけですよ。やりながら段々コツがつかめてきて、大河原さんの設定資料にも近づけるようになって行ったんだけども、実際には『ガンダム』なんて見てないわけです。ところが、ある時、設計スタッフの中に、明らかに『ガンダム』を見てファンになってる人が出てくるんです。動いている絵と設定を上手く咀嚼して設計図面に落とし込めるんです。あれは事件でした。

井上　ところで一度開いてみたかったんですけど、ザクバリエーションの中では、小田さんは何が一番好きですか？

小田　やっぱり普通のRタイプが好きですね。製品のない時から自分で作り起こしていたものですから愛着があります。僕には僕の好きなザクバランスがあるんです。他の人にもそれぞれのバランスがあって、製品によって実は使われているモデルの作者も違うんです。

　本編第1話のザクは、安彦さんが、まるでローマの剣闘士のようなスパルタンな形にして見事に描いてます。あれを見たら、なんとか設定画と画面のザクを頭の中で融合させて作ってやりたくなります。だからこそ、作り手ごとに違うものが出てくる。ザクってそういうものなんですよ。

――お話を伺っていると、色んな人が好きに作っているんだけど、それをそれぞれが互いに尊重しているという感じがしますね。

小田　とにかく、ジャンルを超えて色んな人が色んなことを言ってくる時代でした。それを僕のところでみんな受け止めて、拾う話もあれば切り捨てる話もある。でもスケールモデル一辺倒的な考えだったら、あんなに子供は食いつかないですよ。

井上　商品化に踏み切ったバンダイの思い切りのよさもあったと思いますよ。版権許諾などにもかなりリスクの高いチャレンジもしてるわけですから。

小田　僕らが子供のころに100円で買って作ったプラモデルと同じ感覚で遊んでもらいたかった。それのもうちょっとだけ背伸びしたところにMSVを持ってきたかったんです。僕には使命感なんかないし、やりたいからやっていただけです。でも、かなり厳格に本編に抵触しないことを守ったがために、アニメーションの世界とは乖離したいびつな存在ですよね。それでも、子供向けから専門誌にまで情報が乗り、最初は立体がないから手を動かして作り、認知度が上がりプラモデルが発売されて追いつくという、この偶然性っていうのは、計算ずくでできるものではないですよ。

井上　何より、平面でしかなかったものを小田さんたちが立体にして作ってしまった。まずそれがあったからこそ生まれた結果だと思いますよ。

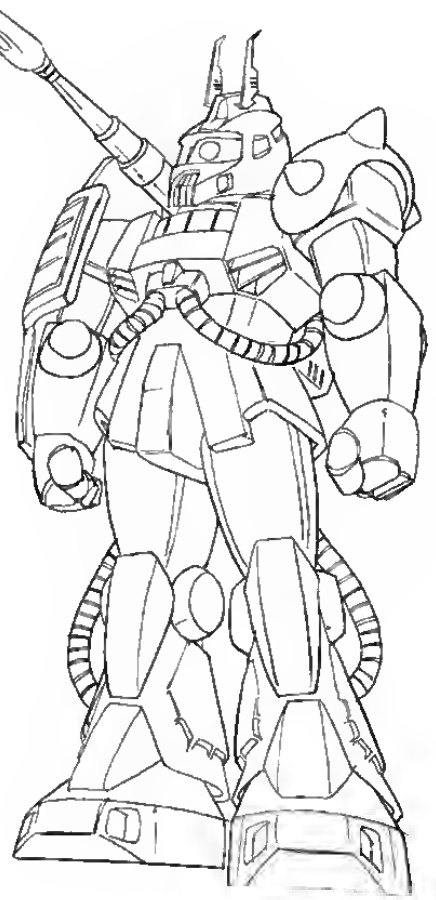
【 MSVの証言 2 】

ストリームベース

小田雅弘インタビュー ②

「当時は若いから何も知らなくて無謀だったけど無謀だからできたことでもありました」

当時を振り返る対談に加えて、ここではストリームベースの小田雅弘氏に再びご登場いただき、より詳しく『機動戦士ガンダム』の起こしたムーブメントや、MSVにかかわる経緯からMSVに至るまでの道程、当時の模型業界事情など様々な話題を振り返っていただいた。時代の証言者でもある小田氏から見えたMSVの世界とは!?



全方位の模型店が考え方を育んだ

――MSVのムーブメントは、81年に発表された各種刊行物をスタート地点として盛り上がっていったと思われます。これは『機動戦士ガンダム』のプラモデルのムーブメントの盛り上がりと、リンクしているような印象があります。

小田 確かに81年以前は、少なくとも『ガンダム』周辺はまだ大騒ぎにはなっていない状況でした。まあ80年の時点でもヒットしていましたが、子どもたちがマニアの来るような模型専門店に来てしまうのは、それからもう少し経ってからですね。

きっかけは『ホビージャパン』の81年3月号（特集「GUNDAM WORLD II」掲載）の影響が大きかったと思います。プラモデルを買って、少しでも差別化をしようという流れが、子どもの間でうまく働いたのかもしれません。

――当時の模型店は、このような状況をどう捉えていたのですか？

小田 当時の模型店のキャラクターものに対する反応は、決してすべてを歓迎していたわけではありません。中には子どもたちが大量に来ることで、迷惑に思っているお店も少なからずありました。

当時の模型誌の広告には、「ガンダムなど1つもなし」ってキャノチコピーを付けている模型屋さんもあったほどですから。

――そうした専門店は、なかなか敷居が高かったんですね。

小田 東京都内で全方位型の模型店って、当時は数えるほどしかありませんでしたから。そのうちの1つが、僕らが通っていた京王線笹塚の「ホビーセンターえんどう」でした。

「えんどう」はスケールモデルもメタルフィギュアも扱っている一方で、キャラクターものの在庫もしっかりしている。一階が玩具屋さん、二階が模型屋さんということもあって、たとえば『スター・ウォーズ』の製品が欲しいと思ったら、玩具も模型も両方手に入る。「えんどう」に行けば、すべてが揃っていたんです。そうした品揃えのお店だけに、こちらも臆することなく、いろんなものに触れることができました。

――当時、他にはどんなお店がキャラクターモデルに門戸を開いていたのでしょうか？

小田 たとえば小岩の「タカラ模型」ですね。こちらは三階建ての小さなビルの模型屋さんなんですが、店頭ではブルマァクの『ウルトラホーク1号』を売っている横で、バリバリのスケールモデルも売っていました。「どっちも模型だから楽しくていいじゃないか」という考え方ですよね。

逆にキャラクターモデルを前面に押し出している模型屋さんもあって、代表的なのは大田区久が原の「モデルエース」でした。海外のオーロラ社などの製品を多く仕入れていて、柿沼秀樹さんがよく利用していましたし、『モデルエース』出身のライターさんも当時は多かったですね。

――そう考えると「えんどう」は、当時としては奇跡のようなお店だと感じられます。

小田 物を仕入れるだけじゃなくて、能動的な動きをしていたお店だったんです。実際に海外の製品を取り寄せて、自分の系列店舗に卸すというディストリビューター的なこともやっていましたからね。たとえば本国で生産しなくなったレベルの製品でも、メキシコやブラジルでは現役であることも多く、わざわざ取り寄せていましたから。

――多彩な人が集まっていた、というお話を伺うと、その理由がわかる気がします。

小田 キャラクターが好き、ミリタリーが好き、戦車が好きなんていう人たちが、ジャンルを問わずに集まる状況ができていました。子どもがワイワイ来ても、なにも

言われないお店でしたからね。仕入れをしている社長さんがそういった考え方で、すべてを分け隔てなく扱っていたんです。「類は友を呼ぶ」じゃないですけど、そういう雰囲気だと自然に様々な人が集まってくるわけです。インターネットや携帯がない時代なのに、不思議ですよね。模型愛好家だけではなく、映像関係者や専門誌のライターや雑誌の編集者もいて、ネタ探しをしていることも珍しくはありませんでした。

僕がもう『ホビージャパン』のライターをしている時ですが、見ず知らずの別媒体の編集者さんから「うちで原稿書きませんか?」と声をかけられたこともありました(笑)。そういう意味で「えんどう」は人と情報と物が自然と集まっていたお店といえます。

『ガンダム』の盛り上がりとライター本格デビュー

――当時、お店ではどのようなコミュニケーションが行われていたのでしょうか?

小田 当時は「えんどう」の常連さんで行う例会がありまして。月に一度、一緒にご飯を食べて、作品を見せ合う会がありました。僕らが参加したきっかけは、社長が「君たち、よく作るから例会に来ないか」と声をかけて頂いたことです。そこで大人の人たちに混ざって、「どんな素材を使っているのか」、「バキュームフォームのうまいやり方」なんていう話をして情報交換をしました。

また常連さんが「これ、飾ってよ」とケースに飾るための作品を持ってきていたことも当時は勉強になりましたね。ただ買いに行くだけじゃなく、ショーウインドウの作品が次々と変わることも刺激だったんです。思えば人と人の繋がりの影響力が、強い時代だったと思います。それは偶然の出会いだったり、社長が紹介してくれたりと、色々なケースがありました。

――あらゆる人や、様々なジャンルからも刺激を受ける土壌ができていたわけですね。

小田 そうですね。『ガンダム』前夜の時代って、1モデラー1ジャンルの時代なんですよ。船の人、戦車の人、モデルガンの人みたいに、1つのジャンルを突き詰めていくので、みんなそれなりにオーソリティでした。集まって話すと、自然と情報交換が面白かったりするんです。たとえば戦車のオーソリティが、信地旋回と超信地旋回の違いを教えてくれたりしてね。そこでかみ砕いて教えてもらったことが、自分の知識になっていったわけです。

――ストリームベースが結成されるのも、この頃でしょうか?

小田 ストリームベースを名乗るのは「えんどう」からですが、それまでには2つの模型店時代を経ていますね。最初の模型店時代は、7~8人のグループでした。そこからグループのトノプのメンバー、僕ともう2人ぐらいいたかな?

その3人が次の模型店に移って別グループを作り、さらに「えんどう」に移っていきました。実はそのトノプのメンバーの1人が、「えんどう」に就職したことは大きなきっかけです。そこから「えんどう」に出入りするグループの中で、同じ傾向の人たちが引き寄せられて生まれたのがストリームベースです。

すでに『ホビージャパン』でライターやっていた人や、他のグループ所属の人も参加して、合計で14人ぐらいになったでしょうか。その中で『ガンダム』を手掛けていたのが、僕ら4人(小田雅弘、高橋昌也、川口克己、勝呂國弘)だったんです。

――当時、みなさんの年齢はおいくつぐらいだったのでしょうか?

小田 18~19歳ぐらいですね。僕以外の3人は同じ高校の同級生だったんです。当時メンバーの一部が浪人して代々木の予備校に行くわけですが、『ホビージャパン』の編集部(本社)も代々木ですからね。自然に代々木の喫茶店に結集しては、うだうだやっていましたね(笑)。

存在するのであれば必ず作ることができる

――『ホビージャパン』には、いつ頃から参加されるのですか?

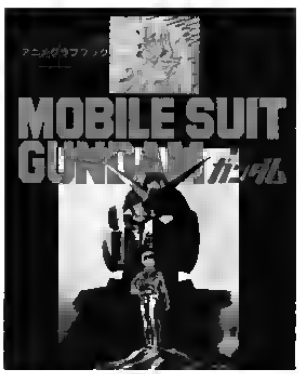
小田 『ホビージャパン』の80年8月号に掲載される『ガンダム』の特集からです。その年の1月に、「SFキャラクター関係の特集をやるから、やってみないか」と。僕らが『ガンダム』をよく作っているということで、先輩ライターに声をかけていただきました。80年の1月といえば、まだ『ガンダム』のプラモデル化の話はまったく知らなかった時期でした(最初の「1/144ガンダム」の発売は、80年7月19日)。

ですからスクラッチで間に合わせようということで、描い1/100スケールのシャア専用ゲルグを作ったわけです。

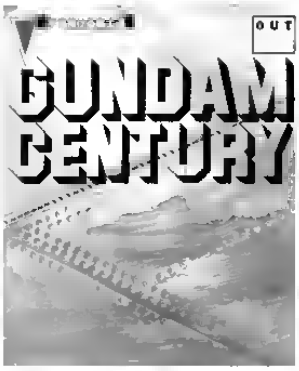
――モビルスーツをフルスクラッ

ガンダムブームを支え、MSVにも影響を与えた2冊

どちらの書籍も劇場版『ガンダム』公開後に出版されたガンダム関連のムック本である。特に『劇場版 機動戦士ガンダム アニメグラフブック』では、大河原邦男氏によるザクバリエーションのイラストが掲載され、話題を呼ぶことになった。小田氏もこのムックのイラストに刺激を受けてバリエーションのスクラッチモデルを作ったという。そうした成果はホビージャパンから刊行された『HOW TO BUILD GUNDAM』などに掲載されている。一方、みのり書房から発売された『宇宙翔ける戦士達 GUNDAM CENTURY』は、設定画をフォローする重要なムックといえる。当時のTVシリーズに携わったオリジナルスタッフが参画していることもあり、極めてオフィシャルな雰囲気を纏っていた(00年には復刻版が発売された。発行は樹想社、発売は銀河出版)。



劇場版 機動戦士ガンダム アニメグラフブック



宇宙翔ける戦士達 GUNDAM CENTURY

チで作るという流れは、すでに生まれていたのでしょうか？

小田　前年（79年）の夏から秋にかけて、フルスクラッチのザクを作っている人は、読者投稿でも結構見かけましたからね。それを見ながら「これはすごい、どうやって作っているんだろう」と思いながら、手探りで進めていきました。当時は若いから何も知らなくて無謀だったけど、無謀だからできたことでもありました。

何をやるにも新鮮だったというのは大きいです。前例がないですから、なにをやってもいい。転用できるノウハウは、ミリタリーの技術だけですから、その手法をキャラクターモデルに当てはめていったんです。

――ロボットキャラクターを、立体としても、兵器として捉えて手法を落とし込んでいったのは大きかったと感じられます。

小田　そもそも僕はSFの人間ではなく、ミリタリー出身ですからね。ですからモビルスーツも、劇中の描写もありましたし、そのまま人間が作った「現用兵器」という割り切った視点で見ることができました。兵器であれば、こういう流れがあるだろうという逆算もできます。そこは『宇宙翔ける戦士達　GUNDAM CENTURY』（みのり書房）で書かれている、くすぐりがあるだけで十分なんです。あとは好き勝手に想像できますからね。

――低年齢層のユーザーたちが増えたことで、そうしたユーザーにレクチャーする意図も増えてきましたか？

小田　プラモデルの気に入らない箇所に手を入れるじゃないですか？　そこで「なぜそうするんだろう」で止まらず、「どうやったらできるんだろう」という考えに至った子は、色々な意味でユーザーだろうな、とは思っていました。そこまでいけば、実際に手を動かしてくれますから。

でも、こちらは子どもに向けてなんて微塵も思っていません。なぜかというと自分たちが子供の頃に、同じような体験をしていますからね。それこそ僕らが子どもの頃は、ソリッドモデラーたちがいる時代です。「目の前に存在する」ということは作る手段があると理解してきましたから、僕らが作るにしても「やればできる」という提示の仕方が自然だったと思います。

ファンの声を汲む新新な試みがMSV

――本格的にオフィシャル的な展開に携わるようになったのは、どんなことがきっかけですか？

小田　スタート地点は徳間書店から出ていた『アニメージュ』の座談会（81年4月号掲載）です。ここで大河原（邦男）さん、ハンダイの松本（浩）さん、内田（嘉正）さん、そしてモデラーの出会いの場を作っていただいたんです。池田憲章さんからのご紹介で、安井尚志さんから「座談会用に模型を作る人間を3人用意してほしい」ということで、ストリームベースから僕と高橋昌也、ビルトシュニノツァーの小澤幸市君とお伺いしました。

――そういった場に若手モデラーに声がかかるのは時代ですね。

小田　キャラクターモデルの専門の模型誌は存在しない時代ですから、ライターはみんな新進の人ばかりでしたからね。でも、バンダイさんとしては、キャラクターモデルがここまで広がっている背景には、マニアの発信力や影響力は無視できないというスタンスでした。

社内的に企画を進めるよりも、マニアの声を拾い上げて、うまく商売に繋げたい、というのが本音でしょうね。かたや我々としても、メーカーと会って話せるのは見本市程度。それにしたって、雑談する程度です。こうして直にやり取りできる機会はありませんから、メーカーとユーザーである我々の、お互いの利害が一致したわけです。

とはいえメーカー側がファンと開発する、という試みは、異例中の異例だったのではないでしょうか。

小田　バンダイの松本さんもご自身の著書で、僕らのグループはユーザーに対する影響力が強いので、無視できなかった、とハノキリ書かれています。こちらの記憶とバンダイさんが当時抱いていた思惑は、完全に一致していたんですね。確かに当時の誌面から、強い空気が見えていたとは思えます。

――振り返ってみると81年までの

当時の情報発信源

『模型情報』は、当時のバンダイ模型から発行されていた小冊子で、もともとは製品販促用の配布物（製品購入時のオマケ）であったが、それだけを買い求める人も多く　有料化の後に判型があらためられ模型店の店頭などで販売されていた。時に別冊としてMSVのハンドブックなども発行されている（下写真中央）。通称の「MJ」は後に誌名にも用いられ、94年1月に休刊した。

模型サイドからのアプローチ

80年代初頭の頃は、まだ「ガンダム」などのアニメモデルが記事として取り上げられることが稀であった。"スター・ウォーズ"が「ホビージャパン」の表紙を飾ったりしただけで話題になったという。それでも「ガンダム」の熱量の高さは、次第に人気コンテンツへと成長し「ホビージャパン」の別冊が発売されるまでに至った。それが「HOW TO BUILD GUNDAM」であり、掲載された記事を目にした読者（特に若年層）が受けたインパクトは絶大であった。後に「HOW TO BUILD GUNDAM 2」も発売され、モデラー必携の書となった。09年8月に復刻版が発売された（1、2同様）。

HOW TO BUILD GUNDAM

HOW TO BUILD GUNDAM 2

流れは、『機動戦士ガンダムⅡ哀・戦士編』の公開や、ＭＳＶの胎動を始め、非常に多くのネタがもたらされていたんですね。

小田　『ガンダム』のＴＶ放送が終わって、一年ちょっとの間に、本当に色々なことが起きましたからね。その間の講談社の動きには驚かされます。当時、アニメ誌はキャラクターや声優さんが中心ですから、模型を中心とした展開は、かなり特殊な盛り上がり方だったと思います。しかも『テレビマガジン』や『コミックボンボン』といった、従来的なアニメ誌ではない媒体が中心で、それを大手出版社が展開しているわけですからね。これが『アニメック』（ラポート）や『月刊ＯＵＴ』（みのり書房）だけだったら、こういう盛り上がり方はなかったでしょう。

――ライターとモデラーの仕事のバランスを取ることは、難しかったのではないでしょうか？

小田　そうですね。模型を作るにしても、一作ごとに高いクオリティがどんどんと求められますから、数を作るのは難しくなります。ある程度時間をかけたものでなければ、期待に応えられなくなりますから。一方で設定を考える書き仕事も増えてきますから、自然とバランスは落ち着いていったんだと思います。

――各機体の成り立ちは、本書のそれぞれのページを参照いただくとして、ＭＳＶに対する解説に関しては、どのような方法で進められたのでしょうか？

小田　最初は絵解きですね。大河原さんの描かれた絵を見て、それをこちらが勝手に考察するというのが最初でした。こちらとしては、ずばりマニア用語しか使わなかったですね。

　たとえば全遊動する補助翼のことをオールフライングテールっていうじゃないですか？「それはやめてくれ」と言われても、おかまいなしでしたね。ただ、語感の持っている大事さを、安井（尚志）さんは優先してくれるんです。泳がせてくれる部分は泳がせてくれるし、あまりにも通用しないものは翻訳が入ります。それの連続でしたね。

今という時代にＭＳＶの精神性を振り返る

――小田さんご自身はこの時代にどんな印象を抱いていますか？

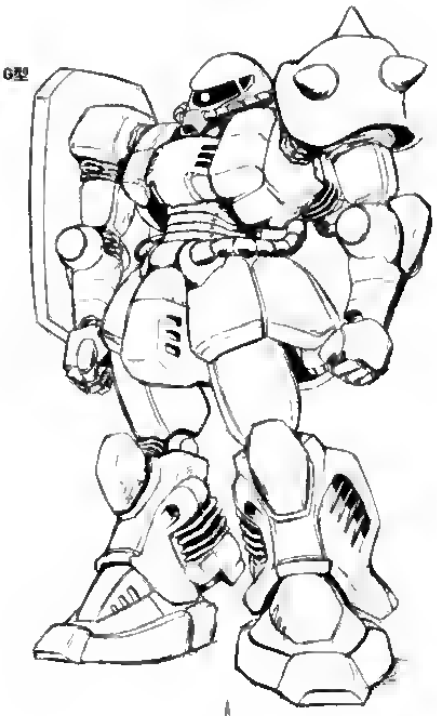
小田　ムチャクチャ忙しかったですね（笑）。丸三年ぐらい濃い暮らしをしていました。学校は単位を取るためだけに行っていましたし、卒論は２日で書き上げましたね。学校よりも断然こっちの仕事が面白かったわけですから（笑）。

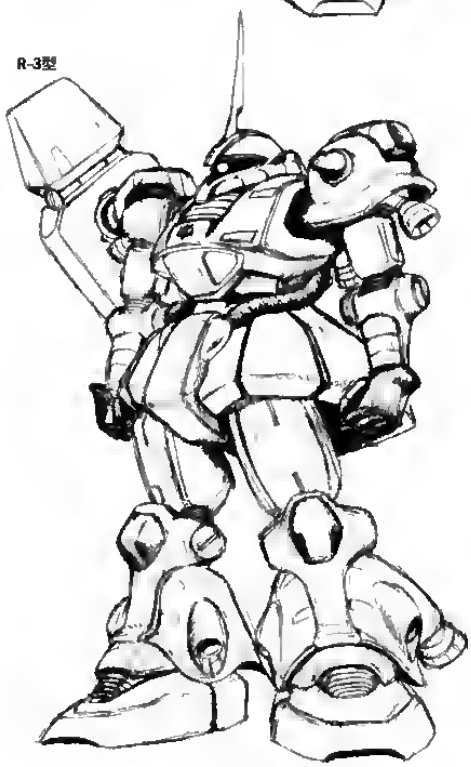
――ＭＳＶの終盤はＭＳ－Ｘへと移行していきますが、この企画はどのように捉えていましたか？

小田　実はＭＳ－Ｘのスタート地点がどこなのか、僕はさっぱりわかりません。企画書をいただいたときに、サンライズの飯塚（正夫）さんの文字で書かれた「ペズン」というワードがすでにあったという記憶が残っています。そこで決まっていたのは、脚本が星山（博之）さんで、デン・バザーク大佐というキャラクターがいて、ジオン掃討作戦を指揮するというものです。でもデザインはもう発注済みで、僕らが後から設定を考えつつ、型式番号も当てはめるような感じでしたね。

――小田さんはどのような機体に関わられたのでしょうか？

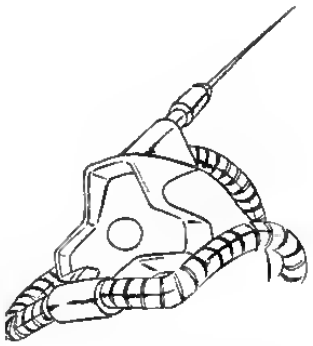
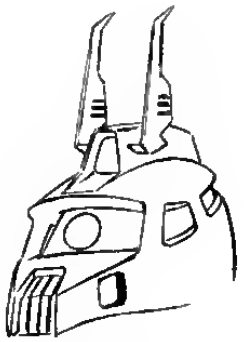
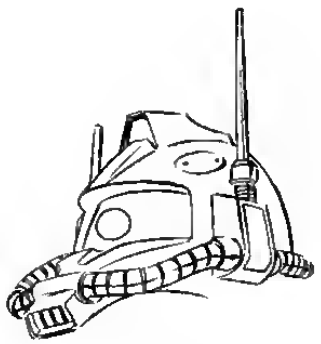
小田　いろんなアイデア出しをしてくれという中で、大気圏内のサ





小田さんの考えるザクのG型とR-3型

本書の機体解説でも、小田氏よりコメントを頂戴しているが、その中で「R型、G型は別々に発注したけれど、大河原氏がまとめる形で描いた」という旨の発言をされている。そんな小田氏が独自に考えていた 本来のザクの「G型」と、「R-3型」（未発表の草案）を、ご自身の著書である「カンダムデイス」でも触れている。ここに掲載されているイラストは、そんな小田氏が自著「カンダムデイズ」にメモとして描いたものだ（詳しい解説はぜひ「ガンダムデイズ」で。他にも多くのイラストが掲載されている）。現在知られているR型のザクと見比べてみると、また別のMSVの地平が見えてくるかもしれない。

ボートメカもずいぶん描きました。バストライナーもそうです。ジオン公国軍のスキウレもやりました。バストライナーに対する浮き砲台という考え方で。

こうした新たなデザインへの要求を考えていくと、MS-Xはどんな展開を目指していたかが見えてきますね。それは、モビルスーツは人形で、それは使う周辺メカを考えていくという流れです。プレイバリューの高い『ミクロマン』のような商品が理想だったのかもしれません。

――『機動戦士Zカンダム』がなければ、そのような方向性も実現していたのかもしれない、と。

小田 まあMS Xの頃になると、バンダイ側である程度、方法論が分かってきていたと思うんです。ですからバンダイ的にはサンライズ、大河原さん、そして設定を考える僕らに分担して作業を依頼する、というビジネス的な流れで進めたんでしょう。それこそ僕らは星山さんにお会いしていませんからね。そう考えるとMS-Xは、自然発生ではない初の「カウンター・ガンダム」だったといえるでしょう。

――MSVで残してきたことが、どのような影響を与えていると考えたことはありますか？

小田 うーん、周りの人や読者も付いてきてくれていると思っていたんですが、意外とそうじゃなかったという事は後で感じました。MSVには、いろんな仕掛けをしたりして、含みを持たせているんですけど、それに反応してくる人はいなかったんです。「えっ、これが分からないのかな？」という感じで、少し寂しかったですね。

――受け取る側の知識の差が影響したのでしょうか？

小田 当時、国内で出版されていたミリタリー関係の資料なんて、ごくわずかですよ。子どももおじいさんも、同じ資料を見ていましたから、当時のミリタリーの一般教養はみんな一緒でした。たとえばキマイラ隊なんて、あれは松山の343空（第343海軍航空隊）であり、Jv44（ドイツ空軍第44戦闘団）でもあるんです。でも、それは届きませんでした。あまりにも子どもの騒ぎになったので、そういうのが好きな人が『ガンダム』のフィールドに降りてこなかったかもしれません。

ベースのネタはあるんですよ。遊びとして、その土台の上に『ガンダム』を載せているだけなんです。面白いと感じている土台には、なにか元ネタがあるわけなんです。

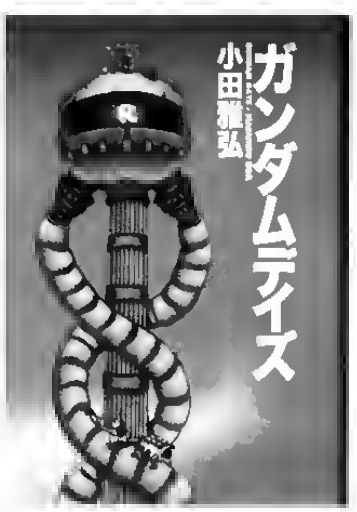
――詳しくは『ガンダムテイズ』を読んでいただけると、さらに詳しく事情が読み取れますね。振り返ってみて、MSVはどのようなムーブメントだったと感じられますか？

小田 MSVは自然群生だったんです。たとえるなら、あらゆる場所に物が生えてきて、それを市場に持って行ってお皿に盛りつけて出すのが僕の仕事でした。中には市場に持っていけない物もイノパイありましたね。

基本的にMSVには3つの柱があって、それがFSWS（フェデラル・スーツ・ウェポン・システム）と、キマイラ隊とビショップ計画が、ユーザーの受け皿という認識でした。「それぞれのお話に自分たちが想像して、チーム編成をしたり、物語の組み立てをしたら面白いでしょう？」という構成にしたつもりなんですが、目の前にあるものが「オフィシャルだ」と捉えてしまう子が多かったんでしょうね。そこから広がるものはなかったですね。今思うと受け皿として曖昧な部分を残すよりも、「こうなんだと言ってくれ」と、言われていた気がします。メカに関わる話って、ミステリアスな方が魅かれるじゃないですか？　誰もスカンクワークスの本当の姿を知らないし、ソビエトの全容を知ることなんてできません。

でも、そういう話の方がワクワクするんです。MSVは、そういう空気を反映していたと感じます。今だから当時描いていたMSVの精神性を、もう一度考えてみると面白いかもしれませんね。

これを読めば、さらにMSVがよくわかる!?



ガンダムテイズ

価格：2,500円+税
著者：小田雅弘
発行：トイズプレス

トイズプレスより刊行されている『TOYS UP!』誌にて創刊号から連載されている小田氏の連載コラム、『カンダムテイズ』が一冊にまとめられた。当時の模型業界やMSVの裏側なんかもわかっちゃう、ファン必読の一冊。好評発売中！

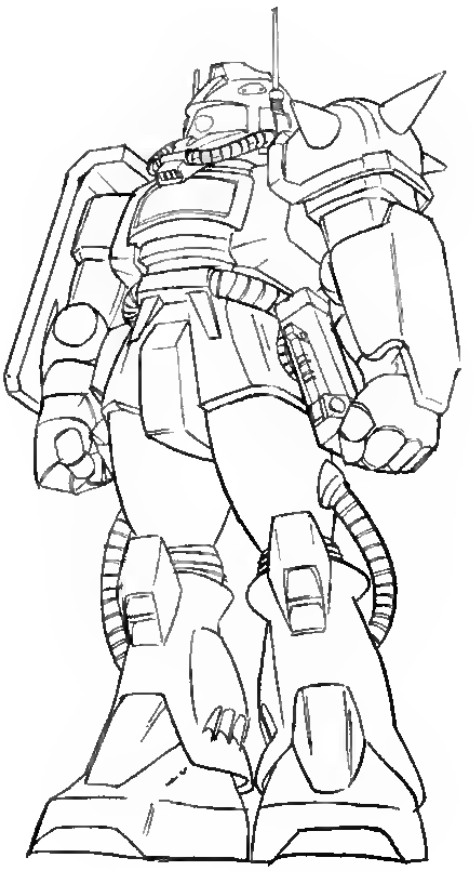
【 MSVの証言 3 】

BANDAI SPIRITS ホビー事業部

川口克己インタビュー

「ミニチュアのスクラッチが私のガンダム模型の出発点です」

1970年代後半から80年代初頭には、模型集団ストリームベースのモデラーとして模型誌などで活躍し、やがてマンガのキャラクターから実在の「川口名人」となり、今やガンプラの看板、いや顔役となっているBANDAI SPIRITSホビー事業部の川口克己氏。常に一線にあった模型の作り手として、当時のMSVというムーブメントを、そして現在を語っていただいた。



めぐりあわせの妙で加わっていたストリームベース

川口　いつも言っているんですが、ストリームベースというのは巡り合わせで生まれたものだと思っているんです。たまたま同じ「ホビーセンターえんどう」（渋谷区笹塚）という模型店に出入りしていたことで知り合って、そこから何か一緒に面白いことをやっていこう、というような感じでした。それは最初から狙っていたものではなくて、本当に偶然居合わせただけなんです。特に私は割とその調子でずっと、今の今まで来てしまったところがありますね（笑）。

――これは模型の世界だけに限らないことですが、MSVの頃の80年代というのは「どこどこの喫茶店に行くと同好の志が、みんな集まっていて……」、というような繋がり方がありましたよね。

川口　それぞれ色々なコミュニティーがあって、その中でそれぞれの人たちが、またそれぞれ違った価値観なりスタイルでやっていた。そういう意味ではストリームベースもそうなんです。一つのチームと思われるんですが、基本的にはユニットなんですよね。だから例えば、あるメンバーは『コミックボンボン』でやっていたり、別のメンバーは『ホビージャパン』で活躍していたり、個人それぞれが違うことをやっている。その中で、皆で何かやる時には合わさるというような感じなんです。みんな揃って一緒にやったのは、それこそ『ホビージャパン別冊HOW TO BUILD GUNDAM 1／2』ぐらいなんじゃないかな。

――どういうきっかけで、えんどうに行くようになったのですか？

川口　当時、私が住んでいたところから一番近いお店は、下北沢の「ホビーショップサニー」でした。でも笹塚の「えんどう」も京王線沿線で、学校の帰りに降りて寄る、ということも普通だった。それこそ私は当時高校生ぐらいでしたから、自転車を飛ばせばなんてことはない距離感です。そういう意味ではサニーとえんどうは拠点的な感じでしたね。

　サニーやえんどうというお店は、模型雑誌で活動しているモデラーさんも出入りするお店だったというのも大きかったですね。僕が通っていた当時、後藤仁さんがサニーで店番をやっていたこともあって、今考えるとスゴい話です。『ホビージャパン』とか『モデルアート』のモデラーさんが何人も、えんどうに出入りしていたりね。

――当時は明らかにスケールモデルが優位、というかキャラクターモデルがほとんど少数派の時代ですが、そういう別ジャンルや新しいものに抵抗がない中高生が中心になってガンプラブーム、ひいてはMSVの時代になっていったんでしょうか？

川口　私にしても、小田（雅弘）さんにしても（高橋）昌也にしても、それぞれスケールモデルで色々なものを作ってはいましたよ。でも、たまたま『機動戦士ガンダム』を皆見ていて、「ガンダムって面白いよね」という話になる。放送当時は、プラモデルはまだ発売されていなかったので、ミニチュアモデルをスクラッチしたりしましたね。その頃はまだボードゲームが流行っていて、遊ぶためのコマを自分で作るとか、そういう文化があった。

　その延長でモビルスーツを作ったのが最初ですね。そこから私たちが「ガンダム好き」と知られるようになって、えんどうの模型サークルの中で、『ホビージャパン』にも出入りしてるモデラーさんが「今度の『ホビージャパン』でSF特集をやるんだけど、そこで『ガンダム』を扱いたいから作るヤツいないか？」というような話がくるわけです。その時に小田さんと昌也と勝呂（眞弘）が「じゃあや

↑川口氏の手掛けたディオラマ作品というと　本文中でも触れた「HOW TO BUILD GUNDAM 2」に掲載された「ZION'S 砂漠の駐屯地」だろっ　たこの「1/144砂漠戦用ザク」のパッケージイラストをモチーフにした「砂漠の待ち伏せ」（バンダイの　模型情報　に掲載された）も捨てがたい（笑）。MSVのパッケージイラストは　当時熱狂していた子供たちの創作意欲を大いに掻き立てていた、

りますー」ということで、やったのがストリームベースの最初の活動といえるでしょうか。その時、名前はなかったんですが、えんどうの模型サークルは基本スケールモデルのサークルなので、キャラクターモデルの別班という形で、名前もちょっと変えていこう、ということでストリームベースが生まれたんですよ。

――えんどうのサークルでの年齢層の構成というのは、やはり高いのですか？

川口　私たちよりもっと上ですね。本当に年齢的には下っ端で、20～30代　…もっと上の世代の方たちもね。

――子どもの頃にそういう年齢の人たちと接すると、自分も大人になったような気分になれて楽しいですよね。

川口　そういうのはあって、やっぱり通いたくなるんですよ。色々なことを教えてくれますし。

70年代もタミヤのミリタリーミニチュア（ＭＭ）が、多くの男の子が通る趣味という感じで流行っていた時期でした。ただオイルショックでプラモデルの値段がものすごく上がってしまったので、ちょっと子供が手を出すにはハードルの高い趣味になってしまったんですが。その頃に『宇宙戦艦ヤマト』が流行り、そこで子供が模型を作る機会というのがやっぱりあった。ガンプラの前からプラモデルっていうのは、やはり男の子の趣味や流行りとして存在していたんですよね。

私が生まれたのは１９６１（昭和36）年で、今考えると戦争が終わってから20年も経っていない。やっぱり空気が今とは違いますね。生活のスタイル自体も、もちろんぜんぜん違うし、消費行動にしても「どこでプラモデルを買うか？」といったら、学校の側にある文房具屋さんでした。そういうのを経験していた人が、この時代にＭＳＶで面白がっていた人なんでしょう。

特にガンプラの頃っていうのは、戦車でも飛行機でも船でも考証が厳しくなって、ちょっと息苦しくなっていく感覚があった時代でした。模型の色々な知識や経験はあるんだけど、下手に作ることはできない。でも、モビルスーツだったら別に誰からも何を言われるということもないので、じゃあこっちでやってみよう、とガンプラに手を出した人は多いと思います。

ミリタリーが共通言語だったMSVの時代

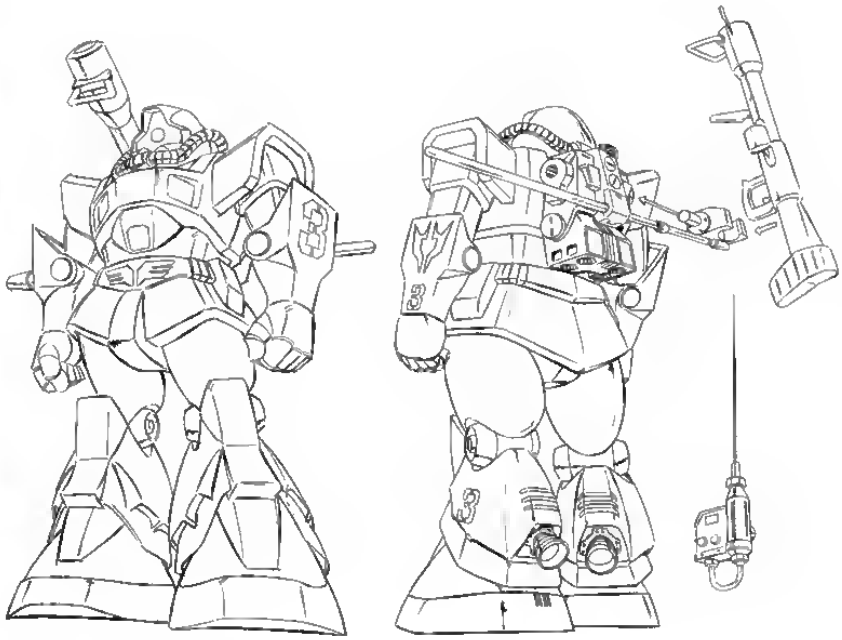
――若い世代が今度はキャラクターモデルの牽引車としての役割を果たす、というのは面白いですね。

川口　普通に考えれば、例えばデザイン画があればそれに合わせて作るとか、ＴＶの画に合わせて色を塗るというのがキャラクターモデルのやり方だと思うんですが、『ガンダム』の場合はミリタリー模型の要素が入った、というのが面白かったですね。模型経験がそんなにない方でも「ガンプラでこういうことをやっていいんだ」とか、「見たことないけどカノコいいじゃないか」というようにフノクが増えた形になったんでしょう。

――川口さんたちがストリームベースとして、雑誌などのメディアに協力するようになってきた頃、劇場版の『ガンダム』のムックなどで、大河原（邦男）さんのミリタリーテイストのイラストやザクのバリエーションが突然出てきましたよね。あれはかなり一大事だったと思うのですが、どんな印象でしたか？

川口　あの講談社の「劇場版　機動戦士ガンダム　アニメグラフノク」の４枚の絵を見せられた時に、こういうモビルスーツもいたかもしれない、ということと、模型的にすごく分かりやすい、ということは感じました。仕掛け人である安井尚志さんがプロデューサー、小田さんがディレクターのような感じだった、と私はよく言うんですけど、かくいう自分はＡＤ的な感じで動いて作例を作る、という役割でしたから、経緯だとか全容に関しては、ちょっと分からない部分はあります。

それでも、ポイントになる話は共有していましたね。基本的に戦記物に慣れ親しんでいた世代なので、ノリはそこにありますよ。それこそ使い古された言葉ですが、ゲルググは何なのかといったら、戦車をやっている人は「キングタイガーだ」と言うし、飛行機をやっている人は「Ｍｅ２６２だ」と言う。そういうイメージが共通言語としてあって、話ができたというのは、すごくあると思います。



1／100
YMS-09 プロトタイプドム

パノケーノイラストに描かれた機体の各所に見える「ハゲチョロ」といったトライプラノ塗装などは　実際に製品を作る際に参考にした人も多いはず。ただ　当時は個人の財政＝お小遣いに左右されることもあり、トライプラノの練習を1/144スケールの低価格帯キットで励み　それから1/100にトライしたものである。同時に関連雑誌に掲載される線画類も貴重な資料といえた。

MSVの機体やパイロノト設定は小田さんの戦記物のノリが間違いなくでていますし、『HOW TO BUILD GUNDAM 2』で、こういうシーンを作りたいとなったら、もっと具体的に「じゃあこれはノヴォトニー隊ね」とか「ジョニー・ライデンはヘルマン・グラーフだから」というような話になって、「なるほどアレか！」って皆がわかる。

――基本的には共通言語であっても、人によって解釈に細かい違いが出るところも面白いですよね。

川口　特にイラストになる時は結構違いがでますね。話をしながら設定を面白がって作っている段階から、絵を起こされていく段階で違う方がそこに入ります。そこは上田信さんだったり、増尾隆幸さんだったりなのですが、絵を描かれる方とどこまで共有できるか、その温度差があったりはしましたね。「ヘルマン・グラーフだって言ってるのに、RBはナシでしょ!?」となることもありましたが、そういうところも込みで、やはり面白がってやっていた部分はありますね。

――MSVは野放しで各人が好きにやったから広がったというのもありますね。

川口　その後、ゲームなど色々な形で機体やキャラがひとり歩きしていく、というのも私としては面白いと思いますよ。色々な人を介しながらそれが変化していくのは見ていて面白いです。

――とりあえず真似しやすい「ハゲチョロ塗装」は流行りました。

川口　表現としてはチノビングをモビルスーツに入れていく感覚なんですよ。もちろん実際にモビルスーツがあったとして、あんなハゲ方になるかといったら多分そうではなくて、ウソというか「らしさ」なんですけど。今まで作ってきたことで考えると、基本的には「もっともらしいウソをどうやってつくか」というのがガンプラだと思っています。汚し塗装のサビだって、ルナ・チタニウム合金は果たして錆びるのか、みたいなことを言い出すとキリがないんだけど、サビを付けることで長年使われている機械だ、というイメージを持たせることができるんです。

――考証の再現ではなくて、表現というか、そこで物語を語るということですよね。

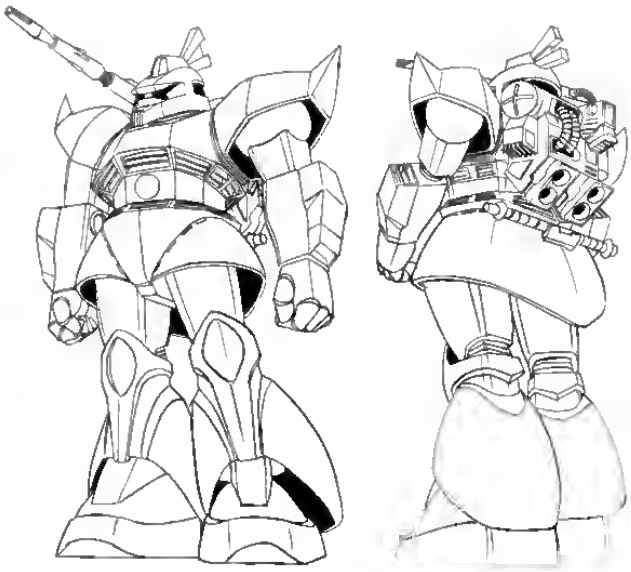
川口『HOW TO BUILD GUNDAM 2』で、みなさん砂漠のディオラマ作例を覚えているんじゃないかと思いますが、最初に配備されたドムは、機体はキズだらけになっているし、応急でサンドカラーに塗られたのもいる。

　一方、後から配備された新品の機体は、塗装パターンも色味も違っていたりする。そういう対比があると、極限の戦場、最前線にいる人たちという雰囲気が出て、物語になると思うんです。

――考証をしないといけないミリタリー系モデルと、塗装一つで物語を表現できる『ガンダム』というのは、絶妙なバランスですね。もっと自由な表現を求めて若い人たちがそっちに入っていく気持ちはわかります。

川口　先ほどもちょっと触れましたが、あの頃はドイツ機を作ろうとしたら「モノグラムのアノ本を持ってないとダメだ」なんて言われていましたし。ダメって言われても高くて買えない代物です。Bf109とか零戦とか大和とか、有名なものは考証が常に付いて回るので、ナカナカ手が出せない。あとはコソソリ家で作って満足するしかない、というような世界になってしまうと、ちょっと息苦しくなってしまう。

　でも『ガンダム』では誰かから何かを言われることもない。実物や実際の歴史があるわけではないですからね。「オレはこう思うからこう作った」という発想の部分の話をして、それを理解してもらえると、自分も満足できるし広が



1／144
MS-14B Jライデン少佐用ゲルググ

MSVシリーズは、代を重ねるごとにキットの内容や仕様が進化していった。この「MS-14B Jライデン少佐用ゲルググ」も上に掲載した「C型」いわゆるゲルググキャノンを再現できるコンバチ（選択式）キットであった。ただ、また多色成形などの技術は導入されていないため、素組みをすると、ややジョニー寄りの真っ赤な機体が出来上がるのだ（そもそも当時のキットを素組みするヤツなんかいないって）！

っていきますよね。

もちろん、考証を否定するつもりはまったくないし、それはそれで面白い世界です。なにか作ろうと思った時には、私もやっぱり資料を引っ張り出してきます。それは別にしんどいことではないし、自分が納得できるものを作るためのことです。考証をわかった上で、じゃあ違うものをやるとなれば自分の好みに取捨選択する。「HOW TO BUILD GUNDAM 2」をやる時、「HOW TO BUILD DIORAMAS」をみんな読みました。熱帯雨林はどういう土で、どういう植生で、ということを気にすると、作品として作っていく時にそれを反映できて、説得力のある面白いものになる。でも、そうでないといけない、というわけではなく、知っていると表現が面白くできる、ということです。知っていることで損はないと思います。それをどう使うか、使わないかというところがキモですよ。

――当時は月にどれくらいの模型作例を作っていたんですか？

川口　私は多作な方だと思います

が、ほぼ「ホビージャパン」で毎月やっていて、「コミックボンボン」でも2～3ヵ月に一回、あとは「模型情報」もありましたね。年間でいくと20点くらい作っていたんじゃないかな。

――その他にも色々雑務というか、打ち合わせだったりもあったりするわけですよね？

川口　当時は電話で済ませることも多かったです。メールはもちろんFAXもなかったですし。顔を合わせられれば、それにこしたことはないですけれど。編集部で顔合わせしたり、喫茶店で話したりもありましたが、それができなければ電話ですね。塗装の指示も電話で受けたりしました。そんなに外してなかったとは思います。

――小田さんは、川口さんが作ってきたものを見て感化されて設定を変えたりしたそうですが……。

川口　そういっていただけるとありがたいですね。自分では一番印象に残っているのが、「ホビージャパン」で、スクラッチでやらせてもらった時、「ザクの形のとり方、特に後ろ姿は理想的だね」と言われたのを覚えていますね。「ホビージャパン」にしても「コミックボンボン」にしても、本というメディアで発表する、その撮影のために人が集まってくる、そういう場面で鑑賞に耐えるものを作らないといけないので、それは切磋琢磨ですよ。

「カワグチメイジン」とMSVの未来はどうなるか

――川口さんはマンガのキャラにもなりました。

川口　正直、こっ恥ずかしい気持ちはありましたけど、模型雑誌に作例を発表するということは、気持ちの中には承認欲求が当然ありますから、それが満たされるというので、ある意味、心躍るところはありましたよ。模型の世界ってそんなに大きくない、趣味の人たちのものですけど、「コミックボンボン」という読者の多い雑誌のマンガでとなると認知力は非常に大きいものがあります。当時、「コミックボンボン」を読んでいる子どもをもつ親が、父の勤めていた会社の同僚にもいて、私のことが話題に出てくるって、ちょっと誇らしげに父が言うんですよ。その時は「いや、そんな大層なものでもないんだけどさ」なんて言ったりはしましたが、そういうのもやっぱり自分の中では、めぐり合わせの中で生まれた宝になってます。

――名人という呼び方はいつ頃からなんですか？

川口　正式には「超戦士ガンダム野郎」というマンガで出てきたのが最初なんです。バンダイの小宮山（善一）さんから電話で「ボンボンのマンガで出すけどいい？」って聞かれて、別に拒むものでもないのでOKしたら名人になって

いました。ただ当時は、バンダイの社員が「指導員」として、ちょくちょく表に出ていたので、その一環といえば一環なんですけど。明確に言われるようになったのは、マスターグレードの企画の時ですね。当時『ホビージャパン』の佐藤（忠博）編集長に名人と呼ばれていて、それが定着した感じです。そのちょっと後に海外でコンテストを定期的にやるようになって、その際に「MEIJIN」という呼称がなんとなくそれっぽい、ということで海外でも定着しました中国でも〝老師〟じゃなくて〝名人〟ですね。

ただ、歳も歳なので、後継者はどうするんだ？　という話はちょくちょくでてきます。とはいえ、こんな変な経歴を持っているヤツはいないので、二代目を据えるのは難しいと思います。「名人」をシステムとして、オペレーションできる形を作っていくしかない。

オリンピックイヤーがガンプラ世界選手権10周年にあたりますが、そのあたりがシステムの切り替え時かな、と色々考えたりはしています。

――40代、50代のファン層にしてみれば、ストリームベースのモテラー、その下ならマスターグレードの発起人という、常にガンプラの第一線にいた人物という認識が川口さんに対してはありますけど、突然、別の人が現れて「今日から名人です」と言われても、それはそれで難しいですよね。

川口　今の時代はSNSで様々な人がいろんな形で名乗りを挙げることができる。そこにはスゴい人もイソバイいます。それを普段見ていると、では何をもって名人なのか、というのは難しいところです。

でも、お台場のガンダムベース東京にはマイスターと呼ばれる人たちがいるし、スタッフにも作る人はいる。そこから生まれてくるなら「アリか」と思っているんですけど。バンダイ社員だと社内事情も絡んで、長い間、単一事業部に留まるのが難しい。そういう意味では、ガンダムベース東京出身というのは面白いかもしれません。

――MSV自体もこの先どうするか、というのもあります。単なる形骸的バリエーションになってしまうと、そこで何を遊ぶのか？というのがナカナカ難しい。

川口　MSVをスタートした当時は、受け手側も送り手側も同じマインドで話ができた。でもこれだけ時間が経つと、受ける側も世代が広がってきて、今は同じようにはもうできないじゃないですか。だから、それぞれがMSVと思うものを、それぞれがやっていくしかないんだと思います。「カノコいい」と感じるものは、みな何かしらある。『機動戦士ガンダムサンダーボルト』のような、現在の作品にも、そういうものは出てきます。作者の太田垣康男さんはMSVが大好きだとお聞きしていますし。それぞれの世代に「これはいいもの、格好いいもの」というマインドがあっていいんじゃないかと思います。

国産プラモデルの歴史が60年くらいあって、その中でガンプラの歴史が40年近くある。そういった意味では、今はガンプラ自体がカテゴリーになっています。そうなると色んな人が色んな形で接している。素組みする人、新製品を追っかける人、それぞれ別で、全然いいと思うんです。ただ、カテゴリーとなってきたことで、様式なりが生まれて、それが引き継がれるんだろうな、と思うんですが、そのためにデッドエンドに陥ってしまう危惧はいつも感じています。「こうしなきゃいけない、こう楽しまなきゃいけない」という感覚にみんな寄っていってしまうのは、窮屈に拍車をかけることになってしまう。「06Rはこう作らないとイカん！」なんて言う人がいたら、いや、イカんなんて言うことはないでしょう、と私は言いたい。

――考証から自由になるためだったはずのものが、いつの間にかそれが考証化してしまうと。

川口　MSVには皆が面白がったものが確かにありました。ただそのノスタルジーだけで40年きてしまうと、それはそれで問題があります。ノスタルジーは普遍的なものではないですから。私はガンプラのコンテストイベントで審査員をやっていますが「どういう作品が入賞できるのか？」と、よく聞かれます。キレイに作るのか、派手に盛ればいいのか、アートみたいにするのか、とかね。でもそれは手段であって、「自分が何を作りたいか」を表現するためのアプローチでしかない。

MSVにしても当時、僕らが作りたかったものを表現していく上での道標だったんですよ。面白い、楽しい、ちょっと作ってみたい、というのがやっぱり、私たちがMSVを当時やっていて楽しかった部分です。今はMSVという形に乗っかっていくだけで、面白いとか楽しいの部分がなくなっているのでは？　というのは正直あると思います。これからの人も、うまいこと「面白い」というところに持っていってくれるといいな、とは思います。

←↓本書の小田氏単独インタビューでも触れられているが、当時のカンプラーンをたしなむ人々にとって　この「HOW TO BUILD GUNDAM 2（HTBG 2）」は　まさにバイブルといって過言ではないだろう。数多くのデキのいい作例にクラクラしながら　自身の制作意欲に発破をかけたプラモ小僧は少なくない。中でもノュアノグのフルスクラノチモデルは、ストリームベースによる作例で、製品が発売されるよりも先のことで（HTBG 2の発売は82年の5月で　ノュアノグのキノトは3ヵ月後の同年8月）大いに驚かされた。

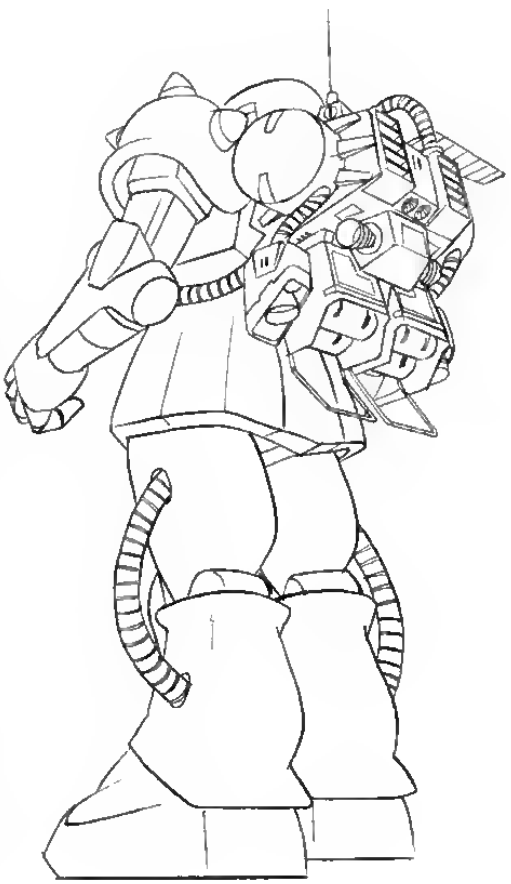
【 MSVの証言 4 】

元バンダイ模型開発部

松本悟インタビュー

「バンダイとしては、ガンプラを続けていくために次のネタが欲しい、というのが本心からの願いだったんです」

松本悟氏は80年代初頭のバンダイ模型（当時）において、ガンプラ等の設計開発を担当し、その後、ガンプラブームを経て、日本サンライズ（当時）作品の製品開発にも数多く携わり、バンダイ模型の技術部や開発部の部長を歴任された方だ（後にサンライスの専務取締役にも就任）。バンタイのプラモテル、ならひにガンプラの発展を支えてきたキーパーソンの一人である松本氏に、メーカーサイドから見た当時のMSVシリーズ製品化における裏話などとを語っていただいた。



ガンプラブームを経たMSV黎明期のバンダイ

――MSV前夜の時代背景として、当時はガンダムのプラモデル市場が急成長した時期でした。しかし、そもそもプラモデル製品は「機動戦士ガンダム」放送後の誕生になります。

松本　実は代理店の創通エージェンシー（現・創通）との交渉時には他社からもプラモデルの企画が出されていたんです。その中でバンダイの提示した条件を選んでいただき、放送翌年の80年7月に発売の「1／144ガンダム」（および1／100）からスタートとなりました。その後、2～3年で『ガンダム』のモビルスーツをはしめとした主なアイテムは、ほとんど製品化してしまいました。バンダイとしては『ガンダム』の続きを作ってほしい、というスタンスだったのですが、その時のサンライズとしては、『ガンダム』はすでに終わっている作品という考え方だった。劇場版などは作られましたがアレ以降を作る気はない、ということだったんです。

そしてサンライズ、バンダイ、ガンプラという関係の中でせめぎ合いとなっていきました　ファンの中ではミリタリー模型的に作例を作る人たちが現れ、「ホビージャパン」などの模型雑誌でも、そうした作例が数多く取り上げられるなど、『ガンダム』再認識の動きもあったのですが、それでもサンライズとして続編は作る気はない、と、『ガンダム』はＴＶシリーズとしては打ち切り作品だったわけです。スポンサーの件など様々な理由はあったわけですが、やはりそうしたこともあってサンライズ、そして富野喜幸（現・由悠季）監督としても思うところは多々あったと思うんです。なので、「アレはもう終わったものだ」という気持ち、それが先行していたんだと思います。

しかしバンダイとしては、ガンプラを続けていくために「次のネタが欲しい」というのが本心からの願いだったんです。そんな中、ＭＳＶの話が安井尚志さんや小田雅弘さんたちストリームベースの面々、そして講談社とバンダイの関係の中でパラレルに進んでいきました。

――バンダイのスタンスとして『ガンダム』の続編をもっとも望んでいた、というわけですね。

松本　そうです　それが『機動戦士Ｚガンダム』で叶うわけですが、その間もガンプラを市場に絶やさないために側面から様々な手を打っていった、その一つがＭＳＶだったわけです。

――安井さんや小田さんなどとは、どのような感じで話が進んでいったのでしょうか？

松本　安井さんや小田さんとはガンプラをはじめる以前から交流があったんです　なので、ＭＳＶの製品化に向けた企画会議を行い、という感じで立ち上げていったわけではないんです　知り合いが集まって「こんなのどう？」「それいいじゃない、やろうよ」っていう、そんな感じで立ち上がっていったわけです。企画会議ではなく情報交換の場ですね。

「ホビージャパン」の改造作例記事の話や、巷でのガンプラファンの動向について話してくれる、という感じでした　キットの欠点についても色々と言われましたよ。後にそうした意見はＭＳＶでもフィードバックされていくのですが、『ガンダム』のシリーズをやっていた当時は、３００円前後という価格帯の制限もあるし、シリーズ展開中にそうした改修や対応などは早々にできなくて悔しい思いをしました

――ストリームベースの皆さんもそうですが、ある模型屋を拠点にしてファンが集まって、模型の社会ができていたということですが、それらある意味、当時の最先端に

当時のカタログから【Prat I】

上はリアルタイプシリーズを紹介するバンダイのカタログ。ただ　掲載されている各モビルスーツの写真は　モノクロだと判別し難いが　実際のパッケージに載っていた製品写真とは色味が異なる（トムなどには迷彩カラーで塗装がされている）　下は試作メカシリーズを紹介したパンフレットだが　82年の夏から秋ごろにかけて発売された製品もラインナップとして掲載されている。そこに掲載されている試作品の製品見本の数々は、小田さんをはじめストリームベースなどのモデラーたちが手がけていた。

1／100
リアルタイプガンダム

本文インタビュー中でも触れられているが MSVシリーズを展開するための「様子見」として企図された製品といえるリアルタイプシリーズ。成形色を暗色系に変え　様々なマーキングを再現した水転写デカールが付属しているが　基本的には「1/100ガンダム」と仕様は同じである。82年2月からシリーズ展開され　合計7種が発売された。

いるファンの意見をどう取り入れていくのかも大変だったのでは？

松本　実は集まるグループごと、チームごとで意見が違っていたりするんです。そのどれを取るか、という選択は大変でした。どちらかの意見を取り入れてしまうと、ほかの違うチームの方は「えーっ」となるわけで、そこは模型誌の作例などを見ながら、こちらで上手く調整して取り入れていくしかなかったですね。

スケールモデルとして展開されるガンプラ

――メーカーのバンダイとして、ガンプラを絶やしたくない、というのはガンプラブームにおける爆発的人気を考えると当然と思います。松本さんとしては「なぜあそこまでヒットしたのか」という点で、どうお考えになっていましたか？

松本　それまでプラモデルというのは、すごくマニアな嗜好の中で発展してきました。特にミリタリーブームというのは大きかったと思います。そうした背景に『ガンダム』の部隊や機能で分かれたモビルスーツの設定などが「ピタリとハマった」ということではないかと思います。当時はミリタリーのモデラーの中に、戦車のプラモデルは、出し尽くされたという感じもあって、でもモデラーとしては何か作りたい。その欲求の向かう先として『ガンダム』に目が向いていった、ということだと思います。ガンプラの登場と、ミリタリーブームの次を求めていた層とが、そこで上手くマッチングしたというのも大きかったと思います。

――そうした（大人の）モデラーが作った作例を雑誌などで見て、それに憧れた子供たちが、さらにガンプラファンになっていった、というのはありますね。さらに当時はSFブームでもありましたし。

松本　そうですね。ミリタリーの発展型として、宇宙に題材を求めるという流れもあったと思います。

――ミリタリーということでは、ガンプラに「1／144」など縮尺スケールが明記されたのも、そうした流れからでしょうか？

松本『ガンダム』以前から、300円前後の価格帯のキャラクターモデルをバンダイでは出していて（ベストメカコレクションシリーズ）、それがボビュラーになっていました　3オンスというバソケージの中で1～2枚のランナーに収まるサイズですが、ガンプラも最初はここから始まりました。

　まだいきなり大きなサイズで価格も高いものに挑戦する度胸が当時はなかったということですが、一方で私個人として「国際規格の縮尺スケールのものを作りたい」という思いが元々あったんです。そこで300円の枠の中にはめてみて、たまたま1／144というサイズ、実際は正確には割り切れないのですが、これにしようと決めたんです。

――アニメモデルに戦車や航空機などと同じ様なスケール表記が入っている、というのが子供心としても衝撃的でした。

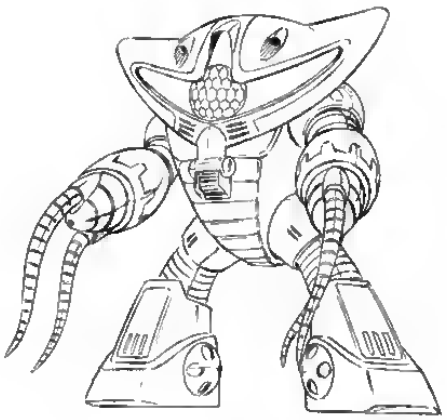
松本『ガンダム』以前の『宇宙戦艦ヤマト』の時には、スケール統一ができずに、製品サイズがバラバラになってしまっていたので、「ガンプラではコレクションして一つの場に並べてみて、違和感のないサイズ」ということは考えていました。

――当時の子供にしてみると『コミックボンボン』やバンダイの製品情報が掲載された小冊子『模型情報』の記事は楽しみにしていました。そうした多数の媒体がガンプラ、そしてMSVなどをひとつにまとめていくわけですが、そうした仕掛けをする船頭は一体誰なんだろう、と後に思ったものです。

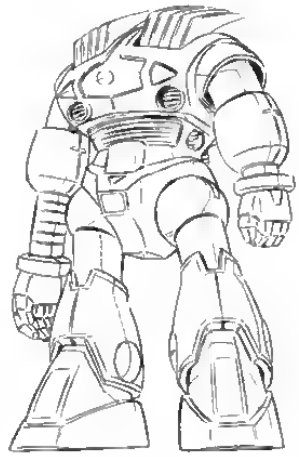
松本　それはやはり安井さんの存在が大きかったと思います。バンダイもスポンサーとして、広告宣伝などはやっていましたが、いわゆる情報出しというのは、やってなかったんです。商品以外の記事も載るというのは、バンダイとして『模型情報』が初めてのことだったんです。

　これはバンダイとしても画期的なことでした。

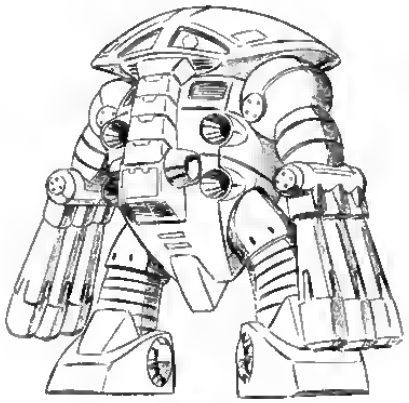
――模型店や玩具屋などで『模型情報』を手に入れて、そのネタを



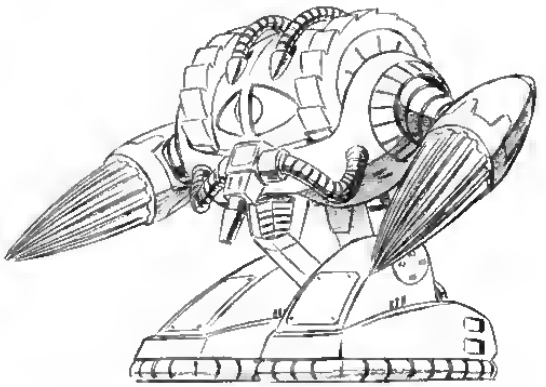
アッグガイ



ゾゴック



シュアッグ



アッグ

もう一つのMSVの試金石 試作メカシリーズの設定画

この4点の設定線画は　それぞれバンダイのプラモデル用に描き起こされた設定線画である（この線画を利用してシュアッグやアッグガイのバリエーション機体も起こされ、雑誌などに掲載されている）。これらの線画を基に木型（モックアップ）模型が創られ　金型用の図面が起こされる。当時の木型は実際の製品の仕上がり寸法よりもかなり大きいため、図面に起こす際は縮尺図面で描かれている（もちろん手描き）。試作メカシリーズは82年7月から発売され　合計で全7種が発売された

友人たちと話す、というのも当時の楽しみの一つでした。

松本　これが生まれた背景は、やはりタミヤなんです　『タミヤニュース』とか、人形改造コンテストとか、やられていますよね　あれに勝とうという思いがありました。だから『模型情報』の判型も、縦長のあのサイズだったんです。タミヤを非常に意識していましたMSVのパッケージのデザインなども、タミヤの影響が大きかったと思います　それがスケールモデルのイメージだったと思います。

――それまでのキャラクタープラモデルにない絵柄を使ったりとかしていました。以前、小田さんも仰っていたのですが、MSVでは「1　144MS・06Eザク強行偵察型」や「1　144MS・06Fザクマインレイヤー」のパッケージイラストなどでは怒られたと。情景イラストで、商品であるザクの全身像や正面が描かれていないから、と。

松本　営業的には怒りますよね。でも開発のこちら側の思う通りにやっちゃおう、ということで進めたんです。これは模型開発に関しては営業ではなく静岡工場の開発部門が主導権を持っていたというのが大きいと思います。

――パッケージもですが、ミリタリー感にあふれたMSVは、子供層より青年向きの趣がある製品仕様でした。

松本　実は最初に対象年齢層を下げてしまうと、値段の高い安いに関わらず、その後になると、年齢層は上がってこないんです　そういう経験則もあってMSVでは、その前の『ヤマト』でもそうでしたが、最初から年齢層は高いところに置いておこうというのがポリシーでした。

――子供は背伸びしたいものですから、ちょっと上の年齢向きの商品でも付いてきてくれますしね。

MSVシリーズの市場が醸成されるまで

――MSVがシリーズ展開されるまでに、「試作メカシリーズ」や「リアルタイプシリーズ」などが発売され、市場の反応を図ることもしていたと思うのですが。

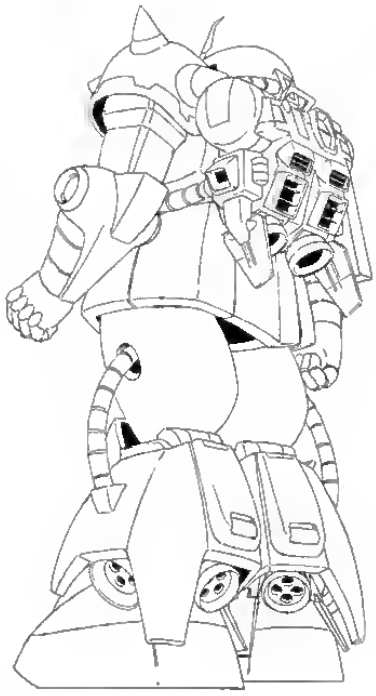
松本　モデラーさんからの反応に対して「既存の製品を作り直したい」というのが本音でした。でもそれは到底できないことなので、成形色を変え、デカールなどを付けて外観だけ整えるということから始めたわけです。それで当たりを付けて情報も吸い上げて、MSVでは「どうせなら作り直そうよ」というところまで行ったんです最初からそこに行けなかったこちらの弱さもあります。そこにはメーカーとしての大人の都合もあったんです（苦笑）。

――MSVシリーズですが、立ち上げ時にバンダイ社内としてどの

⬆「MS-06Rザク Ⅱ」の組立説明書。MSVシリーズの説明書は　製品を組み立てるだけでなく　そこに書かれている機体解説も魅力的　かつ貴重な情報源であった。それと同時にバリエーション機のカラー見本も載　ていた。「MS-06Rザク Ⅱ」の場合　シン・マツナガ専用機も紹介されているのだが　肩部のスリットに「アレ　部品にスリット入ってないけど。どうやって作るの!?」と困惑する子供がいたとか。いないとか　。

記念すべきMSV第一弾、MS-06Rザク Ⅱ!

通称「06R」などと呼ばれる　MSVシリーズプラモデルの第一弾「MS-06Rザク Ⅱ」のパッケージ（1/144スケール　黒い三連星機などの表記はない）。イラストはMSVシリーズをはじめ。バンダイのプラモデルなどで数多くの作品を手掛けた石橋健一氏。これ以外にザクキャノン(1/144)　プロトタイプトム(1/144)がリリースされた。



ような受け止め方をされていたのですか？

松本　企画を営業などにかけていく過程では反対もされました。役員会議のプレゼンでも「もうガンダムはやめたら？」「ポピーと同じ路線をやらないのか」などの意見もあったんです。営業的感覚では、当時の『ガンダム』は終ったもの、今でいう「オワコン」といった認識でした。

――確かに続編が展開しているわけでもないし、それよりも新作ものをやった方が賢明と思ってしまいそうですね。しかしそんな瀬戸際も乗り越えMSVは製品化されますが、その決め手となる要因はなんでしょう？

松本　リアルタイプガンダム」の販売実績が良かったことも大きかったと思います。売れてなかったらMSVの商品化はなかったかもしれませんね。

――そんなMSVの第1弾が、先ほども触れました黒い三連星のR型ザクですが、これが選ばれた理由は？

松本　ザクが一番売れるという目算からでした。またベストメカコレクションとしての展開当時から、「改修するならザクから」と思っていたんです。何しろガンダムは主人公メカで、塗装も白青赤のトリコロールカラーなので、まずないなと（笑）。

――トリコロールカラーは、アンチミリタリーですからね。

松本　そうなんですよ。なのでガンダムではなくザクからなんです。

――「MSV」というシリーズ表記もプラモデルが最初だったと思うのですが……。

松本　雑誌などで安井さんたちが使っていたものをそのまま使ったと思います。はっきりとは覚えていないんですけど。

渇望していた『ガンダム』の続編とMSVの関係

――MSVの製品についてですが、当時はTVCMを打つなど広告宣伝もかなり力入れていたと思うのですが。ジョニー・ライデン少佐もあのCMで覚えたという人もいました。

松本　実はあのCMに関しては静岡工場の開発部門は、内容にノータッチなんです。ただ、当時はCGなどもなく製品そのものを使っての撮影ですから、多数の組み上がったガンプラが必要だったんです。で、それを用意するのはこちらの仕事でした。だから会社の業務時間だけでなく、自宅に持ち帰って組み立てるというようなことを部内でやっていました　ザクが何体も必要だったりして、本当に大変でした。「なんで、静岡で作らせるんだ」と思いながら（笑）。

――例の「ジオン脅威のメカニズム」というCMですね。ジオン公国の製造工場で続々とザクが出てくるのが印象的でした。そうして広告にも力を入れていた印象のMSVシリーズですが、実際の売り上げというのはどうだったのでしょうか？

松本　当時のバンダイの経営陣は「ガンダム」の力を信じてなかったわけです。そんな中でやっていたこちらとしては売れてもらわなければ困るという状況でした。おかげさまで『ガンダム』の力を再認識させるものとなりました。

――そんなMSVですが、続編としてMS・Xの展開が予定される

中、『Zガンダム』の放送決定を受けて、シリーズ展開そのものが終了するわけですが、そのまま展開を継続していく方向はなかったのですか？

松本　『ガンダム』の続編を作って欲しいというのは、長年の要望だったんです。それが決まったわけですから、やはり新作の方に力を入れていくという意味でも終了しかなかったかと思います。

――MSVファンの中にはアニメでジョニー・ライテンが見たいというような意見もありましたが、そのような機運はありませんでしたか？

松本　サンライズとしては、やはりMSVはサンライズ発のオリジナル作品ではない、というのが引っかかっていたのではないでしょうか。その認識は今でも残っていると思います。当時、安井さんたちがサンライズとどうお付き合いしていたかは知りませんが、私の方はMSVのラインで、サンライズとは接触しませんでした。

――ただ『Zガンダム』にはMSVの機体が登場します。これでMSVは公式に認められたと思うのですが。

松本　あれはバンダイの営業からサンライズに強く働きかけた結果ですから。開発部から特にということではありませんでした

今もガンプラの開発に継承される開発魂

――こうして大成功を収めたMSVですが、ビジネスモデルとしの成り立ちなどもユニークですし、例のないものでした。

松本　メディアと連携してのオリジナル。商品を売るため、というよりも新しい設定を作り上げるというものですね。『ガンダム』の限られたキャラクターの中から、はみ出た物ですから。

――改めて『ガンダム』とガンプラについて現在どのように考えられていますか？

松本　現在のバンダイホビーセンターは、私がやっていた当時と比べて数段技術レベルが上がっているわけです。加工技術から、はめ込みの精度など様々な技術ですね。

　そしてあれだけのパーツ数があっても接着剤なしでちゃんと組み立てられる。これは設計が凄いと私は思います。私がやっていた時期は、設計にCADやCAMが導入されはじめの頃で、まだ他社もやっていないCADの導入を30年前からやっていたんです。あれがあったので、今のガンプラシリーズでは、CGで設計が当たり前のところまできました。他社にはできない多色成形の開発導入も含めて、開発としての商品のグレードも上がりました。

　また昔の子どもが、手を接着剤でベトベトにしながら作っていたガンプラ、そんな経験をした子どもたちが今、大人になりガンプラを買って作ったとして、製品の技術進歩に感動があると思うんです。そうなったのも、自画自賛するってことも含めていうと、当時からガンプラは、ちゃんと開発としてやっていこうという方針のもと進めてきました。それを継続してきたという自負心はあるんです。

　そして静岡工場でその伝統を継いで今もやっているということで、今もガンプラが続いていると思うんです。あの時、重役会で「やめます」って言っていたら、今の最新ガンプラはないわけです。

――当時、ガンプラやMSVシリーズを頑張った人たちが、今のガンダムワールドの一部の柱を確実に支えているということですね。

松本　そうだと思います。現在はガンプラだけでなくゲームなども含めて、バンダイグループの「ガンダムシリーズ」のビジネスは巨大な物になっています。それも継続してきた力といえると思います。

当時のカタログから【Prat II】

⬆MSVシリーズ展開当初のパンフレットなので　掲載されている各機体の見本写真が、実際の製品とは異なる部分が見受けられるのが興味深い点（いずれも小田氏や川口氏が手掛けた試作品であり　ランドセル形状の異なるデザートタイプなどは追加設定が起こされる前に作られたモデルだ）。当時の子供たちにしてみれば　急造による差異よりも　これから展開される新シリーズに胸躍らせたのである。

⬆同じMSVのカタログでも　こちらは上のものより後に配布されていたもの（時期としては83年の初夏ごろか？）。各説明書に付記されていた機体解説よりも分量は圧倒的に少ないが　こうした情報の掲載が製品への興味と購買意欲を刺激していた。またこの段階では、パーフェクトジオングは1/144スケールでの製品化を予定していた。

森下直親画集2　鋼鬼 HAGANE ONI

A4サイズ　定価2,778円+税

MS図鑑 ジム

A4サイズ　定価1,800円+税

機動戦士ガンダムユニコーン RE:0096 メカニック・コンプリートブック

B5判カバー付　定価1,500円+税

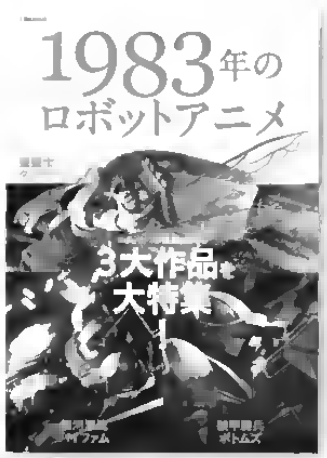
クレートメカニックスペシャル

機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ メカニック&ワールド弐

A4判カバー付　定価1,900円+税

1983年のロボットアニメ

B5判カバー付　定価1,500円+税



グレートメカニック & 関連書籍シリーズ

グレートメカニックG 2018 AUTUMN

A4サイズ　定価1,000円+税

今もう一度見る　超時空要塞マクロス TVシリーズ

30周年! 魔神英雄伝ワタル

- 機動戦士ガンダムNT
- ガンダムビルドダイバース
- コードギアス 反逆のルルーシュ 劇場3部作
- 新幹線変形ロボ シンカリオン
- 機神機バンドーラ
- フルメタル・パニック! Invisible Victory
- ゾイドワイルド
- INTERVIEWS
  河森正治　宮武一貴　松崎健一
  広井王子　福井晴敏　大畑晃一　他

バックナンバーをご希望の方は、
お近くの書店にご注文ください。

双葉社

〒162 8540　東京都新宿区東五軒町3-28
☎03-5261-4818（営業）　http //www futabasha co jp/
（双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます）

※書店・HP以外し、書話・FAX・はがきでもご購入いただけます。
ブックサービス（営業時間　9~18時）
☎0120-29-9625（携帯電話も可）
FAX0120-29-9635
いずれの場合も「社名（双葉社）、タイトル、購入冊数、
定価および住所，氏名　電話番号」をお知らせください。

グレートメカニックG 2018 SUMMER

A4サイズ　定価1,000円+税

今もう一度見る
機動戦士Zガンダム

特集「国際映画社」の
80年代アニメロボ

20周年! カウボーイビバップ

- 機動戦士ガンダムNT
- 機動戦士ガンダム00
- ガンダムビルドダイバース
- コードギアス 反逆のルルーシュ
  劇場3部作
- INTERVIEWS
  富野由悠季　四社たかお　水島精二
  谷口悟朗　山賀公利　海老川兼武
  輝畑牧之　他

グレートメカニックG 2018 SPRING

A4サイズ　定価1,000円+税

大特集
伝説巨神イデオン

45年ふりの復活!
マジンガーZ／INFINITY

コードギアス
反逆のルルーシュ

- 劇場版マクロスΔ 激情のワルキューレ
- ガンダムビルドダイバーズ &
  ガンダムビルドファイターズ バトローグ
- フルメタル・パニック! IV
- INTERVIEWS
  潮川友優　樋口雄一　大張正己
  貴東招二　海老川兼武　他

グレートメカニックG 2017 WINTER

A4サイズ　定価1,000円+税

30周年直前大特集!
機動戦士ガンダム
逆襲のシャア

10周年記念
機動戦士ガンダム00

総力特集
無敵鋼人ダイターン3

- 機動戦士ガンダムサンダーボルト
  BANDIT FLOWER
- INTERVIEWS
  富野由悠季　大河原邦男　水島精二
  松尾衛　海老川兼武　他

MSV
THE FIRST

2018年11月21日発行

構成　オフィスJ・B
　　旭和則（双葉社）
執筆　河合宏之　星★馨介　市ヶ谷ハジメ
　　栗波健一郎　やすゆきゆたか
　　小高正稔　河原よしえ
MSVイラストレーション　大河原邦男　石橋謙一　上田信
　　長谷川政幸　増尾隆幸
本文イラスト　森下直親
デザイン　岡本浩樹（water planet）
監修・協力　井上幸一
　　小田雅弘
　　㈱サンライズ
　　㈱BANDAI SPIRITS ホビー事業部
　　柳沢仁（アーミック）

構築人　二之宮隆
発行人　島野浩二
発行所　株式会社双葉社
〒162-8540
東京都新宿区東五軒町3-28
☎03-5261-4818（営業）
☎03-5261-4869（編集）
http://www.futabasha.co.jp/
双葉社の書籍・コミック・ムックが買えます
印刷所　三晃印刷株式会社

※落丁・乱丁の場合は送料双葉社負担でお取り替えいたします
製作部　あてにお送りください　ただし　古書店で購入したものについてはお取り替えできません　☎03-5261-4822（製作部）
※本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています　本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です
※定価はカバーに表示してあります

©創通　サンライズ
©FUTABASHA 2018　Printed in Japan

MSV
THE FIRST

MSV
THE FIRST

9784575465129

定価：本体1800円＋税
雑誌 63982-89 Printed in Japan © Hobby Japan / Kadokawa Shoten 2015

ISBN978-4-575-46512-9
C9476 ¥1800E

1929476018007

グレートメカニックスペシャル

MSV

ザ・ファースト

初期MSVの原点がここに!!

双葉社

グレートメカニックスペシャル

MSV

ザ・ファースト

初期MSVの原点がここに!!

双葉社